

仙台市文化財調査報告書第286集

陸奥国分尼寺跡

—第10次発掘調査報告書—

2005年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第286集

陸奥国分尼寺跡

—第10次発掘調査報告書—



陸奥国分尼寺跡周辺航空写真

2005年3月

仙台市教育委員会



SB1掘立柱建物跡（西妻部・東から）



SB1掘立柱建物跡（7トレンチ東側部・東から）



1



2



3



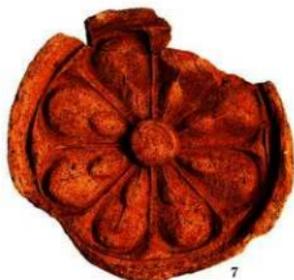
4



5



6



7

- 1 第60图-11
- 2 第8图-7
- 3 第35图-7
- 4 第8图-8
- 5 第51图-1
- 6 第51图-2
- 7 第60图-10

出土軒瓦



1



2



3



4



5



6



7



8



9

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 第60图-8 | 6 第50图-11 |
| 2 第8图-5 | 7 第60图-4 |
| 3 第35图-4 | 8 第60图-9 |
| 4 第35图-5 | 9 第21图-1 |
| 5 第50图-12 | |

出土軒平瓦

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解とご支援をいただき誠に感謝申し上げます。

仙台市内には約760ヶ所の遺跡が存在します。中でも、特に重要な遺跡として6ヶ所の遺跡が国の史跡に指定されています。陸奥国分尼寺跡は、昭和23年に国の史跡に指定されるなど古くから重要な遺跡であることが認められていました。しかし、その全容には不明な点が多く、これからの調査に期待が持たれている遺跡といえます。

本書では、平成13年度から15年度にかけて実施された陸奥国分尼寺跡の発掘調査の成果をまとめて報告しています。今回の調査では、陸奥国分尼寺の金堂跡と推定される地点から北側の地域の調査を行い、大型の掘立柱建物跡など今後の陸奥国分尼寺跡の解明につながる重要な発見がありました。

先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私たちにとって大きな責務であると考えております。今後とも、文化財保護への深いご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査事業および調査報告書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を賜りました多くの方々に深く感謝申し上げますとともに、本書が文化財保護の一助となりますことを願ってやみません。

平成17年3月

仙台市教育委員会

教育長 阿部 芳吉

例 言

- 1 本書は、都市計画道路「清水小路多賀城線」の拡幅工事に伴い、平成13年8月から平成16年3月にかけて3回にわたり実施した仙台市宮城野区宮千代、若林区白萩町に所在する陸奥国分尼寺跡の発掘調査（第10次）の成果を収録したものである。また、本書の内容はすでに公表している平成13年10月に実施した記者発表会資料等の内容に優先するものである。
- 2 発掘調査は、仙台市教育委員会が主体となり仙台市教育局生涯学習部文化財課が担当した。
- 3 本書の執筆及び編集は文化財課 渡部弘美、中山 純が担当した。本文の執筆は第1章、第2章第1節～第10節を中山が、第2章第11節～第4章を渡部が分担した。
- 4 報告書作成にあたり、東北歴史博物館高野芳弘氏のご助言、ご協力を賜った。
- 5 本書に関わる図面・写真・遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書中の土色の記述は『新版標準土色帳』（小山・竹原：1973）による。
- 2 本書中で使用した地形図は国土地理院発行の5万分の1「仙台」の一部を使用した。また、仙台市が作成した都市計画図の一部を使用している。
- 3 図中の方位は真北である。なお、磁北より7°20′西偏する。
- 4 図中の座標値は平面座標系Xでの値である。
- 5 図中の高さ表示は海拔標高値である。
- 6 確認遺構は下記の略号を使用し表している。
SB：建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 SX：性格不明遺構 SE：井戸跡 P：ピット・柱穴
- 7 遺構番号は確認年度で分け、平成13年度は100番代、平成14年度は200番代、平成15年度は300番代とし通し番号を付している。
- 8 出土遺物は下記の略号を使用し、登録番号を付している。
B：弥生土器 C：ロクロ不使用土師器 D：ロクロ使用の土師器及び赤焼土器
E：須恵器 F：丸瓦・軒丸瓦 G：平瓦・軒平瓦 I：陶器 K：石製品
N：金属製品 P：土製品
- 9 出上した瓦は、伊東信雄編「陸奥国分寺跡」での分類に準拠している。

目 次

序 文
例 言
凡 例

第1章 陸奥国分尼寺跡調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
1. 調査に至る経過	
2. 調査要項	
第2節 遺跡の立地と環境	1
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
第3節 これまでの調査成果	3
第2章 調査の成果	7
第1節 1トレンチの調査(平成13年度・14年度)	7
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 建物跡 2) 性格不明遺構 3) 七坑 4) ビット・土坑 5) その他の遺物	
第2節 2トレンチ・3トレンチの調査(平成13年度)	13
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
2トレンチ 1) ビット・柱穴 3トレンチ 1) ビット・柱穴	
第3節 4トレンチの調査(平成13年度)	14
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 建物跡 2) ビット・柱穴 3) 土坑 4) 性格不明遺構 5) その他の遺物	
第4節 5トレンチ・6トレンチの調査(平成13年度)	25
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 建物跡 2) 土坑 3) その他の遺物	
第5節 7トレンチの調査(平成14年度)	28
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 土坑	
第6節 8トレンチの調査(平成14年度)	39
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	

1) 溝跡	
第7節 9トレンチの調査(平成14年度)	40
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 性格不明遺構	
第8節 10トレンチ・13トレンチの調査(平成14年度)	40
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 井戸跡	
第9節 11トレンチの調査(平成14年度)	41
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 土坑 2) 性格不明遺構	
第10節 12トレンチの調査(平成14年度)	41
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 土坑 2) 溝跡 3) ビット・柱穴 4) 性格不明遺構 5) その他の遺物	
第11節 14トレンチの調査(平成15年度)	49
1. 基本層位	
2. 発見遺構と出土遺物	
1) 土坑 2) 溝跡 3) ビット・柱穴 4) その他の遺物	
第3章 出土遺物と発見遺構	58
第1節 出土遺物について	58
1. 瓦類	
1) 丸瓦 2) 平瓦 3) 軒丸瓦 4) 軒平瓦 5) 道具瓦 6) 刻印瓦	
2. 土器類	
1) 土師器 2) 赤焼土器 3) 須恵器 4) 黒書土器	
3. 遺物の位置づけ	
第2節 発見遺構について	65
1. 掘立柱建物跡	
2. 溝跡	
3. 土坑	
4. 性格不明遺構	
第3節 伽藍配置と各遺構について	67
第4章 まとめ	69

第1章 陸奥国分尼寺跡調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査に至る経過

都市計画道路「清水小路多賀城線」は仙台市の市街地と多賀城市を東西に結ぶ延長11.66kmの県道である。今回工事の道路拡幅部分の距離は743mとなる。この道路は陸奥国分尼寺跡の中央部を東西に貫通し、国指定史跡部分と南側で隣接している。道路拡幅工事については市の建設局との間で協議を進めてきたが、平成13年7月17日に発掘通知届が提出され、仙台市教育委員会で協議の結果、平成13年8月から発掘調査を実施することとなった。調査期間は工程の都合上3年間にわたる断続的なものとなり、また、調査区域も店舗等の出入り口の確保等から、北側及び南側東半では小トレンチによる調査区設定となった。最終的に道路北側に8ヶ所、南側に6ヶ所のトレンチを設定し調査を進めた。平成16年3月に3ヶ年わたる調査が終了したが、平成16年度には埋設管付設工事の立ち会いも実施している。

2. 調査要項

- | | | | |
|----------|---------------------------|------------|------------|
| 1 遺跡名称 | 陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡地名登録番号01020） | | |
| 2 調査地 | 仙台市宮城野区宮千代1丁目、若林区白萩町地内 | | |
| 3 調査理由 | 都市計画道路「清水小路多賀城線」拡幅工事 | | |
| 4 調査主体 | 仙台市教育委員会 | | |
| 5 調査担当 | 仙台市教育庁生涯学習部文化財課調査係 | | |
| 担当職員 | 平成13年度 主任 渡部 紀 | 文化財教諭 村上秀樹 | |
| | 教諭 豊村幸宏 | 文化財教諭 吉田和正 | |
| | 平成14年度 主任 渡部 紀 | 文化財教諭 加藤徳明 | 文化財教諭 三塚博之 |
| | 平成15年度 主査 渡部弘美 | 文化財教諭 女川征延 | |
| 6 調査期間 | 平成13年度 平成13年8月28日～11月29日 | | |
| | 平成14年度 平成14年10月21日～12月25日 | | |
| | 平成15年度 平成16年2月23日～3月5日 | | |
| 7 調査対象面積 | 3,543㎡ | 調査面積：約830㎡ | |

第2節 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

陸奥国分尼寺跡は仙台市東部のJR仙台駅から東南東約2.5kmの若林区白萩町、宮城野区宮千代に位置している。広瀬川が形成した新寺の仙台中町段丘から沖積平野へ移行する自然堤防上に立地し、標高は11m前後である。遺跡の中央部分には仙台市中心部から多賀城市まで伸びる総延長距離11.66kmの県道「清水小路多賀城線」が東西に貫いており、道路の両側には商店などが建ち並び市街地が広がっている。また、この道路は仙台市中心部から東部の郊外へ抜ける幹線道路であり交通量が非常に多くなっている。

2. 歴史的環境

陸奥国分尼寺跡周辺には弥生時代から近世にかけての多くの遺跡がある。ここでは関連する遺跡と代表的な遺跡について記述する。

陸奥国分尼寺跡の西方約500mに陸奥国分寺跡がある。昭和30年から34年にかけての発掘調査によって、東西800尺(242m)、南北800尺以上の築地塼で囲まれた大規模な寺院が存在していたことが明らかになっている。



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
①	陸奥国分尼寺跡	寺瓦跡	奈良、平安	11	北目城跡	城基跡、集落跡	自然発跡	縄文～近世	
2	陸奥国分寺跡	寺瓦跡	奈良、平安	12	志波遺跡	跡布地	自然発跡	奈良、平安	
3	興隆園遺跡	集落跡、屋敷跡	自然発跡	13	谷地館跡	城基跡	自然発跡	中世	
4	法樂原古墳	古墳	自然発跡	14	両目城跡	城基跡	自然発跡	中世	
5	南小倉遺跡	集落跡、屋敷跡	自然発跡	15	部分館基跡	城基跡	成丘	中世	
6	法見原古墳	古墳	自然発跡	16	台原・小田原宗幹森	宗跡	土殿跡	奈良、平安	
7	若林城跡	城基跡、古墳	自然発跡	17	(河明社宗跡)	宗跡	土殿跡	奈良、平安	
8	西山遺跡	宮内跡、寺院跡	自然発跡	18	(興江遺跡)	宗跡	土殿跡	奈良、平安	
9	西台館遺跡	集落跡	自然発跡	19	(安養寺下瓦窯跡)	宗跡	土殿跡	奈良、平安	
10	長町駅瓦遺跡	集落跡	自然発跡	20	多賀城跡	邸附、寺院	土殿	奈良、平安	

第1図 陸奥国分尼寺跡と周辺遺跡

伽藍配置の解明も行われ、中軸線上に南大門・中門・金堂・講堂・僧房が並び、中門と金堂は回廊で結ばれている。金堂の東方には回廊に囲まれた七重塔跡、金堂と講堂の間には東に鐘樓跡、西に経樓跡が確認されている。

北東約9.5kmの丘陵地には、古代陸奥国の国府である多賀城跡が位置する。多賀城跡は陸奥国分寺跡・陸奥国分尼寺跡との関連も強いと考えられており、これまでの調査から国分僧寺・尼寺の創建期瓦は多賀城跡Ⅱ期の瓦の特徴と同様であり、多賀城跡Ⅱ期と国分寺・国分尼寺の創建期は同じ頃と考えることができる。

これら陸奥国分寺・陸奥国分尼寺・陸奥国府多賀城に関連する遺跡として、北方約3kmの丘陵地に台原・小田原窯跡群がある。この窯跡群は青葉区台原・小松島、宮城野区蟹沢・二の森・樹江・安美寺・東仙台の広い範囲に分布し、仙台市街を西から東にのびる標高50～100mの丘陵の南斜面にいくつかのブロックをつくって立地する。これらの窯跡群は奈良時代から平安時代にかけて、陸奥国分二寺、陸奥国府多賀城の建物屋根瓦の生産を行っており、多くの窯が操業し供給源となっていた。

南方約4kmの広瀬川南岸には多賀城以前の国府であったと推定される郡山遺跡が位置する。二時期にわたる官衙跡や付属する郡山院寺跡が確認されている。また、郡山遺跡と関連し西側に隣接する西台畑遺跡と長町駅東遺跡からは古代の遺跡としては東北最大規模の大集落跡が確認されている。

さらに、南方1.2kmの地には弥生時代から近世にかけての複合遺跡である南小泉遺跡がある。その中央部には古墳時代前期末に築造された主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳がある。周辺には円墳の法領塚古墳を含め3基の古墳が確認されている。また、近世の遺跡としては伊達家の別荘跡が確認された養種園遺跡がある。

このように陸奥国分尼寺跡周辺のこの一帯は弥生時代から途切れることなく人々の生活の場として営まれ、なおかつ重要な役割を持った地域であったことが知られる。なお、遺跡地内の南側には封内風土記に元亀元年(1570)に再興されたと記載のある曹洞宗国分尼寺が位置する。

第3節 これまでの調査成果

陸奥国分尼寺跡は、昭和23年に県道南側の一部分が国史跡に指定され、昭和39年には「観音塚」と呼ばれていた基壇を中心とした調査が実施された。基壇上からは金堂跡と推定される礎石立ちの建物跡が確認されている。その後、確認調査及び開発に伴う調査も行われ、今までに計9次の調査が実施されている。ここでは各調査次の概要を簡述しておく。

第1次調査：「観音塚」と呼ばれていた基壇を中心に調査が実施された。礎石及び根石が確認され、基壇上に桁行5間、梁行4間の礎石立ちの建物跡が確認されている。この建物跡は金堂跡と推定され建物構造は切妻形の屋根を有するものと考えられている。出土遺物には瓦片の他に、建物跡の西北部から土師器甕が埋設された状態で発見されている。堂内部から金箔の残片が出土し、地鎮に使用されたものと考えられている。なお、金堂跡の周辺9地点でトレンチ調査を実施しているが、特に遺構は発見されず遺物も瓦片数点が出土するにとどまっている。(註1)

第2次調査：金堂跡の西側に位置する。掘立柱建物跡の柱穴あるいは地業跡、瓦溜めと判断される土坑が確認されている。軒丸・軒平瓦などをはじめとして若干の瓦片が出土している。柱穴あるいは地業跡と判断した落ち込みは、金堂跡の東南に位置し軸方向もほぼ同じである。金堂跡の下層遺構の可能性も考えられ注意される。(註2)

第3次調査：金堂跡の南東60m方向に位置する。真北に対し約10°西偏する溝跡を1条検出している。陸奥国分尼寺跡に伴う遺構とも考えられるが不明である。瓦類及び土師器・須恵器が少量出土している。(註3)

第4次調査：曹洞宗国分尼寺本堂北側に位置する。遺構は若干のピットの検出にとどまる。遺物は瓦類が大半をしめ、土師器・須恵器が少量出土している。(註4)

第5次調査：曹洞宗国分尼寺本堂東側に位置する。土坑・ピットが確認されているが、占代に属する遺構は性格

不明遺構1基のみであった。数多くの遺物が出土しているが大半が瓦類で、軒瓦は50点程出土している。性格不明遺構からは瓦類と伴に多量の鉄滓や羽口が出土している。寺域内に鍛冶遺構の存在が窺われ注意される。(註5)

第6次調査：金堂跡の北側45mに位置する。桁行5間又はそれ以上で梁行3間と考えられる建て替えをもつ東西棟の掘立柱建物跡を確認している。建物北側柱列の方向は真北基準でN-85°-Eとなり、南北ラインは約5°西偏となる。柱穴掘り方は一辺90～150cmを測る大型のもので、柱痕跡は直径35～40cmを測る。これまでの調査で建物跡と確認されたものは1次調査の金堂跡1棟のみで、掘立柱式のもの初めてとなる。この建物跡は金堂跡の中心より北側150尺(44.7m)に位置し、規模等からも主要な建物の一部であると考えられた。なお、10次調査で西隣りを調査しており尼坊の可能性が指摘された。(註6・10)

第7次調査：推定寺域の西辺北側に位置する。竪穴住居跡や十坑とともに南北に延びる溝跡を1条確認している。堆積土中より大量の瓦が出土しており廃棄されたものと判断された。溝跡の方向は真北に対して、約2～5°西偏しており、寺域の区画に関係するものと考えられている。(註7・11)

第8次調査：金堂跡の北東方向110m地点に位置する。竪穴住居跡・十坑を確認し、数多くの遺物が出土している。住居跡からは須恵器の大甕、直刀、刀子、鉄鏃、紡錘車、「佛」・「妙」と墨書された土師器も出土し、一般集落とは異なった性格が考えられた。(註8)

第9次調査：金堂跡の北西方向60m地点に位置する。竪穴住居跡、土坑、溝跡等を確認している。遺物には瓦、土師器、須恵器等がある。多くのものが住居跡出土のもので、カマドの施設瓦に再利用されたものもみられた。また、須恵器の水瓶が出土しており注意される。(註9)

以上が9次にわたる陸奥国分尼寺跡調査成果の概略であるが、下記に主要な点をまとめておく。

- ・「観音塚」と呼ばれていた基壇上から東西5間(9.85m)×南北4間(8.5m)の礎石立ちの建物跡が確認され、周辺状況等から判断して金堂跡と推定された。
- ・金堂跡の北側45m地点で、大規模な東西棟の掘立柱建物跡を確認している。建物方向が金堂跡とはほぼ同一であることから、金堂跡北側に展開する主要な建物跡と判断され、尼坊の可能性が指摘された。
- ・推定西辺寺域線に並行して延びる溝跡を確認している。西辺を区画する溝跡と考えられている。
- ・寺域内で平安時代の竪穴住居跡が確認されている。
- ・遺物の大半は瓦類である。破片資料が多いが等瓦をはじめとし特徴が窺られるものもある。陸奥国分寺跡から出土している瓦群と同記・同種と判断される。(註12)

(註1) 仙台市教育委員会 1969『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市文化財調査報告書第4集

(註2) 斎野裕彦・渡辺誠 1985「〔4〕陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第75集

(註3) 渡辺 誠 1986「〔5〕陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第87集

(註4) 松本清一 1987「〔2〕史跡陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅵ』仙台市文化財調査報告書第97集

(註5) 七浜光彦 1989「〔1〕陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第125集

(註6) 藤原信彦 1997「X 陸奥国分尼寺跡確認調査報告書」『高屋敷遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第223集

(註7) 榎本光一 1998「Ⅲ 陸奥国分尼寺跡(第7次調査)」『神明社遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第232集

(註8) 主浜光則 1999「I 陸奥国分尼寺跡(第8次調査)」『陸奥国分尼寺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第238集

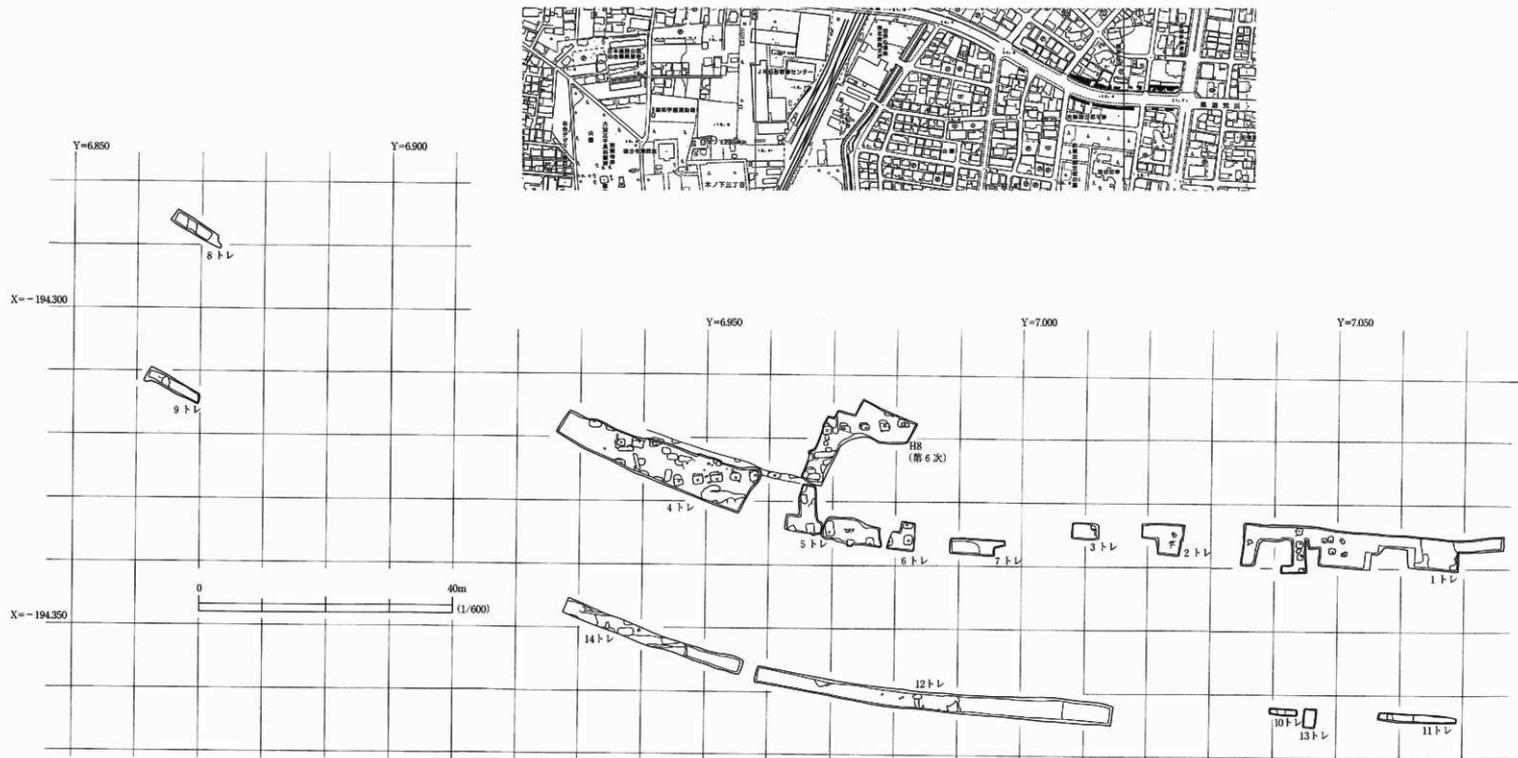
(註9) 工藤信一・飯村幸宏 2000「第2編 陸奥国分尼寺跡(第9次調査)」『五木松原跡ほか』仙台市文化財調査報告書第247集

(註10) 仙台市教育委員会 2002「8 陸奥国分尼寺跡(第10次調査略報)」『子鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告書第261集

(註11) 木村浩二 1987「〔5〕陸奥国分尼寺跡・陸奥国分寺跡・国分尼寺跡周辺の地割と寺域推定について」

『仙台平野の遺跡群Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第87集

(註12) 伊東信雄編 1961『陸奥国分寺跡』陸奥国分寺跡発掘調査委員会



第2図 調査地点と遺構配置

第2章 調査の成果

今回の第10次調査は、拡幅工事対象面積3,543㎡のうち828㎡の調査を実施した。調査区配置として道路の北側に8ヶ所、南側に6ヶ所の計14ヶ所のトレンチを設定した。道路北側の1～8トレンチが平成13年度、道路南側の9～13トレンチが平成14年度、道路南側の14トレンチが平成15年度調査となる。調査期間及び調査区の制約上、トレンチ拡張の調査は次年度調査としている。

基本層位は3層確認している。市街地で道路脇ということもあり、アスファルトや砂利など盛土に厚く覆われ機乱坑なども各所で確認され、遺構の残りは全体的に悪い。Ⅰ層は旧表土及び旧耕作土となる暗褐色及び黒褐色の土である。Ⅱ層はシルトないし粘土質の黒褐色土で、壁面での確認ではあるが遺構検出面となる地点もある。Ⅲ層は黄褐色及び黄褐色の粘土質シルト上で地点においては砂質となっている。大半の遺構がⅡ層上面での検出で、今回調査の地山面となる。

第1節 1トレンチの調査（平成13年度・14年度）

道路北側の東端に設定した調査区である。13年度の調査結果から14年度に拡張区となるトレンチを設定している。柱列の発見などによりさらなる拡張もあり、調査区は東西43m×南北6mの変則的な形を呈している。

1. 基本層位

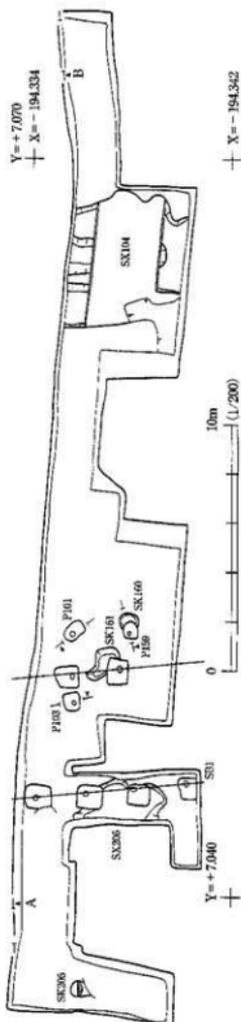
基本層位は3層に大別できる。盛土の直下に、Ⅰ層として旧耕作土と考えられる黒褐色土、Ⅱ層はⅢ層をブロック状に含んだ黒褐色土、Ⅲ層は明黄褐色土で遺構検出面である。盛土・機乱によってⅠ・Ⅱ層が確認できない地点もみられるが、トレンチ東側のⅡ層中からは多くの瓦類が出土している。

2. 発見遺構と出土遺物

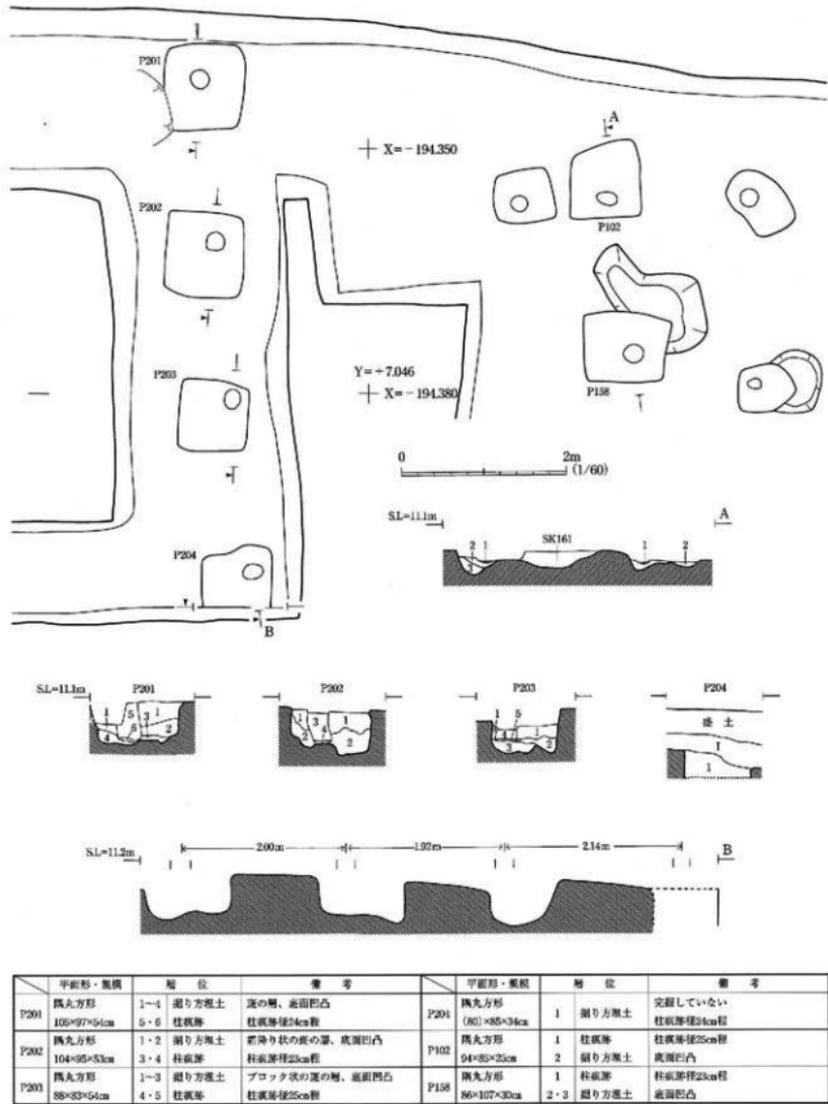
発見遺構には掘立柱建物跡1棟、土坑3基、性格不明遺構2基、ピット3基がある。遺物は瓦類を始め、土師器片・須恵器片が出土している。

1) 建物跡

SB 3 掘立柱建物跡 トレンチ西側に位置する。西側柱列の柱穴（P201・P202・P203・P204）を4基、東側柱列の柱穴（P102・P158）を2基確認している。状況から判断して東西2間、南北3間以上の南北棟の建物跡と考えられる。柱穴の平面形は隅丸の正方形で一辺90～100cmを測る。6基とも柱痕跡が確認され直径22～26cmの円形及び楕円形である。掘り方埋土は明黄褐色土を主体とする粘土質シルトである。東側柱列周辺は遺存がわるく、南北壁付近は柱穴底面よりも低くなっている。すべての柱穴底面が不定で凹凸面となっているが底面高はほぼ同じである。柱間寸法は西側柱列で北から2.00m、1.92m、2.14m、東側柱列は1.92mである。西側柱列は真北に対し約6°西偏している。遺物はP201から須恵器が、P202から平瓦、須恵器が出土している。掲載遺物は平瓦（図8-3）、須恵器高台付壺（図9-7）の2点である。



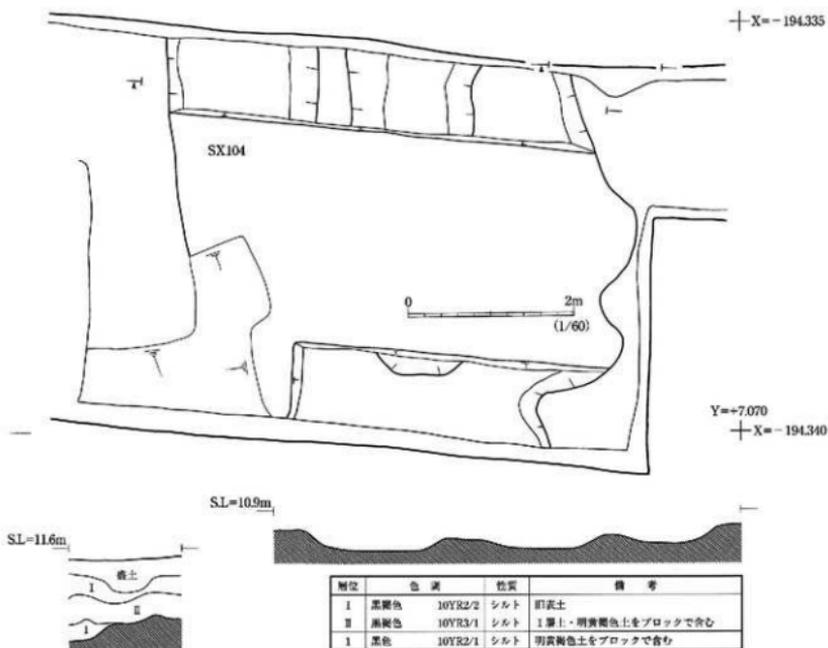
第3図 1トレンチ平面遺構全体図



第4図 SB3掘立柱建物跡

2) 性格不明遺構

SX104性格不明遺構 トレンチ東側に位置する。南北方向に溝状に延びているが東辺南側が細かく蛇行しており不定である。東西幅約5m、南北長4.5mまで確認した。断面形は両端部とも立ち上がりが緩やかな皿状となっている。深さは20cm程である。底面には南北方向に溝状の落ち込みが延びておりゆるい凹凸面となっている。堆積土は1層のみ確認している。遺物は丸瓦片・平瓦片が出土している。



第5図 SX104性格不明遺構

SX206性格不明遺構 調査区西側に位置する。SB3のP202・P203と重複し切られている。平面形は方形を基調とする不整形である。大きさの計測は不能であるが、西壁面での長さは3.8m以上を測る。深さは15～20cmで立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層確認している。褐色系のシルト層である。遺物には丸瓦、平瓦、軒丸瓦片、土師器、須恵器がある。掲載遺物は平瓦(図8-1)、丸瓦(図8-2)、土師器輪(図9-1)、須恵器坏(図9-5)の4点である。

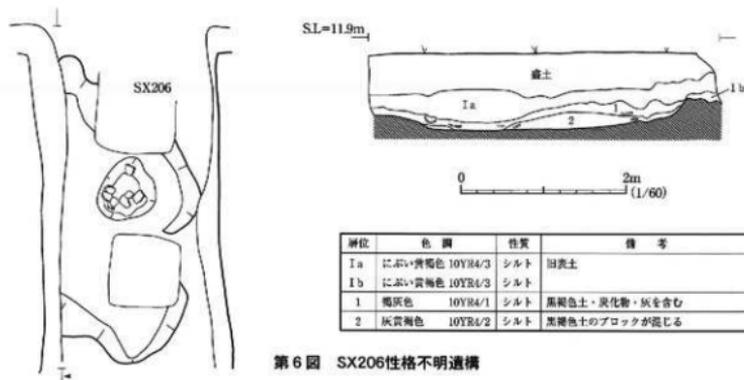
3) 土坑

SK160土坑 トレンチ中央に位置する。P159と重複し切られている。平面形はやや歪んだ円形で径76cmを測る。断面は浅い船底状を呈し、壁は垂直に立ち上がり底面は中央に傾斜している。深さ最大で25cmを測る。堆積土は1層確認した。黒褐色上のシルト層でIII層土がブロック状に混じる。遺物は底面から平瓦片が出土している。

SK161土坑 トレンチ中央に位置する。P158と重複し切られている。平面形は長円形を基調とする不整形で、断面は浅い皿状である。大きさは長軸1.61m、短軸最大1m、深さ20cmを測る。堆積土は1層確認した。黒褐

色の粘土質シルト層でⅢ層土となる黄褐色土が混じる。遺物は出土していない。

SK205土坑 調査区西端に位置する。南側が擾乱により削平されており形状は不明であるが、残存部から推定して長円形のものかと判断される。残存長は長軸が65cm、短軸が62cmである。断面形はU字形で、深さ67cmを測る。壁は垂直及びオーバーハング気味に立ち上がる。堆積土は6層確認した。基本的に黒褐色土と黄褐色の互層となっている。遺物は出土していない。



第6図 SX206性格不明遺構

4) ビット・柱穴

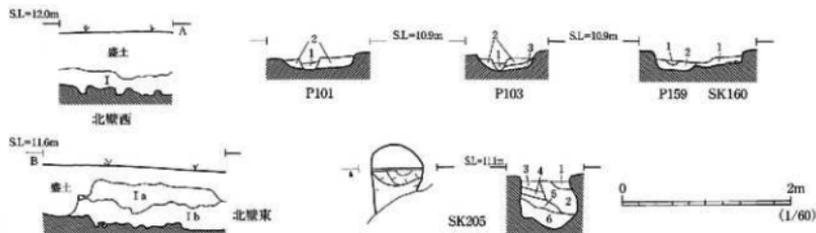
P101 トレンチ中央東側に位置する。平面形が長円形を呈する柱穴である。長軸90cm、短軸60cm、深さ20cmを測る。柱痕跡が確認されており径22cmの円形である。掘り方埋土は1層確認され明黄褐色のシルト層である。遺物は瓦片が出土している。

P103 トレンチ中央西側のP102の西脇に位置する。平面形は長軸73cm、短軸67cmを測る方で、中央部に径17cmの柱痕跡が確認された。深さは23cmを測る。掘り方埋土は2層確認され黒褐色と黄褐色のシルト層である。遺物は出土しなかった。

P159 トレンチ中央部南側に位置する。SK160と重複し切っている。平面形は方形を基調とする不整形である。大きさは長軸70cm、短軸58cm、深さ25cmを測る。径16cmの柱痕跡が確認されている。掘り方埋土は1層確認され明黄褐色のシルト層である。遺物は出土しなかった。

5) その他の遺物

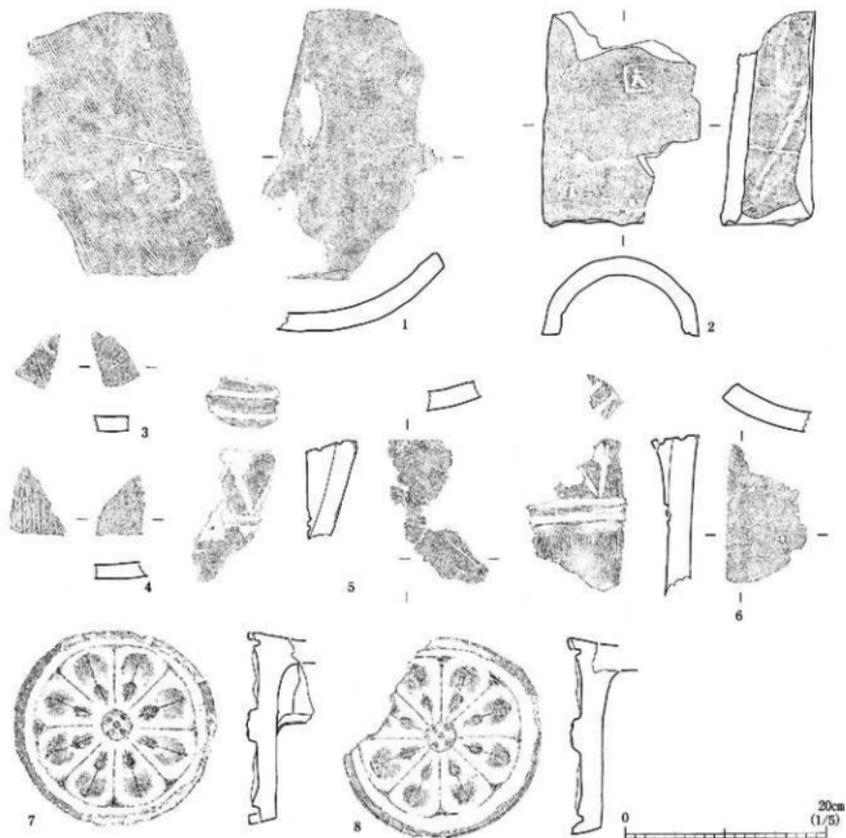
Ⅱ層及び擾乱土内から遺物が出土している。Ⅱ層出土の掲載遺物は、重弁蓮華文軒丸瓦(図8-7・8)、二重弧文軒平瓦(図8-5・6)、土師器杯(図9-2)、須恵器甕(図9-6)、礮(図9-8)の7点である。Ⅰ層及び擾乱内出土の掲載遺物は平瓦(図8-4)、須恵器杯(図9-4)の2点である。



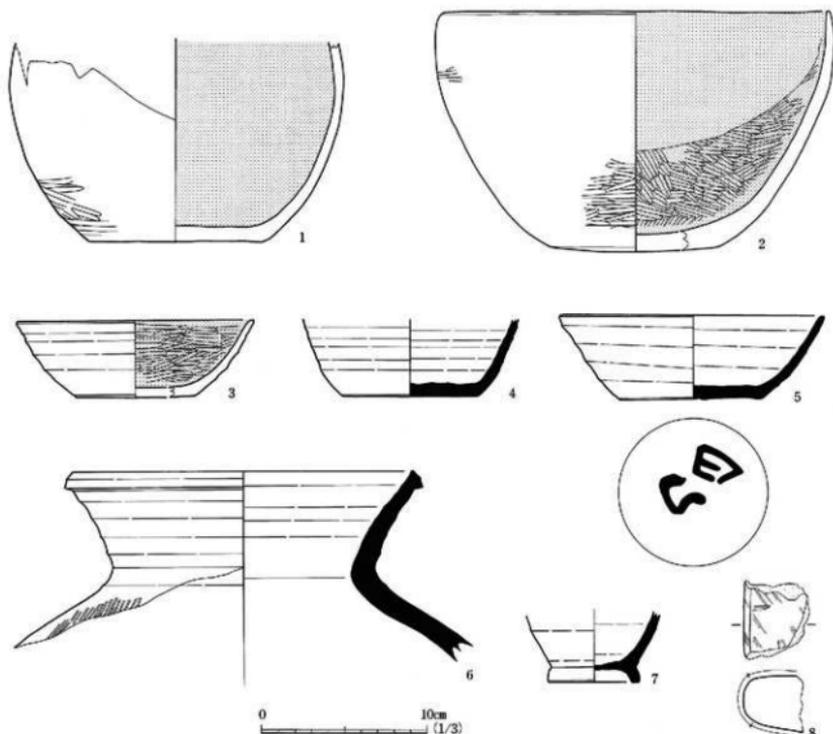
層位	色調	性質	備考	平面形・規格	数量	備考
北壁西 I	暗褐色 10YR3/3	シルト	旧表土	P101 長円形 90×55×15cm	1	柱基礎は径20cm程度 置込みスジ状に施される組成層
北壁北 I a	暗褐色 10YR3/3	シルト	旧表土		2	掘り方壁土
北壁北 I b	暗褐色 10YR3/3			P103 隅丸方形 72×64×24cm	1	柱基礎
SK160	黒褐色 10YR1/1	シルト	明黄褐色土が混じる		2・3	掘り方壁土
1	黒褐色 10YR3/1	シルト	焼土粒が少量混じる	P109 不整形 69×60×22cm	1	柱基礎
2	黒褐色 10YR4/1	シルト	明黄褐色土のブロックが混じる		2	掘り方壁土
SK203	黄褐色 10YR5/6	シルト	明黄褐色土のブロックが混じる			柱基礎は径16cm程度、SK160を切る
4	黒色 10YR2/1	シルト	焼土粒が少量混じる			
5	黄褐色 10YR5/8	シルト	黒色土のブロックが混じる			
6	明黄褐色 10YR7/6	シルト	黒褐色・黒褐色土のブロックが混じる			

東西線×南北線×高さ ○：残存部

第7図 壁面・ピット・土坑平断面



第8図 1トレンチ出土遺物1

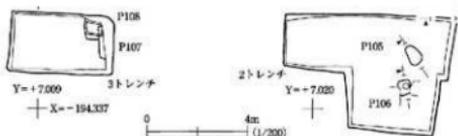


番号	種別	造形・部位	特徴	分類	登録番号	写真図版	
8-1	平瓦	SX206	瓦土	凸面：平行明き(顔目・長辺に対し斜行)、部分筋に春日目、西面：縦筋方向のナデ、小口側ヘラケズリ 側面：扁平状(凸面側角縁部)、厚5.2cm、色調は明赤褐色	1a	G-057	
8-2	丸瓦(刷印)	SX206	瓦土	凸面：刷印キ、ロクロナデ、「美」の刷印(内径2.7cm四方)、凸面：軸土屈折(径30cm程)、春日目、ナデ、 短冊ヘラケズリ、厚5.15cm、底筋部：幅13.5cm・高さ8.8cm、中厚部、色調は明赤褐色	1a	F-037	19-2
8-3	平瓦	P202	雑土	凸面：平行明き(顔目・斜行)、底筋：幅12.5cm・高さ1.5cm、色調は浅黄褐色	1b	G-047	
8-4	平瓦	基本型	I型	凸面：平行明き(顔目・斜行)、凸面：筋線不明、厚5.14cm、色調は明黄褐色	1b	G-048	
8-5	軒平瓦	基本型	II型	二重瓦文、瓦当面：ナデ、筋部：ナデ；二本沈線・縦線文、凸面：ナデ、西面：春日目・ナデ 瓦当面高5cm、平瓦厚19cm、色調は赤褐色		G-025	凸面 軒平瓦2
8-6	軒平瓦	基本型	II型	二重瓦文、瓦当面：平行明き、筋部：平行明き(顔目)・ナデ；二本沈線・縦線文、凸面：平行明き 西面：春日目・ナデ、表面浅いヘラケズリ、瓦当面高4.3cm、平瓦厚19.2cm、色調は灰色		G-001	
8-7	軒丸瓦	基本型	II型	八重重弁蓮華文、部分寸3筋、瓦当厚17cm、中厚部分未造り、丸瓦部欠損、色調は灰褐色		F-001	凸面 軒丸瓦2
8-8	軒丸瓦	基本型	II型	八重重弁蓮華文、部分寸3筋、瓦当厚18cm、丸瓦部は欠損、色調は灰色		F-002	凸面 軒丸瓦4
9-1	土埴器 埴	SX206	雑土	ロクロ不使用、底部は内等50球に立ち上がる、内外面とも磨滅のため状態不明であるが 外面下部にヘラミガキ・内面に黒色処理、底径10.4cm、残存高12.2cm	3	C-002	18-1
9-2	土埴器 埴	基本型	II型	ロクロ不使用、底部は丸底扁平、体部は内等90球に立ち上がる、外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ・黒色処理、口縁径23.0cm、底径10cm、器高14.6cm	2	C-003	18-2
9-3	土埴器 埴	基本型	II型	ロクロ成形、内等90球に立ち上がり口筒形でかく外縁、底部：手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ・黒色処理、口縁径14.3cm、底径7.2cm、器高47cm	3	D-002	
9-4	須恵器 埴	須恵土		体部下部から外縁突縁に立ち上がる、体部下部から底部：手持ちヘラケズリ、底径16.4cm、残存高4.8cm	1	E-040	
9-5	須恵器 埴	SX206		体部下部から外縁突縁に立ち上がる、底部：回転ヘラ切り痕、底部に漆文字「？」有り 口縁径15.9cm、底径18cm、器高5.1cm	5a	E-018	17-1
9-6	須恵器 要	基本型	II型	口縁部は外縁突縁に立ち上がり口縁下部が三角形状に外方に突き出さず、体部外面：平行明き 口縁径20.4cm、口縁高5cm、残存高11.6cm		E-001	17-17
9-7	須恵器 要	P201	雑土	高台付型、付け高台、内外面：ロクロ調整・ナデ、高台径4.4cm、高台高0.6cm、残存高4.2cm		E-017	
9-8	石鏡 鏡	基本型	II型	残存する三面にのみ磨り面有り、鏡径9.3cm、変山磨		K-001	18-12

第9図 1トレンチ出土遺物2

第2節 2トレンチ・3トレンチの調査（平成13年度）

県道北側の調査区東側の1トレンチと7トレンチの間に位置する。2トレンチは東半部を南側に拡張しており最終的に東西7m×南北4.8mのL字形となり、3トレンチは東西4m×南北2.5mの長方形のトレンチを設定した。



第10図 2・3トレンチ遺構全体図

1. 基本層位

2トレンチ・3トレンチの基本層位は3層確認している。I層は旧耕作土、II層は黒褐色の粘土質シルト層で明黄褐色土がブロック状に混入している。III層は明黄褐色の粘土質シルト層である。上層からの攪乱等が著しくI、II層が存在しない地点もみられる。III層面が遺構確認面となる。

2. 発見遺構と出土遺物

2トレンチ トレンチ東側でピットを2基確認している。遺物はP105の堆積土や基本層から瓦片や土師器、須恵器が少量出土している。

1) ピット・柱穴

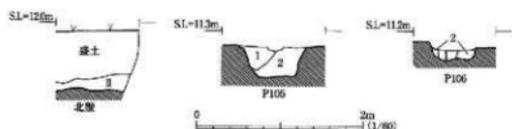
P105 トレンチ北東部に位置する。平面形は不整な長円形で、大きさは長軸約85cm、短軸最大52cmを測る。断面形は逆台形状で深さは約40cmを測る。壁面は底面から急な立ち上がりをもつ。堆積土は2層観察され、III層土と炭化物を含んでいる。遺物は瓦片や土師器片、須恵器片が僅かに出土するのみである。

P106 トレンチ中央部、P105の南側に位置する。柱痕跡が確認されている。柱穴は東西両端が攪乱に切られるが、平面形は方形を呈し、大きさは長軸59cm、短軸50cmを測る。柱痕跡は径22cm程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土を斑に含む黄褐色のシルト質粘土である。遺物は出土していない。

3トレンチ トレンチ北東隅で2基のピットを確認している。調査区の関係から拡張および完備は行ってない。遺物は少量の瓦片が出土するのみである。

1) ピット・柱穴

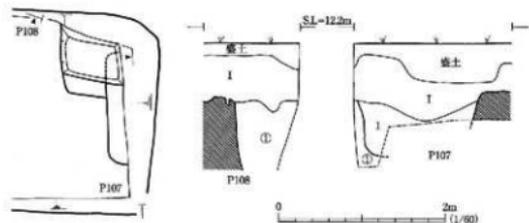
P107 トレンチ東端部に位置する。西辺が直線状に伸び両端が東に屈曲しており形状は方形を呈するものとも判断される。西辺南北長は140cmを測る。断面形は箱型で深さ80cmを測り、壁の立ち上がりは急である。堆積土は1層確認した。III層土がブロック状に混じることから人為的な



層位	色調	性質	備考
北東側	II 明黄褐色	10YR6/3 粘土質シルト	黒褐色土ブロックを多く含む
	形・風貌	層位	備考
P105	不整長円形 88×52×40cm	1-2 産土	黒褐色土主体 明黄褐色土・炭化物を少量含む
P106	深九方形 60×50×24cm	1 柱痕跡 2 掘り方埋土	柱痕跡径23cm程

東西軸×南北軸×高さ

第11図 2トレンチ壁面・ピット断面

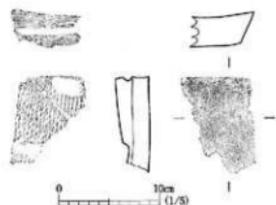


層位	備考
P107 1	掘り方埋土 平面形方形?、長軸135cm、深さ75cm、明黄褐色土小ブロックを多数に含む
P108 ①	掘り方埋土 平面形方形?、深さ85cmまで確認、明黄褐色土小ブロックを斑に含む、P107を切る

第12図 3トレンチピット平面断面

堆積と考えられる。I層が落ち込んでおり、ややしまりが弱いことから新しい時期の可能性もある。遺物は出土しなかった。

P108 トレンチ東壁部に位置する。P107と重複し切られている。二辺が確認され平面形は方形を呈するものと判断される。堆積土はI層確認している。Ⅲ層土が斑及びブロック状に混じっており、人為的な地積と考えられる。深さは90cmまで確認している。遺物は平瓦と軒平瓦が各1点出土している。掲載遺物は単弧文軒平瓦(図13-1)1点である。



番号	種別	遺物・層位	特徴	分類	登録番号	写真図取
13-1	軒平瓦	P108	Ⅲ層土	単弧文、瓦当面：ヘナケズリ、側部：縦位の残印き目、凸面：縦位の残印き目、凹面：右目真・ナデ、瓦当面高：3.2cm、平瓦厚：2.3cm、色調：赤褐色	G-003	

第13図 P108出土遺物

第3節 4トレンチの調査(平成13年度)

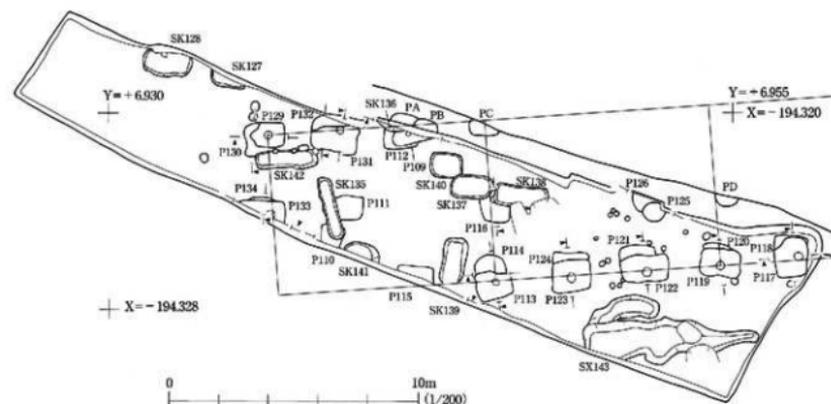
原道北側で金堂跡北方約35mの地点に位置する。東西32m×南北4～8mの調査区を設定した。地点の制約上3回に分け調査を実施している。なお、平成16年度に埋設管付設工事に伴い4トレンチから7トレンチの北側部分の立ち会い調査を行っている。

1. 基本層位

I～Ⅲの3層を確認している。I層は旧耕作土の黒褐色土、II層はⅢ層土をブロック状に含む黒褐色土、Ⅲ層は明黄褐色土で遺構検出面となる。II層は上層からの掘削・攪拌のために残りがわるくI層下でⅢ層が確認される地点が多い。

2. 発見遺構と出土遺物

掘立柱建物跡1棟、土坑10基、性格不明遺構1基、ピットが検出されている。出土遺物には瓦類、土師器、須恵器、鉄製品がある。大半が瓦類である。なお、立ち会い調査では柱穴と判断される落ち込みを7基(PA～G)確認し、さらに6トレンチのP155より東側に柱穴は延びないことも確認した。



第14図 4トレンチ遺構全体図

1) 建物跡

SB1 掘立柱建物跡 4トレンチ調査及び平成16年度の立ち会い調査で東西9間、南北2間の建物跡を確認した。トレンチ東側に位置する第6次調査では桁行5間又はそれ以上で梁行3間と判断した東西棟の掘立柱建物跡が検出されている。2棟の建物跡は、柱穴の規模や形態、建て替えの有無、北側柱列の柱痕跡が直線状に並ぶことなどから、本来1棟の建物跡であると判断された。P130・P133が西妻の柱列となること、梁行が2間であること、金堂跡の中軸線がP177・PFの間を通ること、SB2のP154・P155が東妻柱列になると判断されること、これらから建物跡は梁行2間、桁行15間のもと判断した。梁行長6.6m、桁行長44.8mを測る。なお、東側で仕切りと考えられる柱穴を2基(P116・PD)確認しており、2間×3間が一つの単位と考えられ計5室の存在が考えられた。柱穴は平面形が隅丸の長方形で、大きさは南北軸100～160cm、東西軸98～200cm、深さ80～115cmを測る大型のものである。柱痕跡がすべての柱穴から確認され径35cm内外の円形である。掘り方埋土は黒色土と黄褐色土が斑及び互層状となるものである。柱間寸法は約3m間隔で、桁行北側柱列(P129・P131・P109)は西妻から2.9m+2.7m、南側柱列(P113・P123・P122・P119・P117)は西から3.05m+3.05m+2.95m+3.15mである。梁行は西妻の柱列(P129・P133)で3.3m、仕切り部分の柱列(P116・P113)で3.4mを測る。建物方向は西妻の柱穴列が真北に対し約4°西偏している。なお、SBIの身舎となるすべての柱穴が同じ大きさと推定される柱穴と重複している。建て替えと判断され、新旧2時期の同規模の建物跡が確認された。遺物は瓦片及び上師器が出土している。掲載遺物は土師器杯(図2-1)1点である。

2) ビット・柱穴

P110 トレンチ中央部の南壁に位置する。SK135と重複し切られている。平面形は長方形を基調とするが不明である。大きさは南北軸82cm以上、東西軸最大98cm、深さ35cmを測る。断面形は箱型で、堆積土は2層確認される。Ⅲ層土がブロック状に混じるもので人為堆積と考えられる。遺物は土師器片、須恵器片が出土している。

P111 トレンチ中央部、P110の北側に位置する。SK135と重複し切られている。平面形は長方形を呈する。大きさは南北軸100cm、東西軸125cm深さ20cmを測る。断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。堆積土は1層確認している。Ⅲ層土と褐灰色土がブロック状に混じり、人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

P125 トレンチ西側の北壁に位置する。P126と重複し切っている。平面形は楕円形で、南北軸76cm、東西軸85cmを測る。断面形はU字形で深さ55cmを測る。底面はやや凹凸面で壁の立ち上がりは急である。堆積土は1層確認している。黒褐色と明黄褐色のシルト土が主体で粒状及びブロック状に堆積しており、人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

P126 トレンチ西側の北壁に位置する。P125に切られている。平面形は方形を基調とするが不明である。大きさは東西軸100cm以上、南北軸80cm以上、深さ46cmを測る。断面形は逆台形状である。堆積土は3層確認している。黒褐色のシルト土が主体となりⅢ層土が部分的にブロック状に混じる。遺物は出土していない。

3) 土坑

SK127土坑 トレンチ西側の北壁に位置する。平面形は隅丸の方形と判断される。南辺の東西長1.4m、西辺の南北長60cm、深さ55cmを測る。断面形は皿状で壁がややきつく立ち上がり箱状である。堆積土は2層確認されⅢ層土がブロック状に含まれている。人為堆積と考えられる。遺物は土師器片が出土している。

SK128土坑 トレンチ西端部の北壁に位置する。平面形は隅丸の長方形である。大きさは東西軸1.95m、南北軸90cm、深さ20cmを測る。断面形は皿状で壁が緩やかに立ち上がる。堆積土は1層確認している。Ⅲ層土がブロック状に混入しており人為堆積と考えられる。遺物は丸瓦片、平瓦片、土師器片が少量出土している。

SK135土坑 トレンチ中央部南側に位置する。P110・P111と重複しており切っている。平面形は長円形を呈し、長軸2.6m、短軸60cm、深さ40cmを測る。断面形は逆台形状で壁は底面からややきつく立ち上がる。堆積

土は2層確認され、Ⅲ層土が斑にブロック状に混入しており人為堆積と考えられる。遺物は丸瓦、土師器、須恵器が数点出土している。

SK136土坑 トレンチ中央部北壁に位置する。P109・P112と重複しており切っている。一部分の確認であり平面形は不明である。断面形はゆるい皿状を呈しており深さ30cmを測る。堆積土は2層確認され、Ⅲ層土がブロック状に混入しており人為堆積と考えられる。遺物は丸瓦が数点出土している。

SK137土坑 トレンチ中央に位置する。P116・SK140と重複しており切っている。平面形は隅丸長方形である。大きさは東西軸1.7m、南北軸1m、深さ5cmを測る。断面形はゆるい箱形で壁が緩やかに立ち上がる。堆積土は1層のみ確認した。Ⅲ層土がブロック状に含まれる。人為堆積の可能性も考えられる。遺物は丸瓦、平瓦、土師器が数点出土している。

SK138土坑 トレンチ中央部に位置する。P116と重複しており切っている。南辺部が攪乱されているが平面形は隅丸長方形である。大きさは東西軸2.1m、南北軸90cm、深さ20cmを測る。断面形は箱形で壁はややゆるく立ち上がる。堆積土は1層確認している。Ⅲ層土がブロック状に含まれ人為堆積とも判断される。遺物は丸瓦片と平瓦片が数点出土している。

SK139土坑 トレンチ中央部南壁に位置する。平面形は隅丸長方形である。大きさは南北軸で2m以上、東西軸1m、深さ30cmを測る。断面形は船底形で壁はゆるく立ち上がる。堆積土は1層確認している。Ⅲ層土をブロック状に含むことから人為堆積と考えられる。遺物は平瓦、土師器、須恵器が数点出土している。

SK140土坑 トレンチ中央部に位置し、SK137に切られている。平面形は隅丸長方形で、大きさは長軸1.3m、短軸1m、深さ15cmを測る。断面形は皿状で壁はややきつく立ち上がる。堆積土は1層確認している。Ⅲ層土がブロック状に混入しており人為堆積と考えられる。遺物は丸瓦、平瓦、土師器が数点出土している。

SK141土坑 トレンチ中央部南壁に位置する。部分的な確認であり平面形は不明である。南壁での東西長は1.5mを測る。断面形は皿状で壁はゆるく立ち上がり、深さ45cmを測る。堆積土は2層確認され、Ⅲ層土がブロック状に混入しており人為堆積と考えられる。遺物は丸瓦片、平瓦片、土師器片が数点出土している。

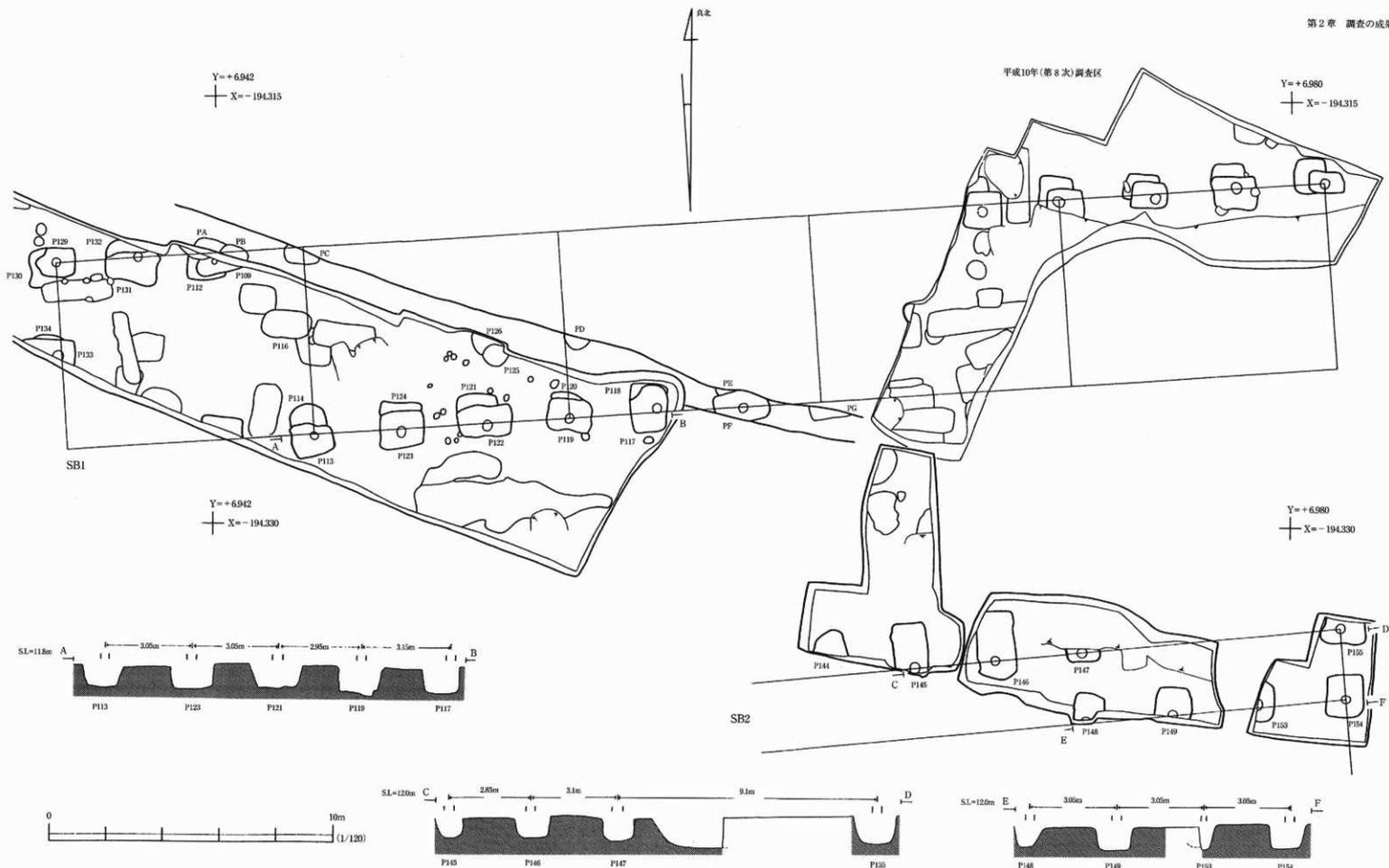
SK142土坑 トレンチ中央部西側に位置する。P130と重複しており切っている。平面形は隅丸長方形で、大きさは東西軸2.5m、南北軸70cm、深さ5cmを測る。断面形は遺存がわるく不明である。堆積土は1層確認した。Ⅲ層土をブロック状に含み人為堆積とも考えられたが判然としない。遺物は土師器片が数点出土している。

4) 性格不明遺構

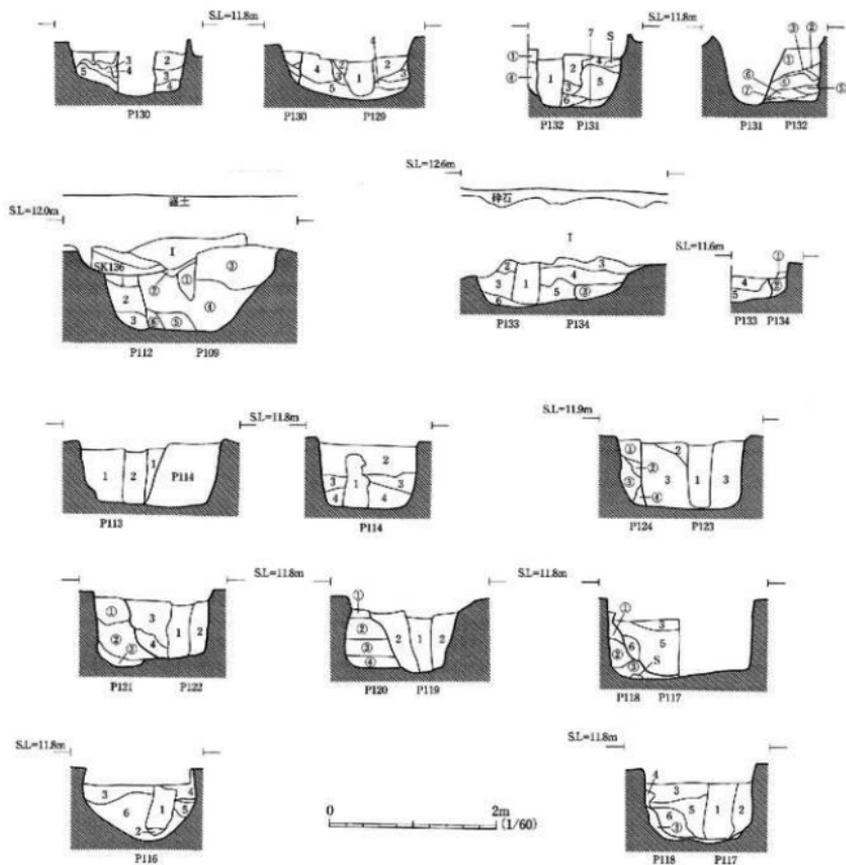
SX143性格不明遺構 トレンチ東部に位置する。不定な東西方向に延びる溝状の落ち込みとして確認したが、南壁面にも堆積土が確認され、底面が凹凸となる幅広の不整形な土坑状のものである。堆積土は2層確認している。遺物は瓦類、土器類、金属製品が出土している。掲載遺物は丸瓦(図20-2)、須恵器杯(図21-9)、金属製品・釘(図21-11)の3点である。

5) その他の出土遺物

I層及び攪乱坑から出土している。各種の遺物が出土しているが瓦類が主である。掲載遺物は平瓦(図19-1~20-1)、丸瓦(図20-3~5)、連珠文軒平瓦(図21-1)、軒平瓦頸部(図20-6)、土師器杯・甕(図21-3~8)、須恵器甕(図20-10)の17点である。



第15図 SB1・2掘立柱建物跡

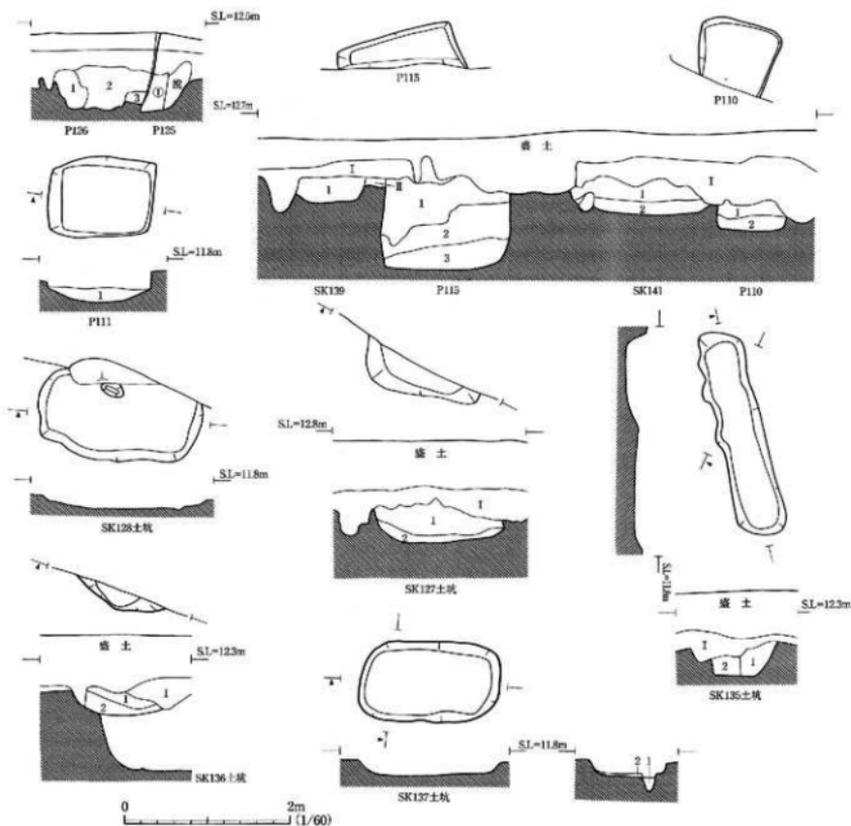


断面形・規模	層位	備考	断面形・規模	層位	備考
P129 隅丸方形 140×100×90cm	1 2-5	柱痕跡 礎石じりの混成層 土跡跡	P123 隅丸方形 137×132×92cm	2・3 掘り方埋土	柱痕跡30cm程 褐色・黄褐色土の混成層
P130 隅丸方形 128×140×70cm	1-5	掘り方埋土 ブロック状となる混成層	P124 隅丸方形 152×(30)×85cm	①-②	掘り方埋土 明黄褐色系の混成層
P131 隅丸方形 180×102×90cm	1	柱痕跡 ブロック状の混成層	P121 隅丸方形 150×(48)×85cm	①-②	掘り方埋土 黄褐色系の混成層
P132 隅丸方形? (130)×(45)×79cm	①-②	掘り方埋土 土が混じる混成層	P122 隅丸方形 196×115×92cm	1 2-4	柱痕跡 掘り方埋土
P109 隅丸方形 (162)×(60)×101cm	① ②-④	柱痕跡 掘り方埋土	P119 隅丸方形 165×108×91cm	1 2	柱痕跡 掘り方埋土
P112 隅丸方形 138×(95)×92cm	1-5	掘り方埋土 混成層、下部で砂礫が混じる	P120 隅丸方形 (118)×(92)×86cm	①-②	掘り方埋土 ブロックを多く含む、混成層
P133 隅丸方形 (190)×(85)×56cm	1 2-6	柱痕跡 礎石じりの混成層 土跡跡片	P117 隅丸方形 133×102×92cm	1 2-6	柱痕跡 掘り方埋土
P134 不明 (105)×(15)×45cm	①-③	掘り方埋土 灰黄色系の小ブロックが混じる	P118 隅丸方形 135×(50)×97cm	①-②	掘り方埋土 黄褐色系の混成層
P113 隅丸方形 150×121×75cm	1 2	掘り方埋土 柱痕跡	P116 隅丸方形 116×130×90cm	1-2 3-6	柱痕跡 掘り方埋土
P114 隅丸方形? 128×(85)×86cm	2-4	掘り方埋土 黄褐色・黒褐色土の混成層 柱痕跡30cm程 土跡跡片 抜き取り後の遺構跡 明黄褐色土の混成層			

第16図 SB1垂直柱建物跡柱穴断面

東西軸×南北軸×深さ ○：残存壁

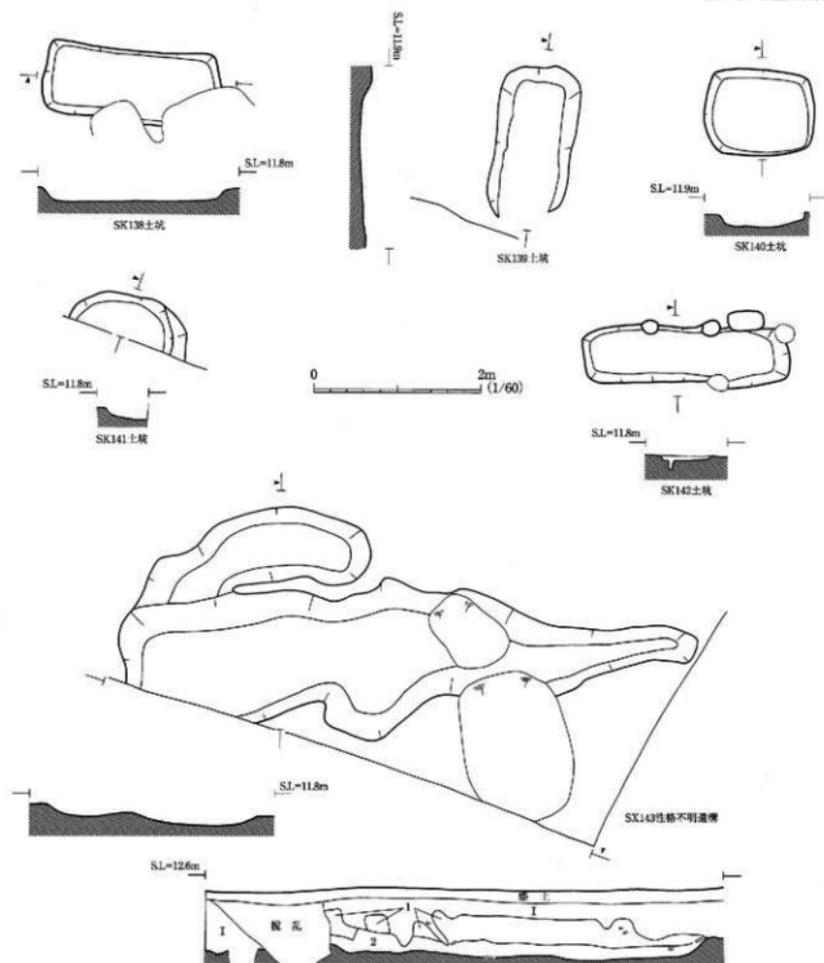
第2章 調査の結果



平面形・面積	層位	特徴	平面形・面積	層位	備考				
P111 隅丸方形 125×98×36cm	1	埋土	PB 隅丸方形 100×(83)×cm	1	掘り方埋土 確認のみ				
P110 隅丸方形 98×76×30cm	1・2	埋土	PC 隅丸方形 119×(68)×cm	1	掘り方埋土 確認のみ				
P115 隅丸方形 95×(62)×106cm	1~3	埋土	PD 方形 (65)×(79)×cm	1	掘り方埋土 確認のみ				
P126 方形 ² (97)×(82)×39cm	1~3	埋土	PE 方形 (62)×(30)×cm	1	掘り方埋土 確認のみ				
PA 隅丸方形 (107)×(37)×cm	1	掘り方埋土	PF 隅丸方形 191×(112)×cm	1	柱取跡 柱取跡跡34cm				
			JG 隅丸方形 (140)×(58)×cm	1	掘り方埋土 確認のみ				
層位	色	性質	備考	層位	色	性質	備考		
SK127	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	ブロック状の凝成層	SK135	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	明黄褐色土が混じる
	2	明黄褐色 10YR7/6	シルト	ブロック状の凝成層		2	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	ブロックが直に混じる
		明黄褐色 10YR7/6	シルト				明黄褐色 10YR7/6	シルト	
SK128	1	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	ブロック状の凝成層	SK136	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混じる
		明黄褐色 10YR7/6	シルト			2	黄褐色 10YR4/3	シルト	ブロック状の凝成層
		にぶい黄褐色 10YR6/3	シルト				明黄褐色 10YR7/6	シルト	

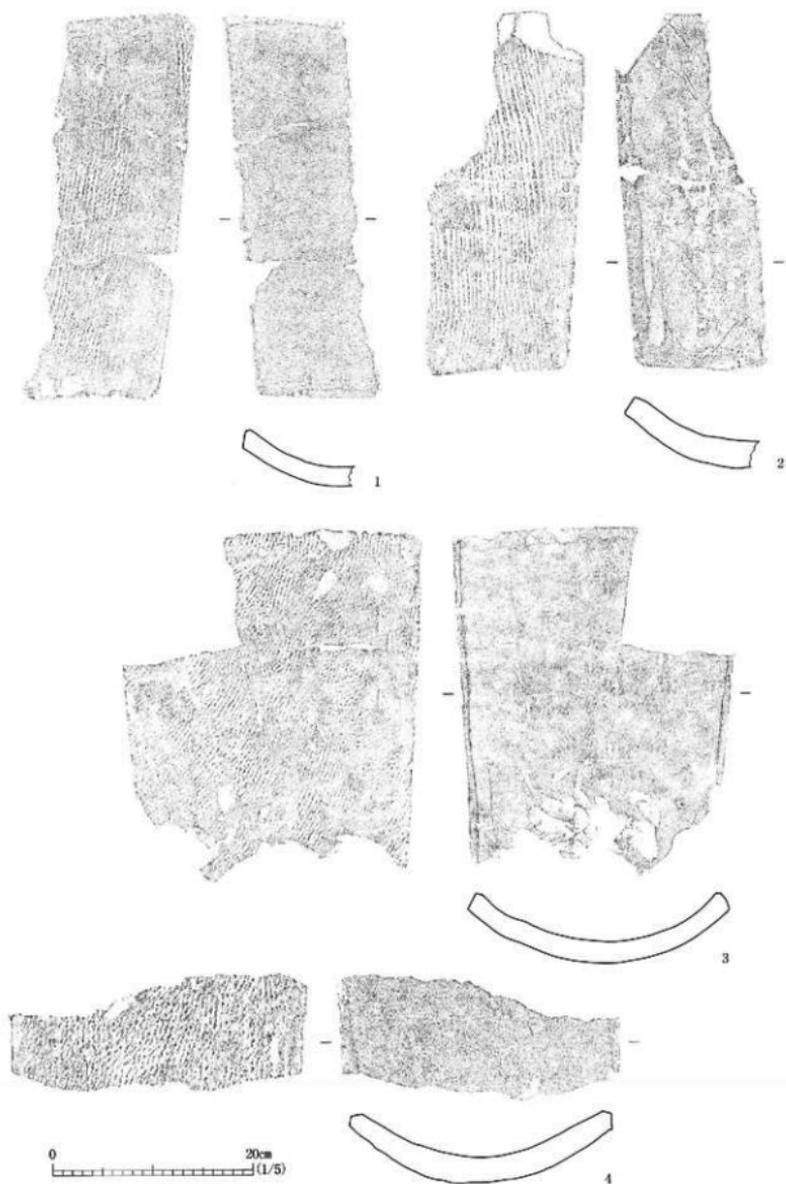
第17図 4 トレンチ柱穴・土坑断面

真西軸・南北軸×開き 0:残存

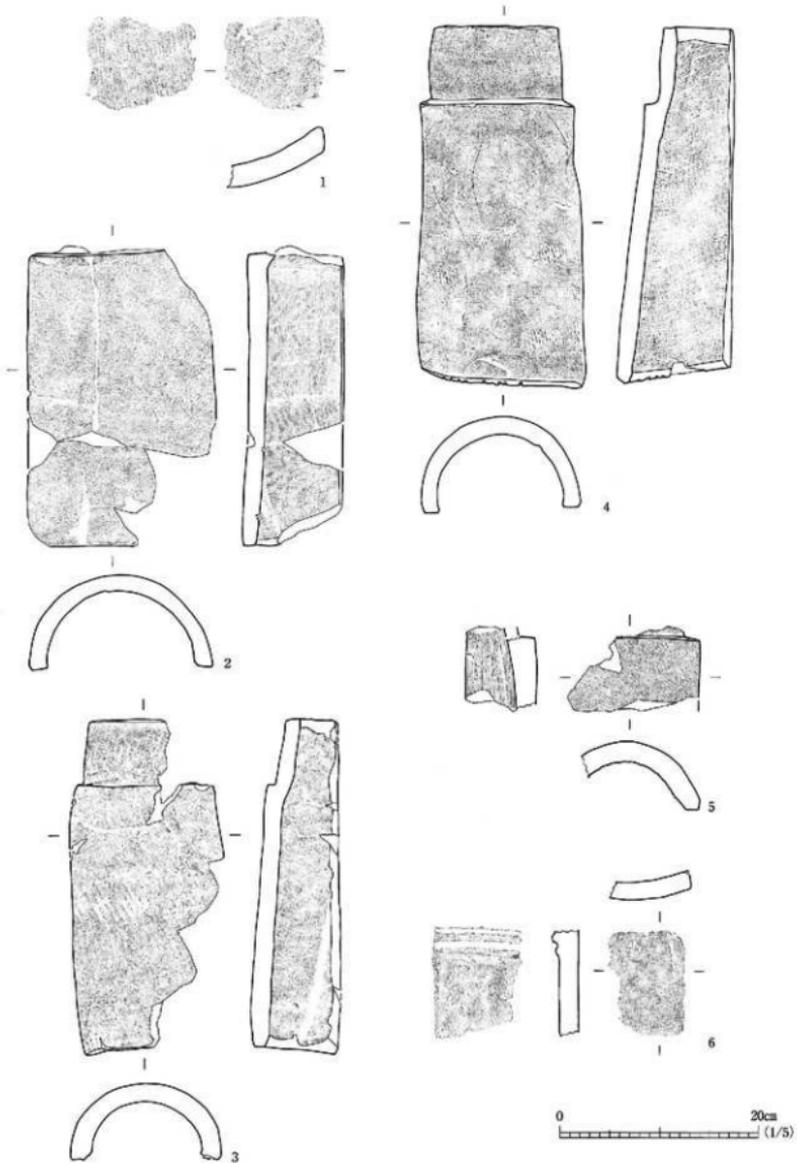


層位	色調	性質	備考	層位	色調	性質	備考
SK137	1 黒褐色 10YR3/2	シルト	灰・焼土・明黄褐色土を少量含む ブロック状の混成層	SK140	1 黒褐色 10YR3/1	シルト	ブロック状の混成層
	2 黒褐色 10YR3/1	シルト			2 黒褐色 10YR3/1	シルト	
	黄褐色 10YR4/2	シルト			明黄褐色 10YR7/6	シルト	
	明黄褐色 10YR7/6	シルト		SK141	1 濃い黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化層・明黄褐色土ブロックを含む
SK138	1 黒褐色 10YR3/1	シルト	ブロック状の混成層	2 黒褐色 10YR4/1	シルト	明黄褐色土ブロックを多く含む	
	1 褐色 10YR5/1	シルト		SK142	1 暗褐色 10YR3/3	シルト	明黄褐色土の細かいブロックを含む
SK139	1 明黄褐色 10YR7/6	シルト	明黄褐色土・黒褐色土のブロックを含む	SX143	1 灰黄褐色 10YR5/2	シルト	炭化層・明黄褐色土の小ブロックを含む
	1 灰黄褐色 10YR6/2	シルト		2 灰黄褐色 10YR5/2	シルト	炭化層・明黄褐色土のブロックを含む	

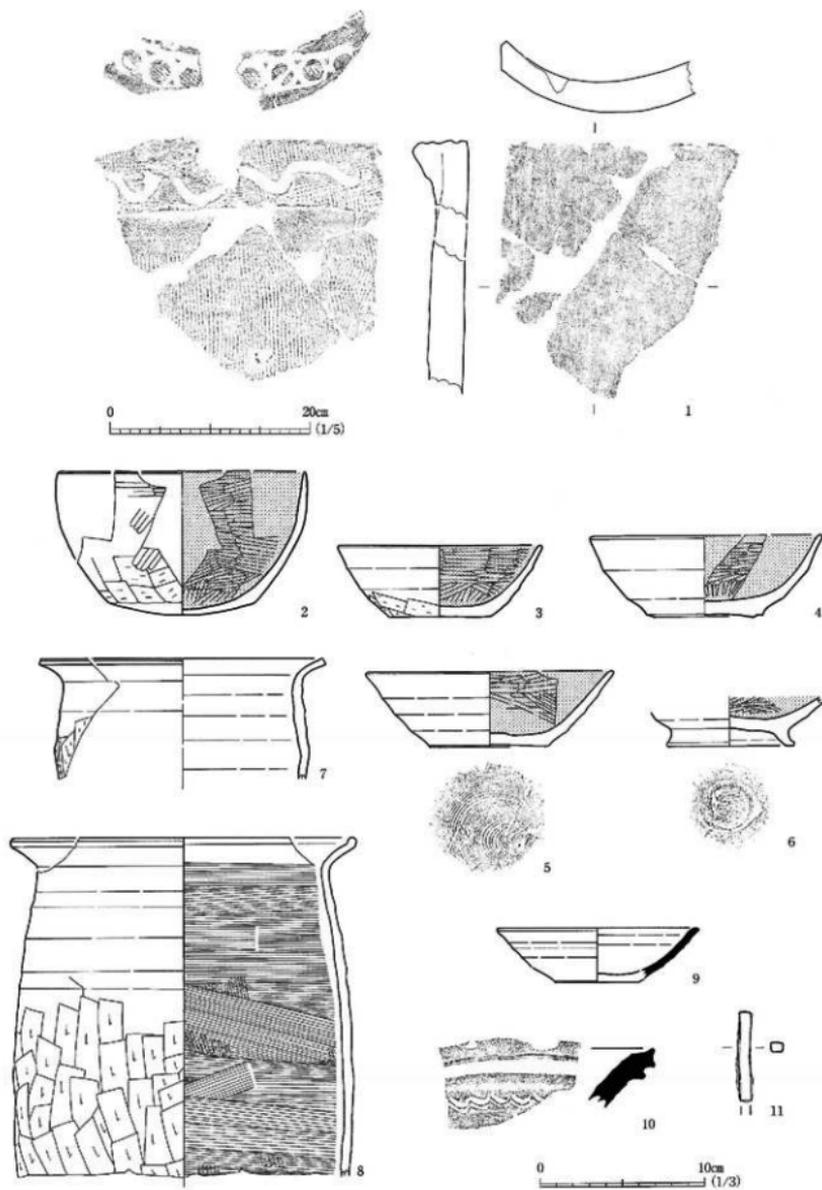
第18図 4トレンチ土坑・性格不明遺構断面



第19図 4トレンチ出土遺物 1

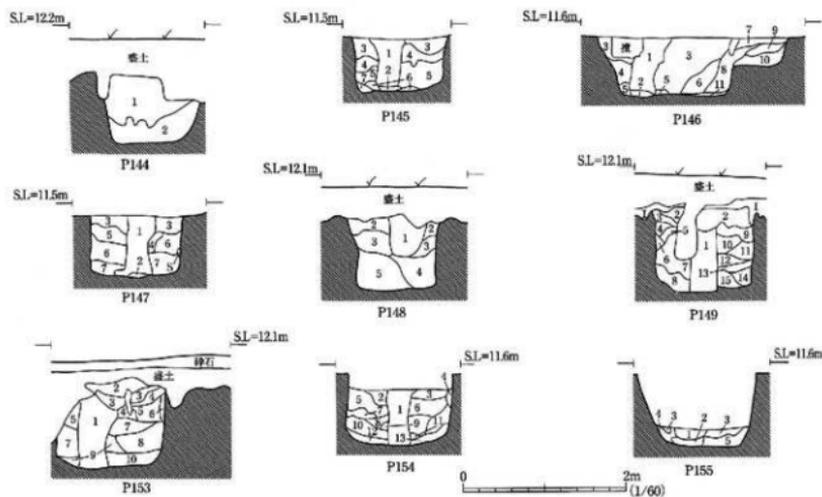


第20図 4トレンチ出土遺物2



第21図 4トレンチ出土遺物3

P146・P147・P155)で西から2.85m+3.1m+3間分で9.1m、南側柱列(P148・P149・P153・P154)で西から3.05m+3.05m+3.05mである。P154とP155の柱間寸法は2.5mである。東西列と南北列の柱間間隔の違い、SB1との位置関係から、柱列は建物跡底部分に当たるものと推定した。なお、7トレンチでの遺構検出状況や立ち会い調査での状況から柱列は東側に伸びないことが確認されている。このことから身舎部分をSB1と同規模と考え南側にも底を配した建物を想定すると、14トレンチP307が南西隅の柱穴となる梁行4間(11.6m)、桁行15間(44.8m)の建物跡となる。後述するが上総国分尼寺伽藍配置に同様のものがあり妥当と判断した。建物方向は東妻の柱列が真北に対し約5°西偏している。柱穴の規模は南北軸の長さが154~240cm、東西軸の長さが107~152cmで隅丸の長方形を呈している。柱穴の北側には浅い段がみられ二段の掘り込みとなっていた。柱痕跡は径35cm前後のものである。掘り方埋土は黒褐色土と明黄褐色土の混成層となるものが多い。遺物は弥生土器、瓦片・須恵器片が数点出土するのみである。掲載遺物は弥生土器甕(図25-1)1点である。



	平面形・規模	掘り方	備考		平面形・規模	掘り方	備考
P144	隅丸方形? (100)×(113)×88cm	1~2 掘り方埋土	溝の幅 平瓦 弥生土器	P149	隅丸方形 (107)×130×100cm	1 柱穴跡	柱穴跡径33cm前 溝の幅
P145	隅丸長方形 (172)×119×69cm	1~2 柱穴跡 3~7 掘り方埋土	柱穴跡径58cm前 溝の幅	P153	隅丸方形 (142)×(60)×108cm	1 掘り方埋土	柱穴跡径36cm前 溝の幅
P146	隅丸長方形 241×133×74cm	1~2 柱穴跡 3~11 掘り方埋土	柱穴跡径31cm前 溝の幅 須恵器片	P154	隅丸方形 153×123×88cm	1 柱穴跡	柱穴跡径30cm前 溝の幅
P147	隅丸方形? (53)×113×75cm	1~2 柱穴跡 3~7 掘り方埋土	柱穴跡径35cm前 溝の幅	P155	隅丸方形 99×158×88cm	1~2 掘り方埋土	柱穴跡径33cm前 溝の幅
P148	隅丸方形 (97)×108×89cm	1~5 掘り方埋土	南側で柱穴跡確認、径30cm前 溝の幅				

東西軸×南北軸×深さ 〇:残存痕

第23図 SB2掘立柱建物跡柱穴断面

2) 土坑

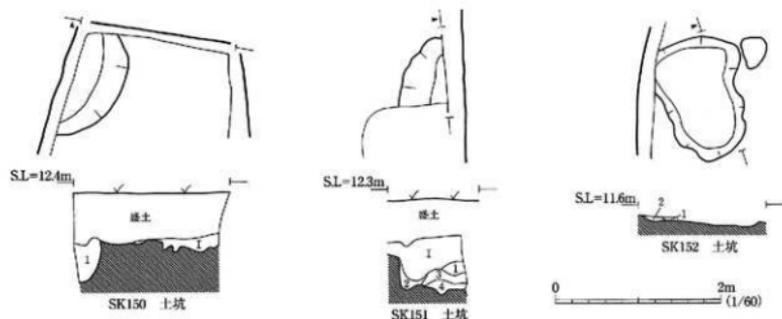
SK150土坑 5トレンチ西の北西隅部の隙に位置する。平面形は円形を基調とするが不明である。壁南北辺で1.3mを測る。堆積土は1層確認している。黒褐色土のシルト層である。遺物は丸瓦片が出土している。

SK151土坑 5トレンチ西の東壁に位置する。南側は攪乱され平面形は不明である。壁面はきつく立ち上がり、底面はやや凹凸面となる。深さ70cmを測る。堆積土は4層確認している。遺物は平瓦片が出土している。

SK152土坑 5トレンチ西のSK150の南に位置する。平面形は長円形を基調とする不整形である。南北軸150cm、東西軸最大110cm、深さ5cmを測る。断面形は皿状で立ち上がりが緩やかである。堆積土は2層確認されている。遺物は丸瓦片・平瓦片が出土している。

3) その他の遺物

I層中から少量の遺物が出土している。掲載遺物は平瓦(図25-2)1点である。



層位	色調	性質	備考	層位	色調	性質	備考		
SK150 1	黒褐色	10YR3/2	シルト	明黄褐色1・雜が混じる	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	明黄褐色土ブロックが混じる
SK150 2	灰黄褐色	10YR5/2	粘土質シルト	下部に酸化鉄染層	2	黄褐色	10YR3/2	シルト	明黄褐色土ブロックが混じる
SK152 1	暗褐色	10YR6/3	シルト質粘土	焼土・灰化層が多量に混じる	3	明黄褐色	10YR7/6	シルト	ブロック状に増粘
				SK151 4	黒褐色	10YR3/1	シルト	明黄褐色土ブロックが混じる	

第24図 5トレンチ土坑平面断面

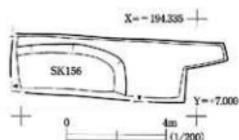


番号	種別	遺物・層位	特徴	分類	登録番号	写真図版
25-1	弥生土器片	P144 焼土	口縁部から底部の小破片、外側：口縁部-ミガキ、作部-LR陶文、内面：摩滅で不明		B-001	
25-2	平瓦	基本層 1層	凸面：平円印赤(細目・縦空)、面角鈍る、両縁にヘタケズリ、凹面：糸切り痕、老目痕、ナデ、両縁にヘタケズリ、厚さ18cm、色調は灰白色	1b	G-011	

第25図 5トレンチ出土遺物

第5節 7トレンチの調査(平成14年度)

道路北側、3トレンチと6トレンチの間に位置する。東西9m、南北2.5mの調査区である。



第26図 7トレンチ全体図

1. 基本層位

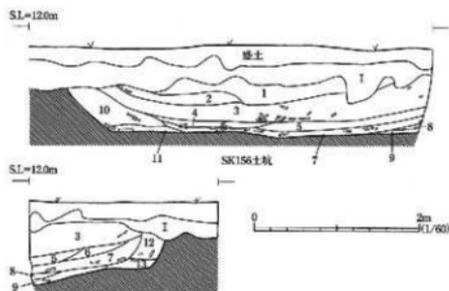
2層確認している。I層は旧耕作土である。上層からの掘削・攪拌のためかII層は確認されず、I層下で遺構検出面となるIII層が確認される。

2. 発見遺構と出土遺物

土坑を1基確認している。部分的な検出であるが大型の土坑と判断される。軒瓦をはじめとし多くの遺物が出土している。基本層からは瓦片・土器片が出土している。

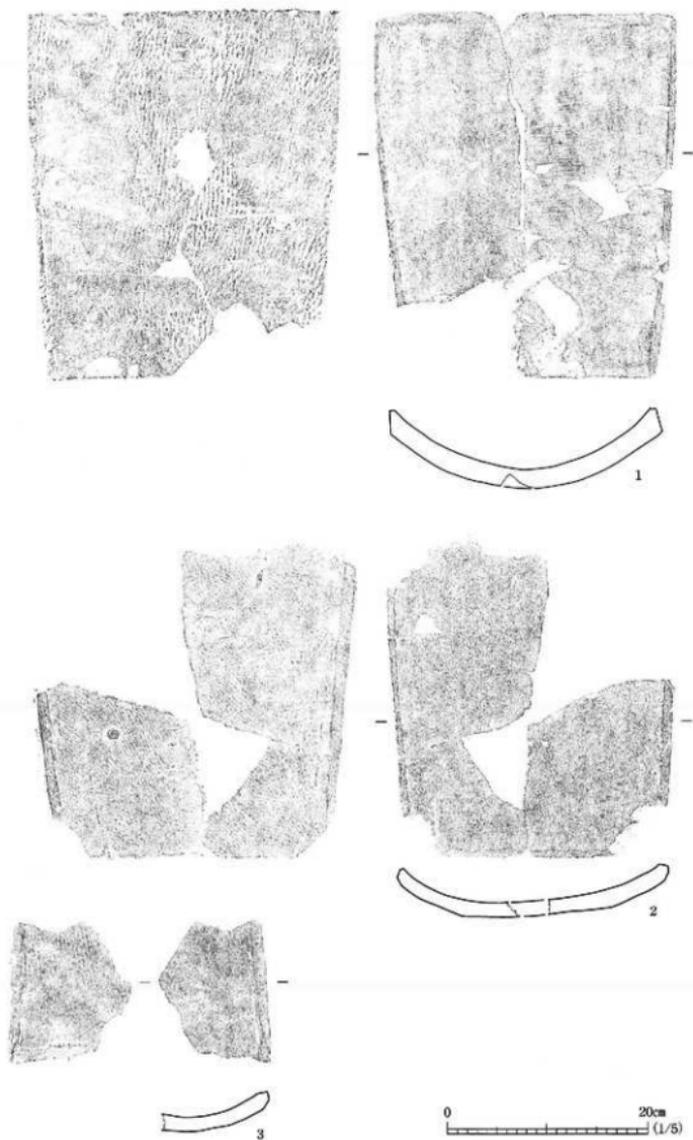
1) 土坑

SK156土坑 平面形は部分的な確認で判然としないが不整な円形と判断される。大きさは東西軸で4.2m、南北軸で1.8mまで測れた。断面形は船底状で壁面はややきつく立ち上がる。深さは最大で70cmを測る。堆積土は大別で4層確認し13層に細別した。灰黄褐色土及び黒褐色土のシルトでレンズ状堆積となっている。堆積土中及び底面から多量の遺物が出土している。大部分は瓦類で、他に土師器、須恵器、鉄滓、フィゴの羽口がある。なお、丸瓦凸面に「田?」の刻印、土師器坏外面に「万」、須恵器坏底部に「山」と墨書されたものがある。掲載遺物は重弁蓮華文軒丸瓦(図35-7)、単弧文軒平瓦(図35-5・6)、平瓦(図28-1~33-1)、丸瓦(図33-2~35-4)、土師器坏・甕(図36-1~6)、須恵器坏・高台付坏(図36-7~21)、フィゴの羽口(図36-22)の51点である。

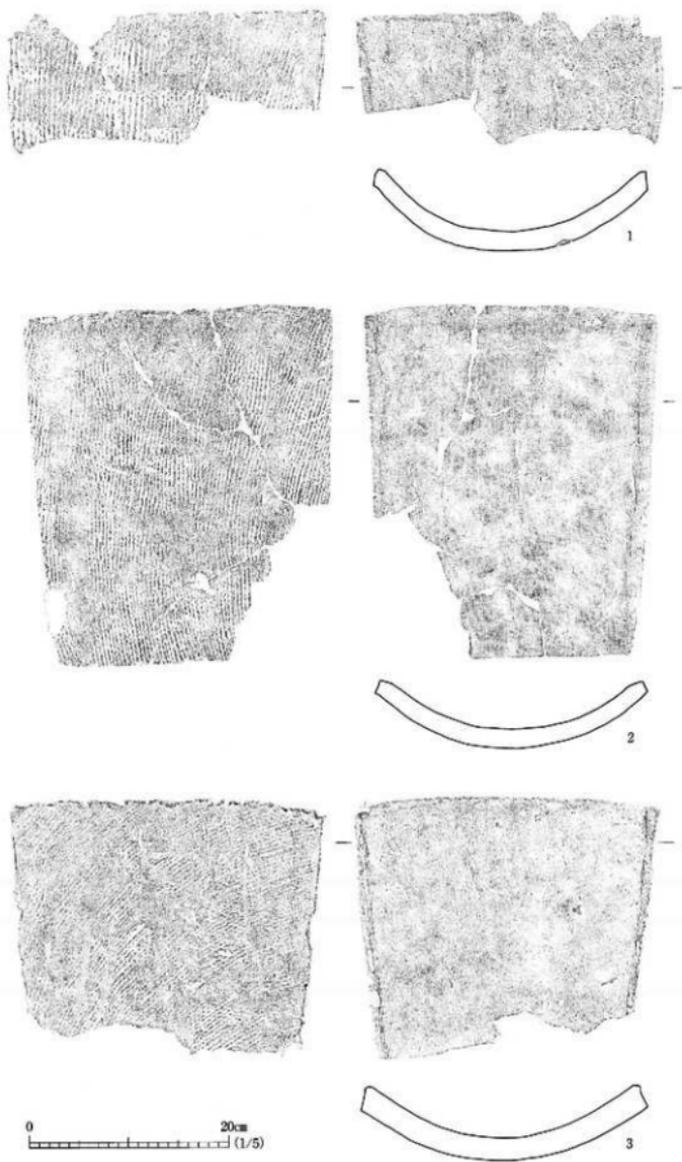


層位	色調	性質	備考	層位	色調	性質	備考
1	無褐色	10YR3/2	シルト	6	灰黄褐色	10YR5/2	シルト
1	1	にぶい黄褐色	10YR5/3	7	暗灰色	10YR4/1	シルト
2	2	灰黄褐色	10YR6/2	8	灰黄褐色	10YR5/2	シルト
		黒色	10YR2/1	9	暗灰色	10YR5/1	シルト
2	3	明黄褐色	10YR7/6	10	無褐色	10YR3/1	シルト
		灰黄褐色	10YR6/2	11	暗灰色	10YR5/1	シルト
3	4	灰黄褐色	10YR6/2	12	灰黄褐色	10YR4/2	シルト
3	5	暗灰色	10YR4/1	13	黒褐色	10YR3/1	シルト

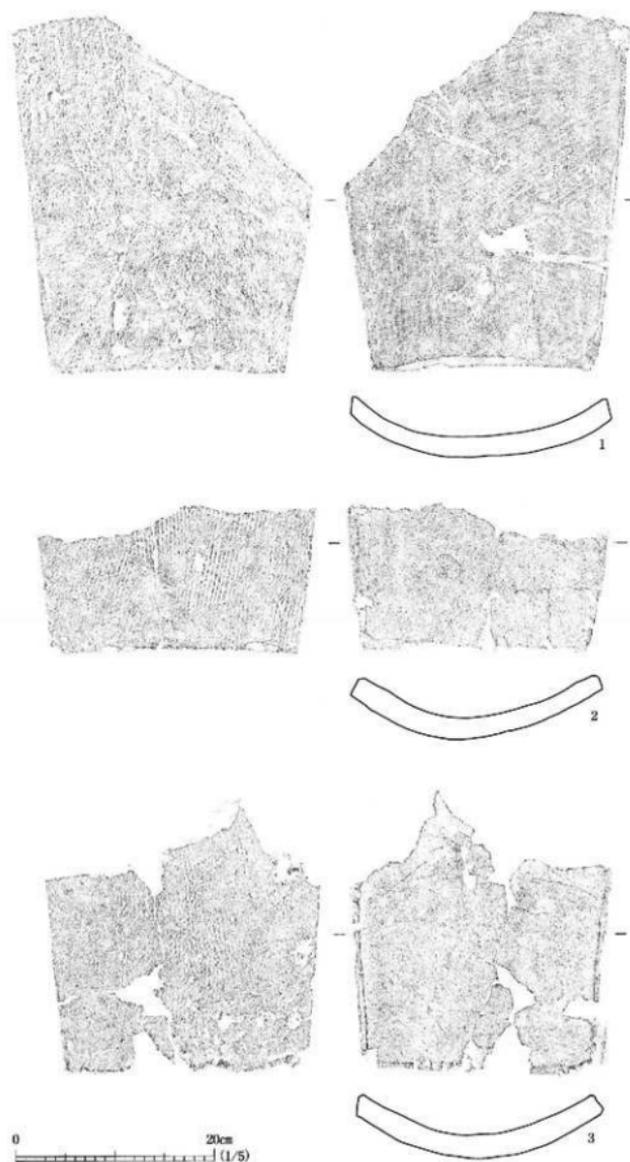
第27図 SK156土坑断面



第28図 SK156土坑出土遺物 1



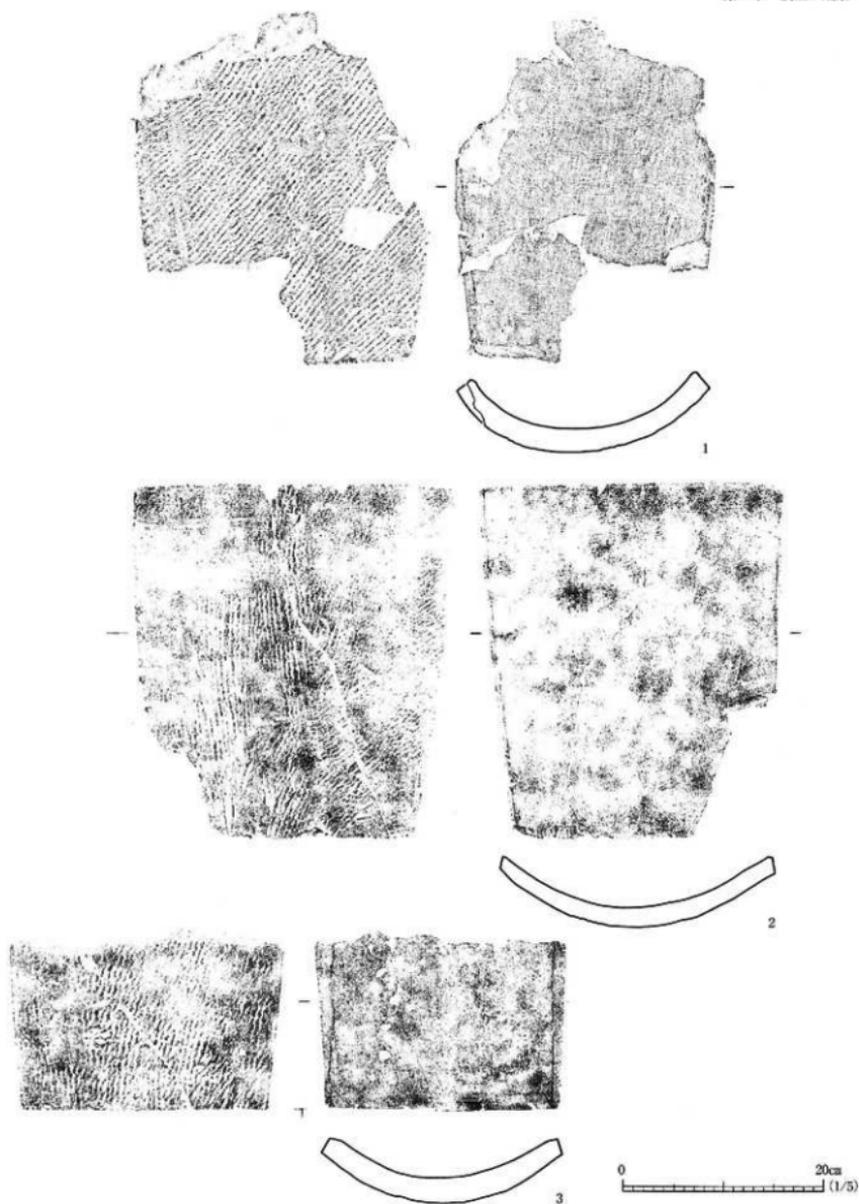
第29図 SK156土坑出土遺物 2



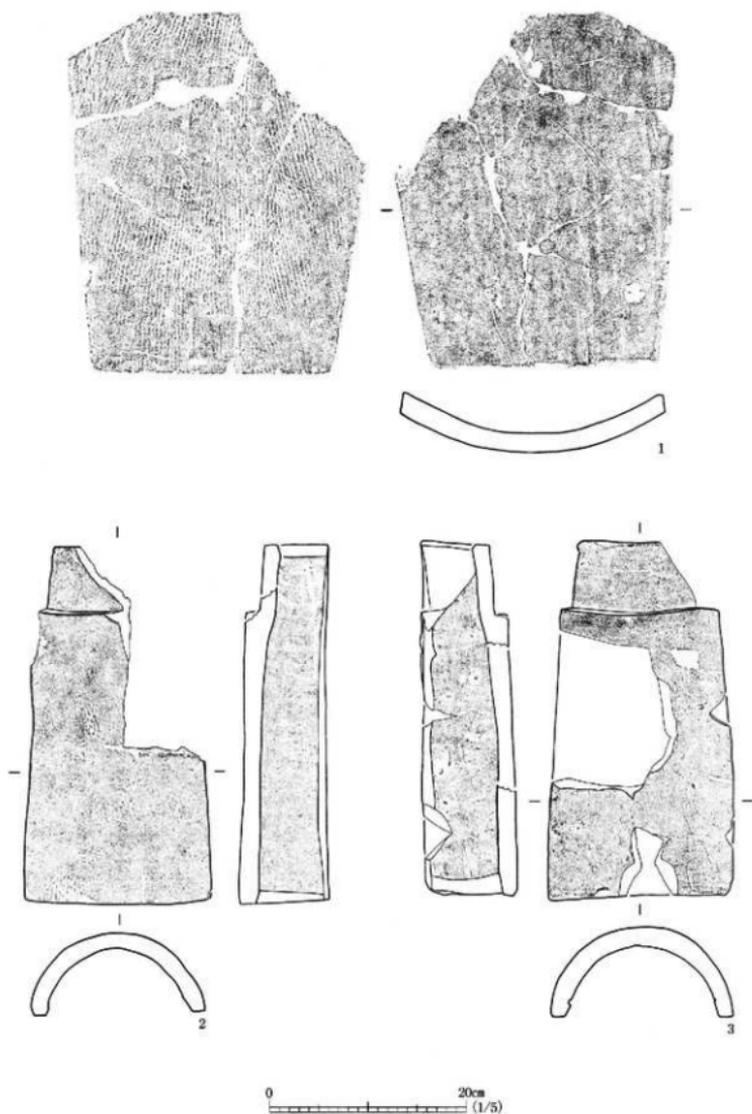
第30図 SK156土坑出土遺物 3



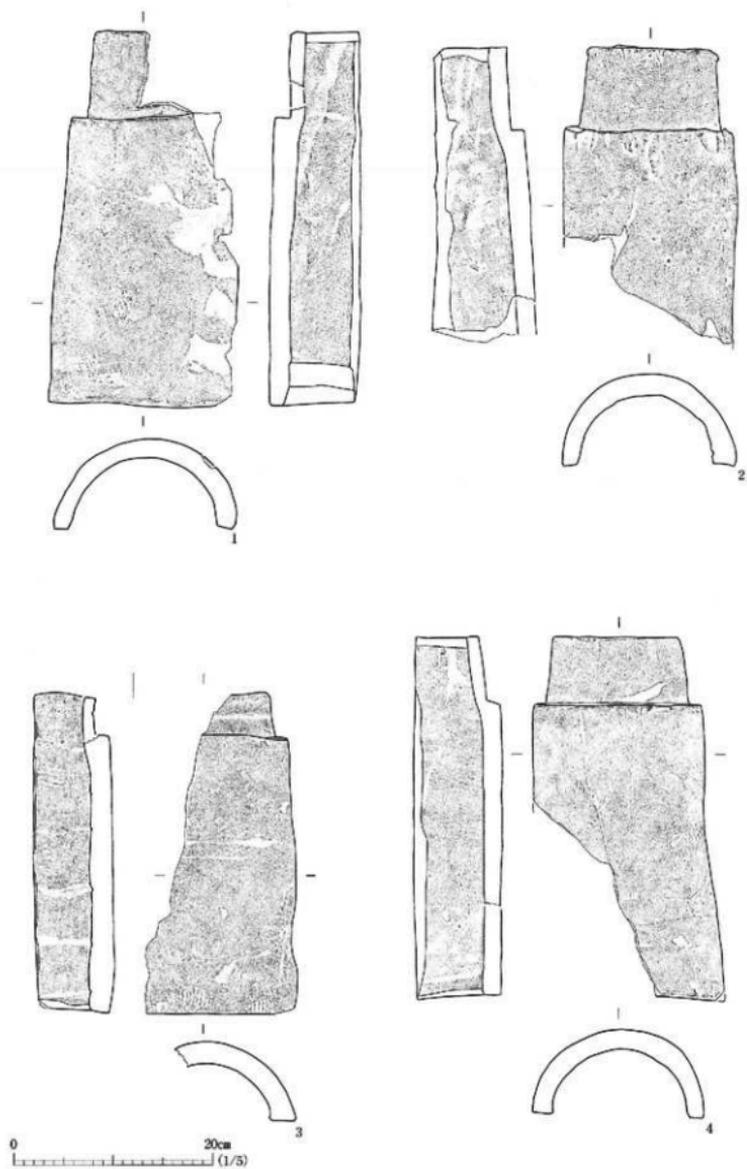
第31図 SK156土坑出土遺物4



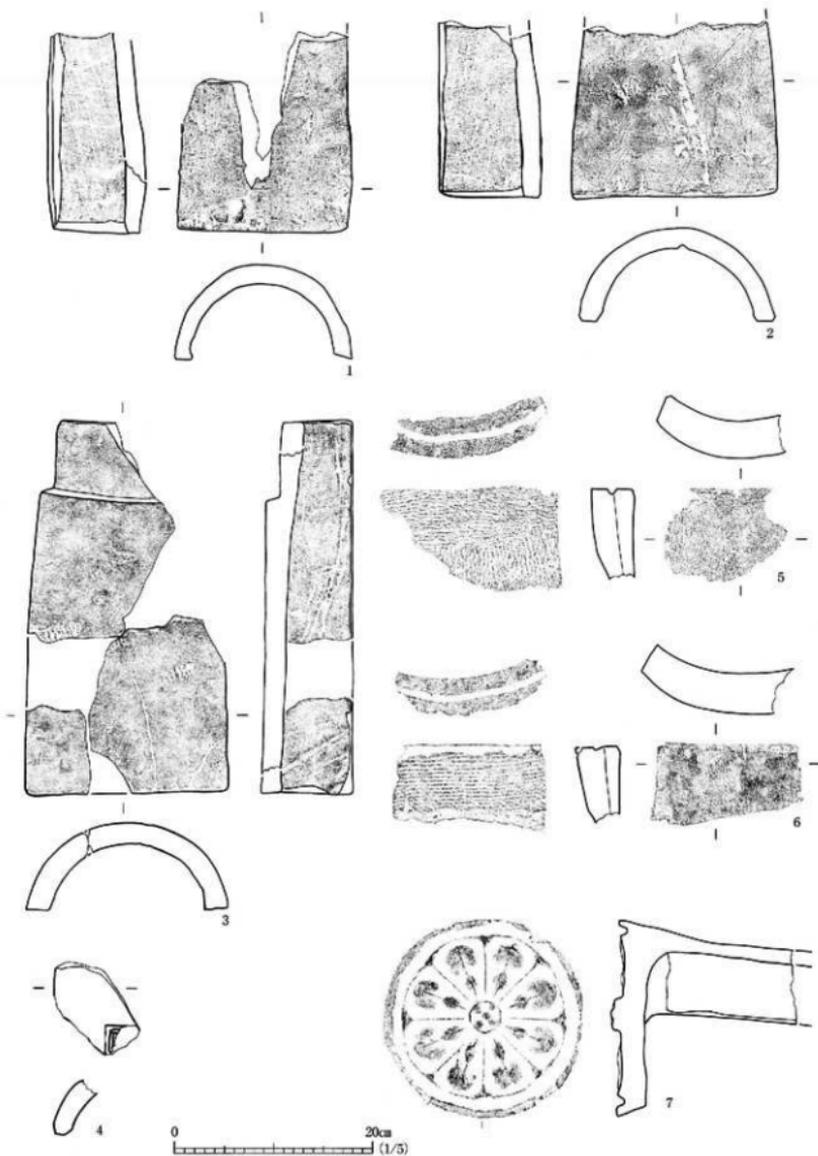
第32図 SK156土坑出土遺物 5



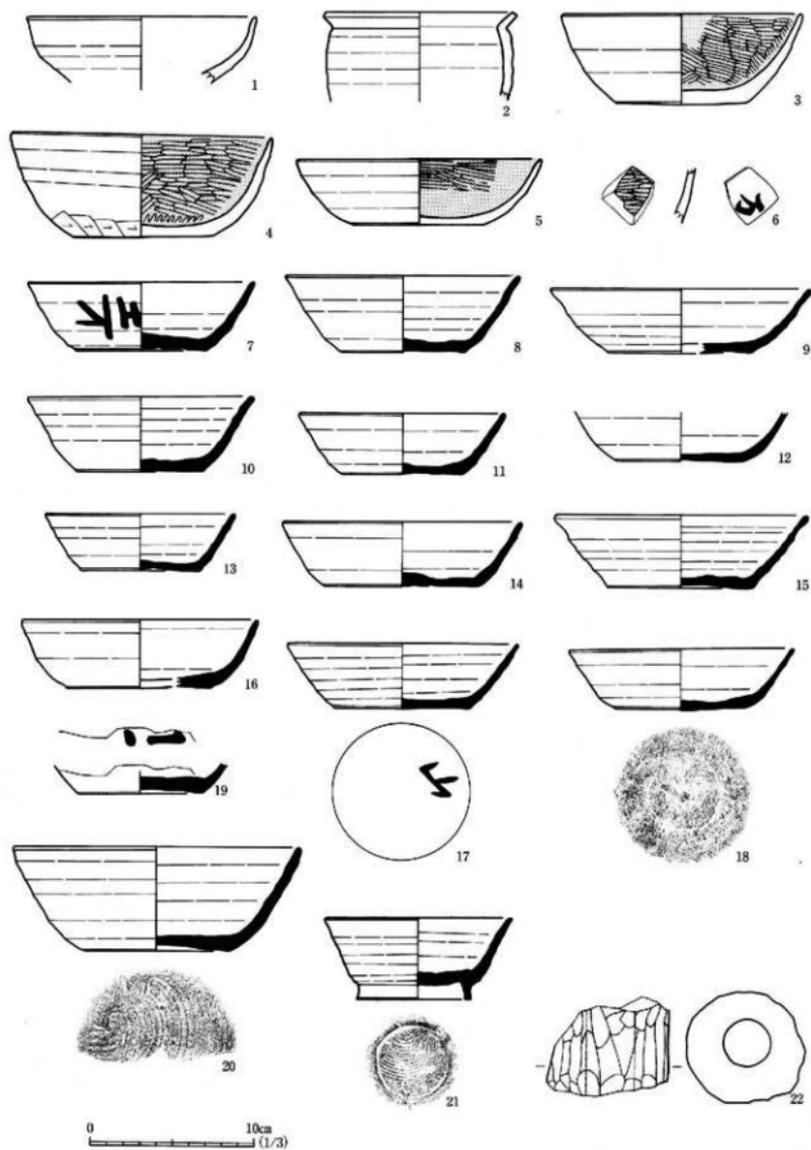
第33図 SK156土坑出土遺物 6



第34図 SK156土坑出土遺物7



第35図 SK156土坑出土遺物 8



第36図 SK156土坑出土遺物9

第2章 調査の成果

番号	種別	産地・産状	特徴	分類	登録番号	写真掲載	
28-1	平瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目）産出。横割つれられぬ。産部に凹型台付痕・本目痕。中央上下端に3×15cm程度の浅い凹痕2ヶあり。凹割：糸切り痕。布目痕、ナデ。裏面にヘラケズリ。底幅28.2cm、長幅28.2cm、厚さ2.2cm。台形で円筒状。色調は褐色	2	G-018	14-4
28-2	平瓦	SK156	3層	凸面：平打目（刷目・斜行）。つれられぬ。産部：本目痕。産部にヘラケズリ。内側面、凹面：布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ19.7cm、厚さ3.5cm。台形で円筒状。色調は褐色	1a	G-034	14-1
28-3	平瓦	SK156	3層	凸面：平打目（刷目・斜行）。底幅産部にナゲリ状のナデ。縦割にヘラケズリ。内側面、凹面：布目痕。本目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ21.2cm、厚さ1.6cm。断面形状は扁平状。色調は褐色	1b	G-033	
29-1	平瓦	SK156	風土	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。横割つれられぬ。産部に凹型台付痕・本目痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。裏面にヘラケズリ。底幅27cm、長さ2.2cm。台形で円筒状。色調は灰色	2	G-027	
29-2	平瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。横割つれられぬ。凹割：糸切り痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ30cm、底幅28.2cm、厚さ2.2cm。台形で円筒状。色調は灰色	2	G-032	14-6
29-3	平瓦	SK156	4層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。ナデ。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ26cm、底幅28.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	2	G-038	
30-1	平瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。糸切り痕。産部に凹型台付痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ36.6cm、厚さ2.2cm。底幅28.2cm。台形で円筒状。色調は灰色	2	G-013	13-2
30-2	平瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。底幅28.2cm、長さ2.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	2	G-016	
30-3	平瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。横割つれられぬ。糸切り痕。産部に凹型台付痕。凹割：布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。底幅28.2cm、長さ2.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	2	G-029	
31-1	平瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。横割つれられぬ。産部に凹型台付痕。凹割：布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ36.6cm、底幅28.2cm、厚さ2.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	2	G-036	15-6
31-2	平瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ37.3cm、底幅28.2cm、厚さ2.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	2	G-035	14-3
31-3	平瓦	SK156	4層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ23cm、台形で円筒状。色調は赤褐色	2	G-041	
32-1	平瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ31cm、台形で円筒状。色調は灰色	2	G-028	15-7
32-2	平瓦	SK156	4層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ36.5cm、底幅28.2cm、厚さ2.2cm。台形で円筒状。色調は灰白色	2	G-042	15-1
32-3	平瓦	SK156	4層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。斜行。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：糸切り痕。布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。底幅28.2cm、長さ2.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	2	G-040	
33-1	葎瓦 崩れ瓦	SK156	4層	凸面：刷毛目（刷目・縦目）。横割つれられぬ。産部に本目痕。凹割：布目痕。ナデ。縦割にヘラケズリ。長さ27cm、底幅28.2cm、厚さ2.2cm。台形で円筒状。色調は黄褐色	4	G-037	14-7
33-2	丸瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3.5cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ36.8（36.9）×65 cm。底幅28.9cm、長さ9.1cm、厚さ2.2cm。大形筒。色調は灰白色	1b	F-012	13-6
33-3	丸瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3.5cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ36.8（36.9）×65 cm。底幅28.9cm、長さ9.1cm、厚さ2.2cm。大形筒。色調は灰白色	1b	F-011	13-1
34-1	丸瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3.5cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.2（38.9）×88 cm。底幅28.9cm、長さ9.2cm、厚さ2.2cm。大形筒。色調は灰白色	1b	F-011	13-7
34-2	丸瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅4cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0（36.2）×82.1cm。底幅28.2cm。大形筒。色調は灰色	F-023		
34-3	丸瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅4.5cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0（36.2）×82.1cm。底幅28.2cm。大形筒。色調は灰色	1b	F-022	
34-4	丸瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3.5cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ36.6（36.9）×87 cm。高さ（S）7cm。厚さ1.2cm。大形筒。色調は赤褐色	1b	F-024	
35-1	丸瓦	SK156	3層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3.5cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0cm、高さ9.2cm、厚さ2.2cm。大形筒。色調は灰色	1a	F-027	
35-2	丸瓦	SK156	1層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0cm、高さ9.2cm、厚さ1.8cm。大形筒。色調は灰色	1b	F-026	
35-3	丸瓦	SK156	4層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0（36.7）×87 cm。高さ9.1cm、厚さ2.2cm。大形筒。色調は灰白色	1b	F-025	13-5
34-4	丸瓦（刷目）	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3×3cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0cm、高さ9.2cm。大形筒。色調は灰色	F-010		10-5
35-4	軒平瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0cm、高さ9.2cm。大形筒。色調は灰色	G-012		産部 軒平瓦 4
35-5	軒平瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0cm、高さ9.2cm。大形筒。色調は灰色	G-030		産部 軒平瓦 3
35-7	軒丸瓦	SK156	2層	凸面：刷毛目（刷目・斜行）。側面：刷毛目（刷目・斜行）。凹割：糸切り痕（幅3cm）。布目痕。縦割にヘラケズリ。長さ37.0cm、高さ9.2cm。大形筒。色調は灰色	F-021		産部 軒丸瓦 3
36-1	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	c	D-013	
36-2	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1b	D-016	18-4
36-3	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1a	D-014	18-5
36-4	土師器 平	SK156	3層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	2	D-015	18-6
36-5	土師器 平	SK156	3層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1	E-005	16-9
36-6	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1	E-006	16-10
36-7	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1	E-007	17-8
36-8	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1	E-008	
36-9	土師器 平	SK156	2層	口縁部：体部は内径5cm以内にはほぼ直徑に立ち上がる。口縁部はくの字にきつくなく外傾する。作部は上方に三角状の突起がある。内外ともに口縁部のみ。口縁径（115cm）×底径（85cm）	1	E-010	17-9

番号	種類	遺構・層位	特 徴	分類	記録番号	写真図版
36-11	灰重器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部はゆるく外側気味に立ち上がり口部端で丸くおさまる 口径径12cm、底径7cm、器高3cm、磨化表焼成	1	E-011	17-10
36-12	灰重器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部はゆるく外側気味に立ち上がる、底径7cm、火熱で変色	3	E-012	
36-13	灰山器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部は外側気味に立ち上がり口部端にいたる 口径径11cm、底径7cm、器高3cm	1	E-013	
36-14	灰重器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部は外側気味に立ち上がり口部端にいたる 口径径16cm、底径10cm、器高3cm	1	E-014	17-11
36-15	灰重器 坏	SK156 3層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部は外側気味に立ち上がり口部端で丸く外反する 口径径15cm、底径7cm、器高4cm	1	E-015	17-12
36-16	灰重器 坏	SK156 2層	火熱を受け調整等不明、体部は内側気味に立ち上がり口部端にいたる 口径径14cm、底径9cm、器高3cm、磨化表焼成	1	E-016	
36-17	灰重器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部はゆるく外側気味に立ち上がり口部端にいたる、 体部は外側気味に立ち上がり口部端にいたる、口径径14cm、底径9cm、器高4cm	1	E-004	16-9
36-18	灰山器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部は外側気味に立ち上がり口部端にいたる 口径径13cm、底径9cm、器高3cm	1	E-000	17-14
36-19	灰重器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切りで無彫装、外部に磨化あり、底径7cm	1	E-039	
36-20	灰重器 坏	SK156 2層	切り跡は紅灰へう切り(右回り)で無彫装、外部は外側気味に立ち上がり口部端にいたる 口径径17cm、底径9cm、器高6cm	3b	E-006	17-15
36-21	灰山器 高台付坏	SK156 1層	切り跡は紅灰へう切り(右回り)、体部下層にヘラケズリがみられ縁をもつ、耳高、 外部は外側気味に立ち上がり口部端にいたる、口径径11cm、器高5cm、高台径7cm、高台高9cm		E-003	17-16
36-22	土製品 土皿	SK156 2層	フイゴの取口、ケズリ及びタゲで底形、残存径6cm、最大幅7cm、孔径2cm		F-001	18-13

第6節 8トレンチの調査(平成14年度)

道路北側の西端に設定した東西9m、南北2mの調査区である。平成9年度の第7次調査で確認された寺域の区画と考えられる溝跡の延長線が想定される地点にあたる。

1. 基本層位

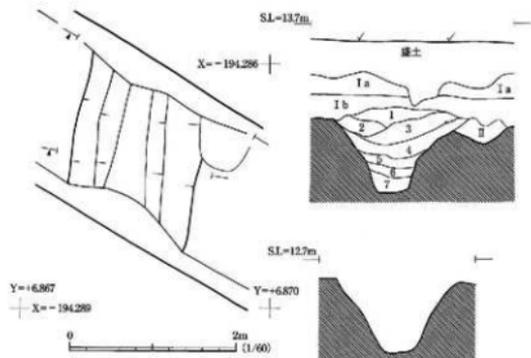
I～IIIの3層確認している。I層は旧耕作土である黒褐色土で2層に細分した。II層は部分的な確認であるが溝跡の確認面となる。他地点のII層よりもやや明るく灰黄褐色を呈している。III層は明黄褐色土シルトで遺構検出面である。

2. 発見遺構と出土遺物

トレンチ中央で南北方向に延びる溝跡を1条確認した。遺物は丸瓦及び平瓦が出土しているが大半が破片である。

1) 溝跡

SD157溝跡 南北方向に延びる溝跡で確認長約1.8mである。上端幅1.5m、下端幅40cm、深さ1mを測る。断面形は逆台形である。堆積土は7層確認し、レンズ状堆積を呈している。遺物はほとんどが瓦類で各層から出土しているが、特に、2・3層からの出土が多い。その他、土師器片も出土している。溝跡の方向は確認長が短いため判然としないが、やや東に偏するがほぼ真北方向を向くものと考えられる。



第37図 8トレンチ全体図

層位	色調	性質	備考	層位	色調	性質	備考
1a	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト
1b	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト
II	灰黄褐色	10YR3/2	シルト	5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト
III	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	6	にがい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト
	明黄褐色	10YR7/6	シルト	7	暗褐色	10YR3/3	シルト
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト		灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト

第38図 SD157溝跡

第7節 9トレンチの調査(平成14年度)

道路南側の最も西側に位置する。8トレンチで検出された溝跡の延長線が想定される地点にあたり、東西9m、南北2mの調査区を設定した。

1. 基本層位

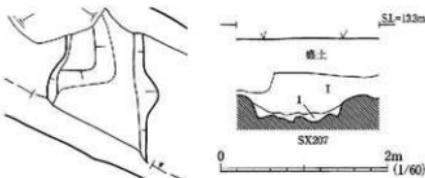
盛土下でI層及びIII層の2層を確認した。I層は旧耕作土である。攪拌及び攪乱のためII層は確認されない。III層は明黄褐色土の粘土質土である。

2. 発見遺構と出土遺物

トレンチ西側で溝状の遺構を1基確認したのみである。I層中からは瓦片が出土している。

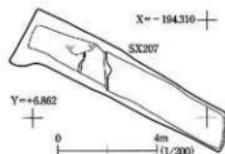
1) 性格不明遺構

SX207性格不明遺構 南北方向に直線的に延びるものである。東西幅最大で1.35mを測る。底面は凹凸面となっており部分的に段もみられる。壁はきつく立ち上がり、断面形は逆台形状である。堆積土はI層確認している。堆積土及び基本層の状況から新しい時期の可能性がある。



層位	色 調	性質	備 考
I	暗褐色	10YR3/3 シルト	田舎土
III	黒褐色	10YR3/1 シルト	暗褐色土のブロックが混じる

第40図 SX207性格不明遺構



第39図 9トレンチ全体図

第8節 10トレンチ・13トレンチの調査(平成14年度)

道路南側の史跡地北東部に位置する。10トレンチは東西4.5m、南北1mの調査区、13トレンチは東西2m、南北3mの調査区を設定した。

1. 基本層位

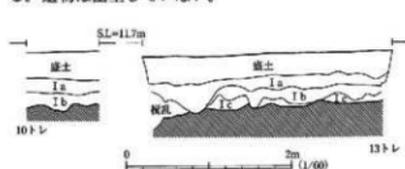
両トレンチともI・IIIの2層の確認となる。上層の掘削・攪拌のためII層は確認できず、I層直下でIII層の明黄褐色土が確認される。

2. 発見遺構と出土遺物

10トレンチで井戸跡が1基確認されたのみである。13トレンチでは遺構は確認されなかった。

1) 井戸跡

SE208井戸跡 盛土の直下で確認した。平面形は円形で直径1.3mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。丸く囲む木枠が検出され、径3cm程の小竈で埋め戻されていた。完掘はしていないが新しい時期の遺構と判断される。遺物は出土していない。



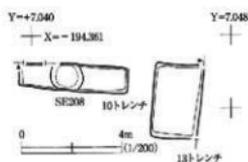
第42図 10・13トレンチ壁断面

10トレンチ

層位	色 調	性質	備 考
Ia	灰黄褐色	10YR4/2	シルト
Ib	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト

13トレンチ

層位	色 調	性質	備 考
Ia	にぶい黄褐色	10YR6/3	シルト
Ib	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト
Ic	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト
	濃黄褐色	10YR8/4	シルト



第41図 10・13トレンチ全体図

第9節 11トレンチの調査(平成14年度)

県道南側、史跡地北東端に位置する。東西12m、南北1mの調査区を設定した。

1. 基本層位

基本層位は2層確認している。I層は旧耕作土と考えられ2層に分けられる。当地点でも上層の攪拌のためかII層は確認されない。I層下でIII層の浅黄褐色土が確認され、下層は砂礫層となっている。

2. 発見遺構と出土遺物

土坑1基、性格不明遺構2基を確認した。出土遺物には瓦類がある。

1) 土坑

SK212土坑 トレンチ西側の北壁に位置する。平面形は円形と判断されるが不明である。SX210と重複し切られている。壁面での径は60cm程が確認できる。断面形は底面が凹凸となる皿状である。堆積土は1層確認している。遺物は出土していない。

2) 性格不明遺構

SX209性格不明遺構 西端部に位置する溝状のものである。東西幅1.2mまで確認している。SX210と重複し切られている。断面形は大きく船底形を呈するが底面は突起状の凹凸面となる。深さは最大30cmを測る。堆積土は1層確認した。遺物は軒丸瓦片・丸瓦片が出土している。

SX210性格不明遺構 トレンチの中央部から西側にかけて位置する溝状のものである。東西幅5.4mまで確認した。東壁面はややきつく立ち上がり、底面は不定な凹凸面である。深さは20～30cmを測る。堆積土は1層確認している。遺物は出土していない。当遺構の底面はSX209の底面より一段高く、別遺構と判断したが一連のものとも考えられる。

第10節 12トレンチの調査(平成14年度)

県道の南側、史跡範囲内の北辺の中央から東に位置する。南北幅3～3.5m、東西長57mの調査区を設定した。遺構の確認及び性格究明を主体としていることから、完掘せずに部分的な掘り下げに留めた遺構もある。

1. 基本層位

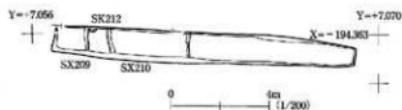
基本層序は3層に大別され、さらに8層に細別することができる。I層はにぶい黄褐色土で層の下面に凹凸があることなどから、旧耕作土と考えられる。II層はa～fに分けた。層上部はI層が混じり、下部はIII層土の混入が見られる。III層が明黄褐色の粘土質土で遺構検出面となる。下層に向かい砂礫層となる。

2. 発見遺構と出土遺物

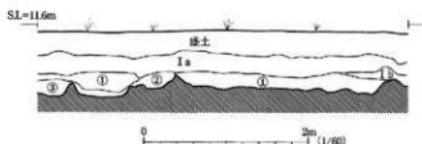
発見遺構は土坑2基、溝跡1条、柱穴1基、性格不明遺構1基である。出土遺物には瓦類、土師器、赤焼土器、須恵器がある。

1) 土坑

SK213土坑 トレンチの中央部分に位置する。SD217と重複し切っている。平面形は長円形で東西軸1.1m、南北軸80cmを測る。断面形は船底形で深さは10cm程を測る。堆積土は1層確認している。III層土をブロック

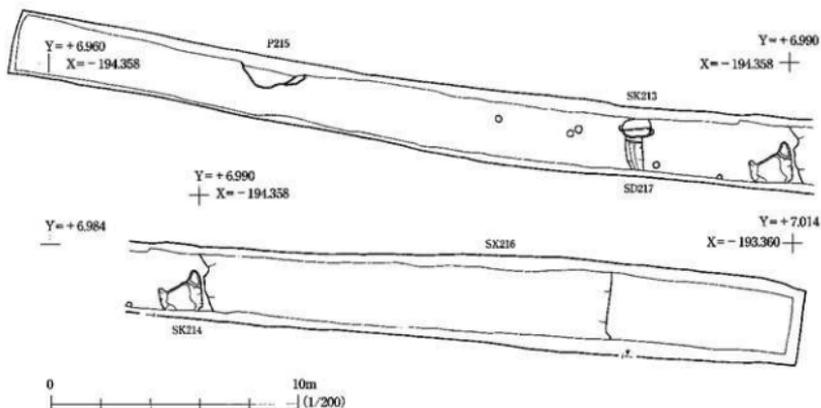


第43図 11トレンチ全体図



第44図 11トレンチ北壁断面

	層位	色調	性質	備考
基本層	I a	灰黄褐色 I0YR4/2	シルト	旧表土
	I b	明黄褐色 I0YR7/6	シルト	
SX209	①	灰黄褐色 I0YR4/2	シルト	黒褐色土ブロックが混じる
SX210	①	灰黄褐色 I0YR4/2	シルト	黒褐色土の塊状が多く混じる
SK212	②	灰黄褐色 I0YR4/2	シルト	黒褐色土・粘土が多く混じる



第45図 12トレンチ遺構全体図

状に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK214土坑 トレンチの中央部分の南壁に位置する。平面形は方形を基調とする不整形である。断面形は船底形で立ち上がりやや緩やかである。大きさは南北確認長1.7m、東西最大長1.76m、深さ40cmを測る。堆積土は3層確認された。いずれにもⅢ層上がブロック状に含まれる。遺物は出土しなかった。

2) 溝跡

SD217溝跡 トレンチの中央部に位置する。南北に延びるもので確認長1.6mを測る。SK213に切られている。上端幅50～70cm、下端幅15～20cm、深さ15cm程を測る。断面形は逆台形で立ち上がりが緩やかである。堆積土は1層確認した。Ⅲ層土や黒褐色土がブロック状に混じっている。遺物は出土しなかった。

3) 柱穴・ビット

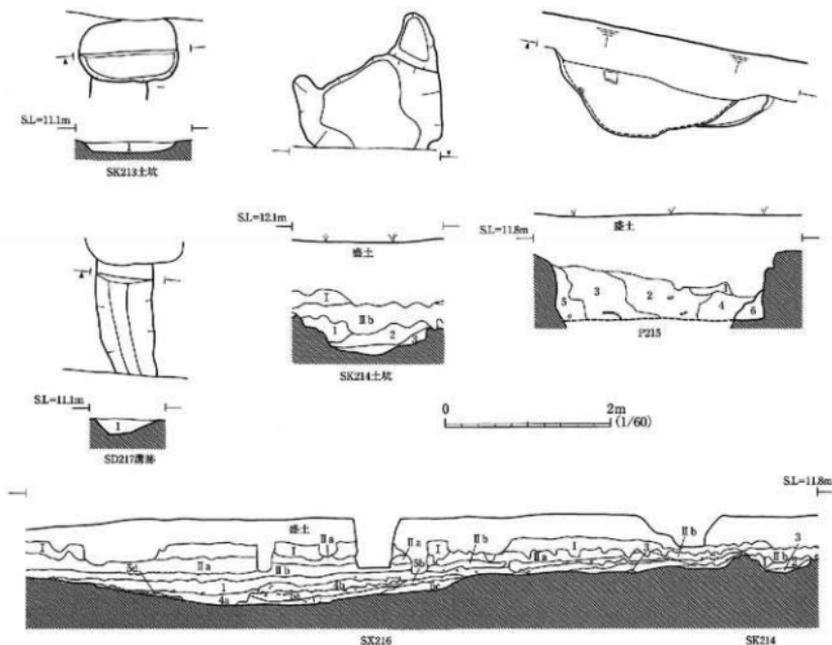
P215 トレンチの中央部東側の北壁に位置する。全体は不明であるが平面形は方形を呈すると思われる。南辺長2m、西辺長1.4mを測る。部分的な掘り下げで留めており下部は不明であるが、東側壁は直立気味に立ち上がり平坦な底面がみられ、その西側は一段深い落ち込みが上部からみられることから、P215は抜き取り穴を持つ柱穴と判断される。柱穴の深さは65cmを測る。遺物は抜き取り穴から瓦片が出土している。

4) 性格不明遺構

SX216性格不明遺構 トレンチの東側に位置する。溝状に南北方向に延びるもので幅は16m以上を測る。掘り込みラインが判然とせずⅡ層下での確認としたが、Ⅱ層部分も含めて堆積土となる可能性がある。断面形はゆるやかな皿状を呈し、底面は凹凸となっている。深さは最大で60cmを測る。堆積土は5層に大別でき、ゆるやかなレンズ状堆積を示している。遺物は各層から各種出土しており、特に軒瓦をはじめとする大量の瓦類が出土している。掲載遺物は平瓦(図47-1～49-1)、軒平瓦(図50-11・12)、軒丸瓦(図51-1・2)、土師器(図51-3)、赤焼土器(図51-4)、須恵器坏・鉢(図51-5～12・14)の21点である。須恵器坏底部には「大」及び「初？」と判読される墨書が確認されている。

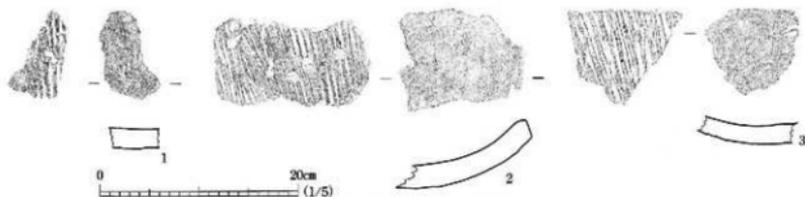
5) その他の出土遺物

I・Ⅱ層及び掘乱坑より若干量ではあるが遺物が出土している。掲載遺物は、平瓦(図49-2～50-9)、丸瓦(図50-10)、須恵器甕(図52-2)、陶器撞鉢(図52-1)の14点である。

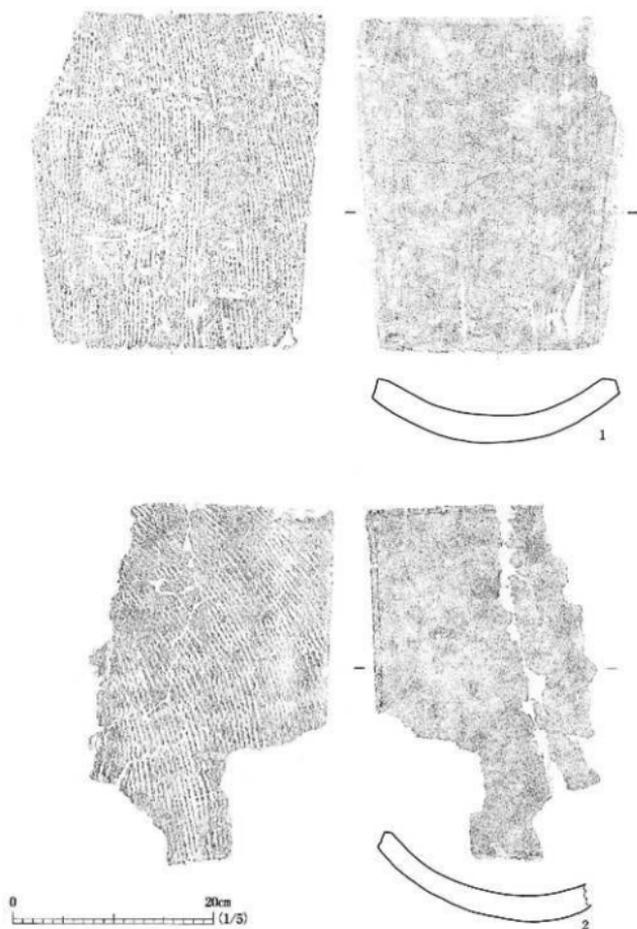


層位	色調	性質	備考	層位	色調	性質	備考	
								備考
P215	1-5 覆り方礫土	平面形は1.8×1.6m以上の楕円の方形?、裏の層		SD217	1	黒褐色 10YR3/1	シルト	明褐色土をブロックで覆じる
	6 覆り方礫土	表面平坦、裏の層			1	暗褐色 10YR3/3	シルト	灰白色火山灰・炭化物・瓦片が混じる
基本層	I	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	旧表土	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	黒褐色土ブロックが混じる
	IIa	暗褐色 10YR3/3	シルト	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	黒褐色土・明褐色土・炭化物が混じる	
	IIb	黒褐色 10YR2/2	シルト	4a	暗褐色 10YR3/3	シルト	黒褐色土・棕色土・瓦片が混じる	
SK213	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	明褐色土を含む	4b	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	明褐色土を多く含む	5a	黒灰色 10YR4/1	シルト	明褐色土の副産少量混じる
SK214	2	黒褐色 10YR2/1	シルト	明褐色土を多く含む	5b	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物が混じる
	3	明黄褐色 10YR7/6	シルト	黒色土が小ブロックで混じる	5c	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	黒褐色土のブロック少量混じる
					5d	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	酸化鉄粒が混じる

第46図 12トレンチ検出遺構断面

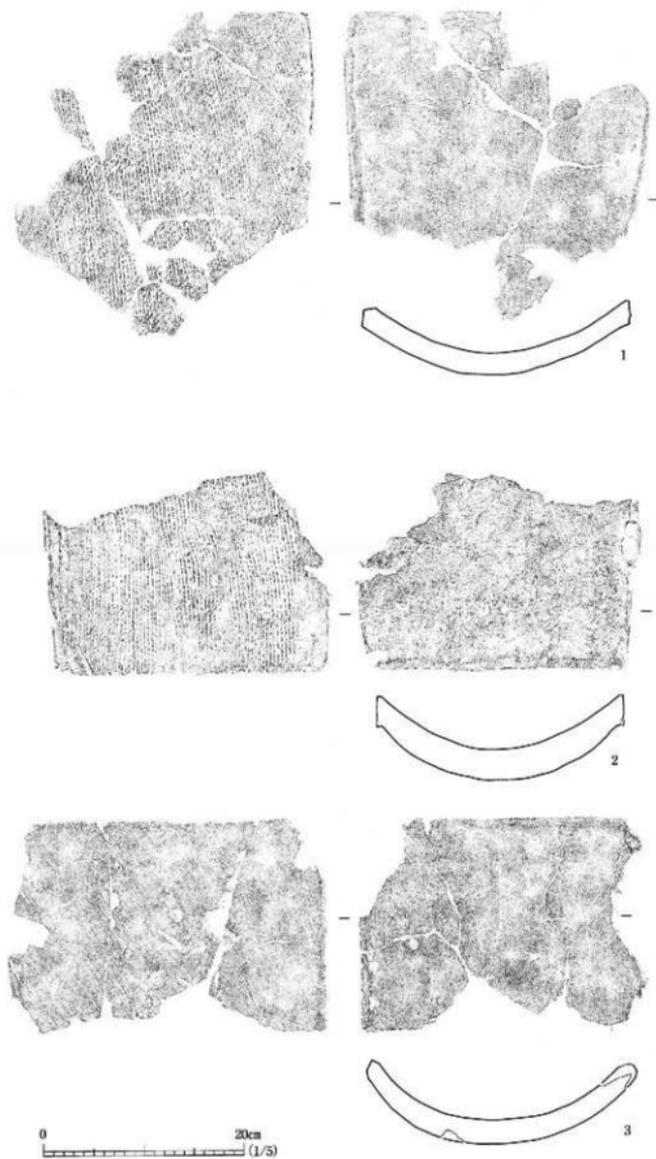


第47図 12トレンチ出土遺物 1

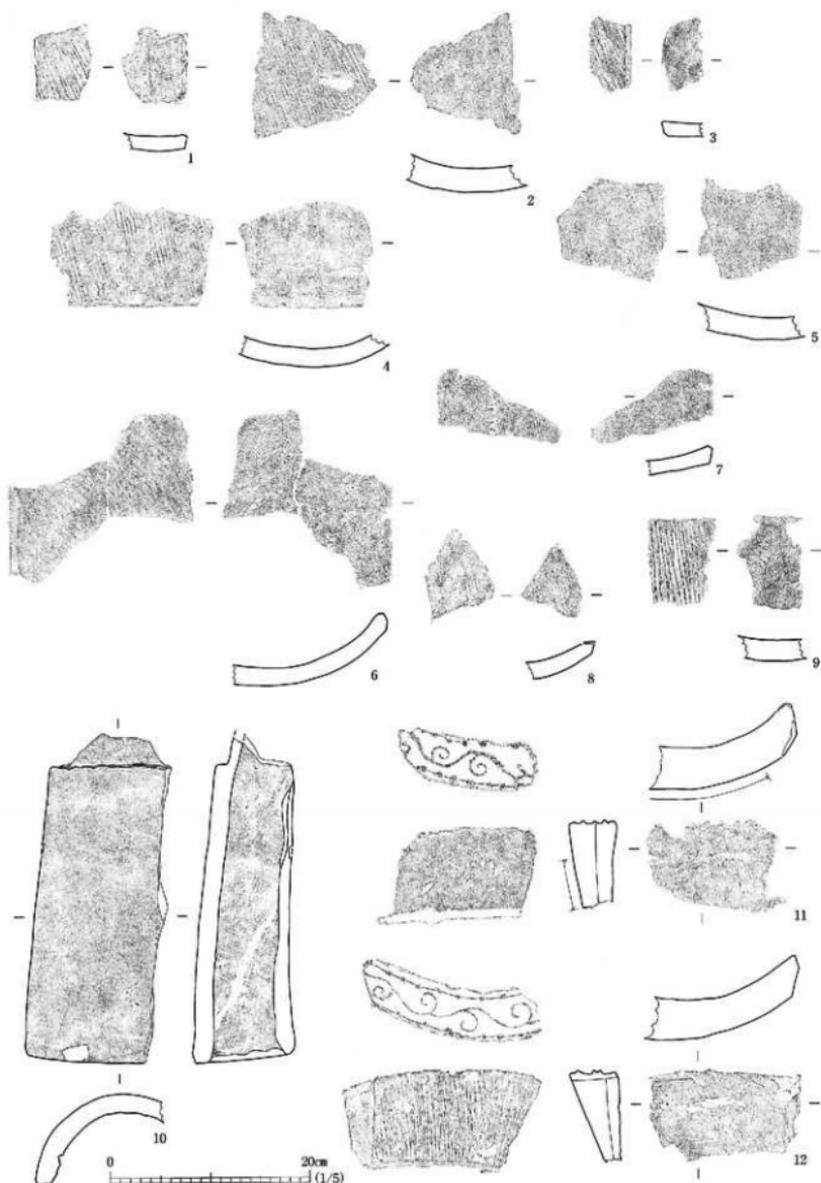


発号	輪郭	遺構・層位	呼 称	分 類	登録番号	写真図様
47-1	平瓦	SX216 1層	内面：平行引き（太目・縦切）、外面：赤目瓦、平行引き、ナガ、厚3.21cm、色調は灰白色	1a	G-052	
47-2	平瓦	SX216 2層	内面：平行引き（太目・縦切）、外面：赤目瓦、ナガ、厚3.23cm、扁平気味、色調は灰白色、やや軟質	1b	G-053	
47-3	平瓦	SX216 5層	内面：平行引き（太目・縦切）、外面：ナガ、小口面にヘラケズリ、厚3.2cm、色調は灰色	1c	G-056	
48-4	平瓦	SX216 5層	内面：細引き（横目・縦切）、縦目つぶれ気味、外面：赤切り瓦、赤目瓦、ナガ、周縁にヘラケズリ、長さ3.65cm、色調暗灰色、広幅幅 2.80 cm、厚3.26cm、台形で円弧状、色調は灰色	2	G-035	
48-5	平瓦	SX216 5層	内面：細引き（太目・斜行）、縦目つぶれ気味、赤切り瓦、外面：赤切り瓦、赤目瓦、ナガ、周縁にヘラケズリ、長さ3.64cm、厚3.25cm、台形で円弧状、色調は灰色	2	G-054	
49-1	平瓦	SX216 4層	内面：細引き（横目・縦切）、縦目つぶれ気味、赤切り瓦、周縁に凹溝状、外面：赤切り瓦、赤目瓦、ナガ、周縁にヘラケズリ、長さ3.64cm、厚3.25cm、台形で円弧状、色調は褐色	2	G-051	
49-2	平瓦	基本層 1地	内面：細引き（横目・縦切）、縦目つぶれ気味、赤切り瓦、周縁に凹溝状、外面：自然釉がのぶる、周縁にヘラケズリ、色調暗灰色、長さ3.1cm、台形で円弧状、色調は灰色	2	G-049	
49-3	平瓦	基本層 1層	内面：平行引き（太目・斜行）、目つぶれ気味、ナガ及び浅いヘラケズリ、外面にヘラケズリ、角張る、外面：赤切り瓦、赤目瓦、ナガ、周縁にヘラケズリ、厚3.21cm、台形で円弧状、色調は赤褐色	1b	G-048	

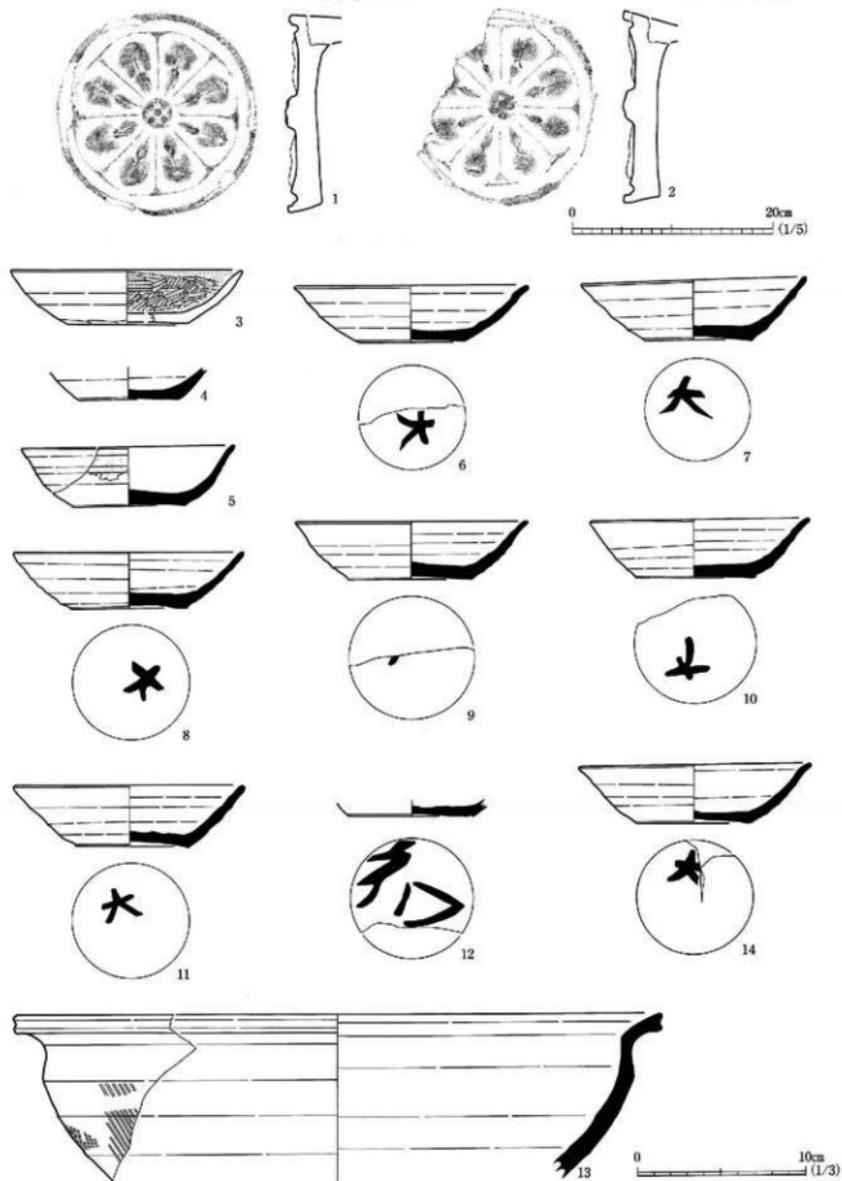
第48図 12トレンチ出土遺物 2



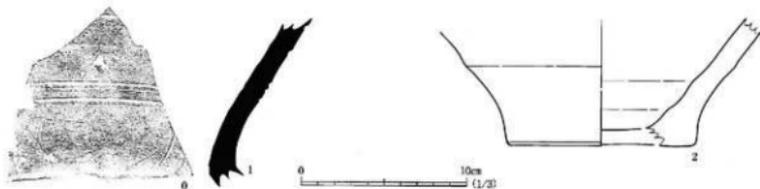
第49図 12トレンチ出土遺物 3



第50図 12トレンチ出土遺物4



第51図 12トレンチ出土遺物5

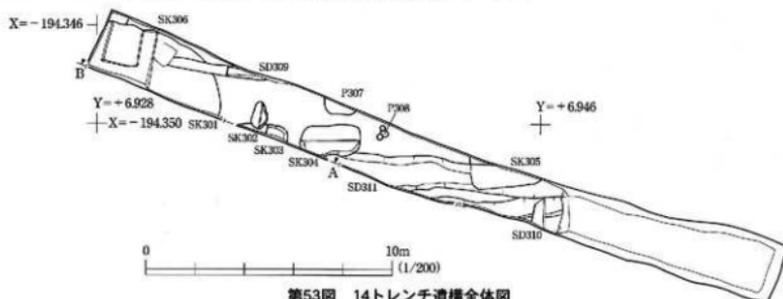


番号	種別	遺構・部位	特徴	分類	登録番号	写真図録
50-1	平瓦	基本部 Ⅱ層	凸面：平行明き(楕円・斜行)、布目肌、浅いヘラケズリ、小口面にヘラケズリ、やや内張る 凹面：糸割り肌、布目肌、ナデ、面縁にヘラケズリ、厚3.15cm、色調は灰白色	1a	G-058	
50-2	平瓦	基本部 Ⅱ層	凸面：平行明き(楕円・斜行)、布目肌、凹面：ナデ、厚3.25cm、色調は灰白色	1a	G-059	
50-3	平瓦	基本部 Ⅱ層	凸面：平行明き(楕円・斜行)、布目肌、面縁にヘラケズリ、凹面：布目肌、ナデ、厚3.14cm、色調は灰白色	1a	G-062	
50-4	平瓦	基本部 Ⅱ層	凸面：平行明き(楕円・斜行)、小口面にヘラケズリ、凹面：布目肌、布部に横位のナデ、縁は縦位のナデ、厚3.2cm、やや軟質、火焼くけている、色調は灰白色	1b	G-060	
50-5	平瓦	基本部 Ⅱ層	凸面：平行明き(楕円・縦位)、ナデ?により明き正直つれぬ、面内張る、凹面：糸割り肌、布目肌、ナデ、厚3.23cm、色調は暗灰色	1b	G-061	
50-6	平瓦	SD217 埋土	凸面：暗明き(太目・斜行)、つぶれた暗明き肌、ナデ、面縁にヘラケズリ、凹面：摩滅のため残像不鮮、厚3.19cm、硬平肌、色調は灰白色	1a	G-066	
50-7	平瓦	SD217 埋土	凸面：平行明き(楕円・縦位)、面内張る、凹面：糸割り肌、布目肌、ナデ、厚3.13cm、色調は暗灰色	1b	G-064	
50-8	平瓦	SD217 埋土	凸面：平行明き(楕円・縦位)、面内張る、側面にヘラケズリ、凹面：糸割り肌、ナデ、厚3.16cm、色調は暗灰色	1b	G-065	
50-9	平瓦	機孔土	凸面：平行明き(太目・縦位)、凹面：ナデ、厚3.23cm、色調は暗灰色	1b	G-063	
50-10	丸瓦	基本部 Ⅰ層	凸面：暗明き、ロクロナデ、側面：広縁部にヘラケズリ、凹面：粘土硬質(縦3cm幅)、布目肌、面縁にヘラケズリ、厚3.2cm、丸瓦底0.65cm、中堅肌、色調は灰白色	1b	F-038	13-2
50-11	軒平瓦	SX216 Ⅰ層	縁付直草文、隅分寺1顆、頸部：ハケメ(8種類・縦位)、糸割り、凹面：布目肌、ナデ、頸部は横位のヘラケズリ、瓦高面高4.8cm、色調は灰白色	G-044		他照 軒平瓦 5
50-12	軒平瓦	SX216 4層	縁付直草文、隅分寺2顆、頸部：平行明き(楕円・縦位)、凹面：布目肌、ナデ、頸部は横位のヘラケズリ、瓦高面高4.7cm、色調は灰白色	G-045		他照 軒平瓦 5
51-1	軒丸瓦	SX216 5層	八重歯直草文、隅分寺3顆、瓦高面長1.95cm、瓦高面厚2.4cm、丸瓦形欠片、色調は暗灰色	F-032		他照 軒丸瓦 5
51-2	軒丸瓦	SX216 2層	八重歯直草文、隅分寺3顆、瓦高面長(39)cm、瓦高面厚2.6cm、丸瓦形欠片、色調は暗灰色	F-031		他照 軒丸瓦 5
51-3	土製器 杯	SX216 埋土	口の内側、底部下から底部に手持ちヘラケズリ、切り離し不明、気味の内側に立ち上がり立ち上がる内面はヘラケズリ・黄色肌質、口縁部は灰化層付着、口縁径13.8cm、底径7.2cm、高さ33cm、	5	D-020	18-7
51-4	須恵器 杯	SX216 1層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がる、底径7.4cm	3?	E-043	
51-5	須恵器 杯	SX216 1層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は内寄気味に立ち上がり口縁部はゆるく外反 口縁部内側に灰化層付着、口縁径12.7cm、底径6.7cm、高さ33cm	3	E-044	
51-6	須恵器 杯	SX216 2層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり口縁部はゆるく外反 底部に「大」の墨書文字、口縁径14cm、底径6.4cm、高さ33cm	4	E-020	16-3
51-7	須恵器 杯	SX216 2層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり丸くおさまる 底部に「大」の墨書文字、口縁部内側に灰化層付着、口縁径13.8cm、底径6.4cm、高さ33cm	4	E-021	16-2
51-8	須恵器 杯	SX216 2層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり丸くおさまる 底部に「大」の墨書文字、口縁部内側に灰化層付着、口縁径13.8cm、底径6.0cm、高さ34cm	4	E-022	16-1
51-9	須恵器 杯	SX216 2層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり口縁部はゆるく外反 底部に墨書あり、口縁径14cm、底径7.4cm、高さ33cm	4	E-023	16-4
51-10	須恵器 杯	SX216 2層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり口縁部はゆるく外反 底部に「大」の墨書文字、口縁部内側に灰化層付着、口縁径13.1cm、底径7.2cm、高さ33cm	4	E-024	16-5
51-11	須恵器 杯	SX216 2層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり丸くおさまる 底部に「大」の墨書文字、口縁部内側に灰化層付着、口縁径14cm、底径6.8cm、高さ34cm	4	E-025	16-6
51-12	須恵器 杯	SX216 埋土	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部に墨書文字あり、底径7.4cm	1	E-041	16-7
51-13	須恵器 杯	SX216 4層	体部は内寄気味に立ち上がり口縁部下での字跡にゆるく立ち上がる、口縁部は凹面の縁部帯となり底縁は上方に凸形気味に立ち上がる、外縁面に平行明き目、縁はロクロナデ、口縁径30cm、残存高33cm	E-027		
51-14	須恵器 杯	基本部 Ⅱ層	切り離しは縁部糸割りで無調整、体部は外縁気味に立ち上がり口縁部はゆるく外反 底部に「大」の墨書文字、口縁部内側に灰化層付着、口縁径14cm、底径6.5cm、高さ33cm	4	E-028	16-8
52-1	須恵器 甕	基本部 Ⅱ層	口縁部破片、上部に1条下部に2条の泥層確認、泥層間に灰化層が確認	E-029		
52-2	中厚黒色 塗灰	基本部 Ⅰ層	黒色破片、内面滑られている、底径(11)cm、色調は赤褐色、在地産	I-001		

第52図 12トレンチ出土遺物 6

第11節 14トレンチの調査(平成15年度)

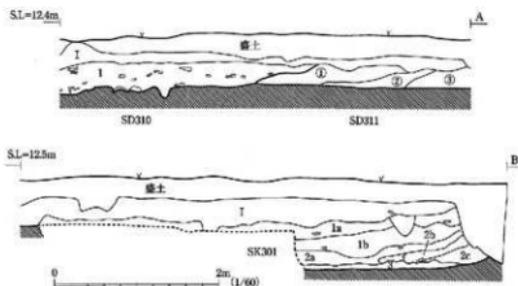
県道の南側、史跡範囲地の北西端部に位置する調査区である。遺構確認及び性格究明を主体とし、部分的な掘り下げに留めた遺構もある。調査区は南北幅約2.5m、東西長約30mのやや弧状の細長いトレンチとなっている。なお、トレンチ東側では擾乱がみられ遺構面自体が遺存していない。



第53図 14トレンチ遺構全体図

1. 基本層位

調査区全体が史跡地内で、全域に盛土及び建物基礎埋め戻しの擾乱土が見られた。調査区周辺は標高12.3m前後の平坦面で西側から東側へゆるく傾斜をみる。盛土・擾乱土は深さ20~60cmを測り凹凸面となっており、上述したように東側では深さ最大1.4mを測る。基本層位は大きく3層確認している。I層は暗褐色のシルト層で炭化物粒・土器片・瓦片を含む。層厚最大30cm程で旧地表土と判断される。II層は暗褐色のシルト層で黄褐色土を斑に含んでいる。北壁面で特に広がりが観察され、層厚は10~20cmである。壁面での観察であるがSD309の掘り込み確認面となっている。なお、調査当初南壁側の黒褐色土層もII層としていたが、SD310・311の堆積土で



第54図 14トレンチ南壁断面

層位	色調	性質	備考
南壁 I	暗褐色 10YR3/4	シルト	相隣作土。炭化物・土器片・瓦片を含む
SD310 I	暗褐色 10YR2/3	砂質シルト	瓦片を多量に含む
SD311	① 暗褐色 10YR2/2	シルト	炭化物粒を南に多く含む
	② 暗褐色 10YR2/3	シルト	黄褐色土を斑に含む
	③ 褐色 10YR4/4	粘土質シルト	炭化物粒・黄褐色土粒を斑に含む。土器片・瓦片を多く含む
SK301	1a 暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックで含む
	1b 暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックで層状に含む。炭化物粒まばらに含む
	2a 2a+黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックで層状に含む。炭化物粒まばらに含む
	2b 暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックで含む
	2c 暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックで含む。黄褐色土粒まばらに含む
	3 2a+黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物粒を斑に含む

あることが確認された。多量の遺物が出土しているが分別が不能となりII層出土のままにした。III層は黄褐色の粘土質シルトである。下層に向かい砂質となり砂礫となっている。今回調査の地山面である。

2. 発見遺構と出土遺物

遺構として土坑6基、溝跡3条、柱穴1基、ピット3基を確認している。出土遺物には瓦類、土師器、赤焼土器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(釘)、土製品(フイゴの羽口)、鉄滓がある。

1) 土坑

SK301土坑 調査区西端部に位置する。SD309・SK306と重複しており、前者に切られ後者を切っている。平面形は部分的な確認であるため不明であるが、上端ラインが弧状を呈することから円形ないし楕円形と思われる。南壁面で確認される東西長は5.7mまで測れ、大型の遺構と判断される。壁面は北側で一部検出しており底面からはほぼ垂直に立ち上がっており、断面形は箱状と判断される。深さは最大で40cm程を測り、底面はほぼ平坦である。堆積土は大別で3層確認した。褐色系の粘土質シルトで1・2層には灰白色火山灰が小ブロック及びブスジ状に含まれている。自然堆積と判断される。遺物には平瓦、丸瓦、土師器、赤焼土器、須恵器、緑釉陶器、フイゴの羽口、鉄製品、鉄滓がある。すべて破片資料でまばらな出土状況であるが、特に瓦類が多数を占めており底面出土の平瓦もある。掲載遺物は平瓦(図58-1)、須恵器杯・甕(図61-10・11)、緑釉陶器碗(図62-1)の4点である。

SK302土坑 調査区中央部西側に位置する。SK303と重複し切っている。平面形はやや不整な楕円形を呈する。大きさは長軸1.1m、短軸65cm、深さ最大で15cmを測る。断面形はゆるい皿状で底面は浅い凹凸面である。堆積土は1層で暗褐色と黄褐色の斑の層である。遺物には平瓦、土師器がある。すべて小片で少量の出土である。掲載遺物は土師器甕(図61-1)1点である。

SK303土坑 南壁面に位置しており全体が不明であるが、上端ラインから推定して平面形は楕円形を呈すると思われる。SK302に切られている。南壁面で確認される東西長は2.3mを測る。壁面はゆるい立ち上がりをもち断面形は皿状である。深さは最大で27cmを測る。堆積土は2層確認した。褐色系の砂質及び粘土質のシルトである。遺物には平瓦、土師器、赤焼土器、須恵器があり、すべて小破片資料である。

SK304土坑 調査区中央部に位置する。SD311と重複し切っている。平面形は長円形を呈する。大きさは長軸2.48m、短軸1.32m、深さ35cm程を測る。壁面はゆるい立ち上がりの面もあるが、ほぼ垂直につき立ち上がる。断面形は箱状で底面は平坦である。堆積土は1層で黒褐色の粘土質シルトである。遺物には平瓦、丸瓦、軒平瓦、土師器、須恵器がある。底面出土の土師器杯と丸瓦はほぼ完形品であるが、その他は小破片である。掲載遺物は丸瓦(図59-4)、単弧文軒平瓦(図60-6)、土師器杯(図61-3)の3点である。

SK305土坑 調査区中央部東側に位置する。SD311と重複し切られている。北壁面に位置しており全体が不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。大きさは最大東西長2.85m、最大南北長1.35m、深さ最大で42cmを測る。底面西側は平坦面となるが東側はゆるい皿状となり、中央部でゆるい段となっている。底面全体に炭化物が確認されている。壁面は西側部ではきつくり立ち上がるが東側部につれゆるやかとなっている。断面形はやや深い皿状である。堆積土は5層確認した。しまりのつよい暗褐色系の粘土質シルトである。遺物はきわめて少量で、土師器片、須恵器破片が出土したのみである。

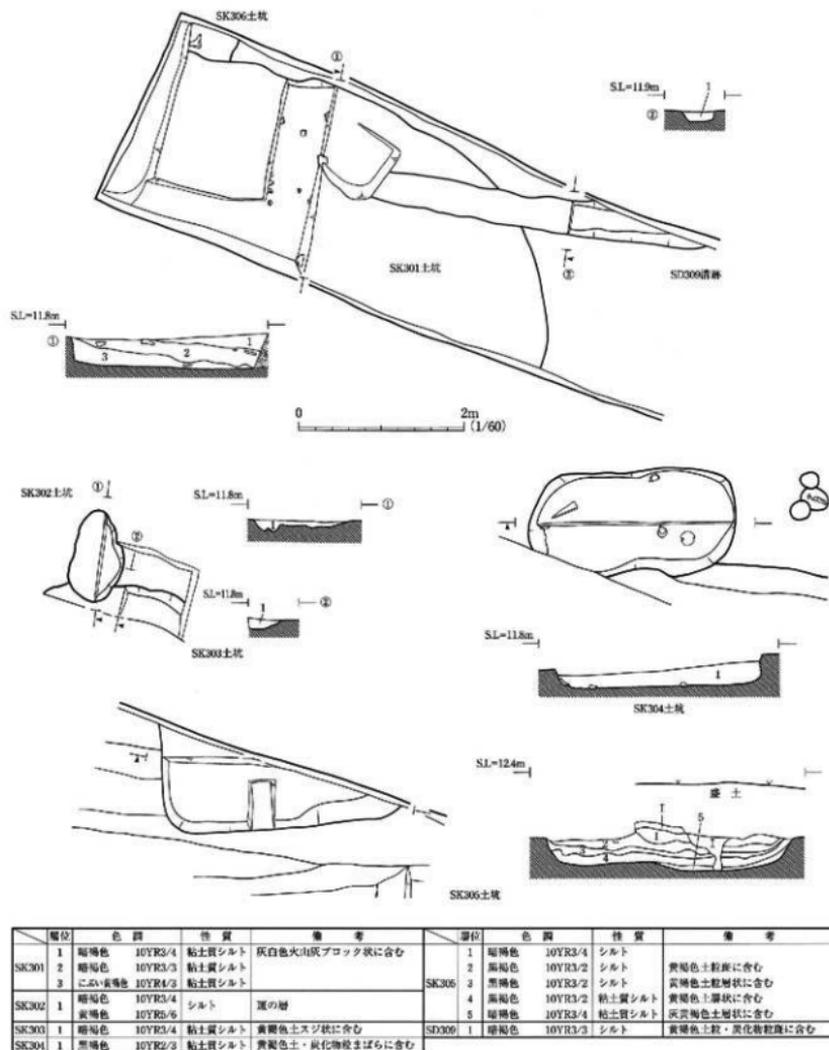
SK306土坑 調査区西端部に位置する。SK301に切られている。確認のみに留めており掘り下げは行っていない。西側の攪乱部掘り下げできつくり立ち上がる深めの土坑であることが確認されている。堆積土は黄褐色土と暗褐色土の斑の層である。確認面で平瓦片が1点出土している。

2) 溝跡

SD309溝跡 調査区西側を東西方向に直線状に延びるものである。調査区内で途切れているが攪乱等で削平をうけており本来西側へ延びていたものと判断される。SK301と重複し切っている。溝跡の西側部は掘り下げを行っていない。溝の方向は上端北ラインでE-8°-Sである。大きさは確認長4.1m、上端幅35~41cm、下端幅30cm、深さ12cmを測る。断面形はやや歪んだ逆台形である。堆積土は北壁面で2層確認した。暗褐色のシルトである。遺物は極めて少量で軒平瓦、土師器がある。掲載遺物は単弧文軒平瓦(図60-1)1点である。

SD310溝跡 調査区中央部西側に位置する。東西方向に直線的に延びているが、東側には攪乱がみられ遺構自体が残存せず西側は南壁面となり、部分的な確認となっている。北側でSD311と重複し切っている。大きさは

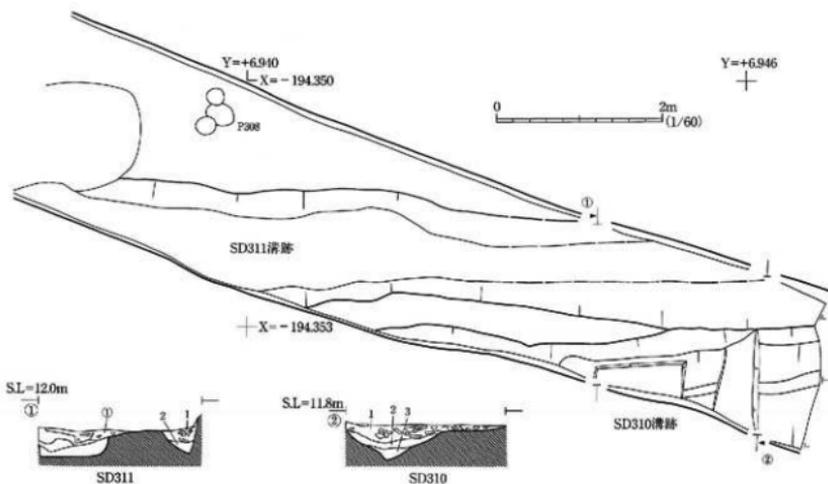
確認長5.3m、上端幅は不明であるが最大確認幅は1.5m、下端幅10～17cm、深さ40cm程を測る。断面形はやや開いたV字状である。溝の方向は下端南ラインでN-85°-Eである。堆積土は3層確認した。黒褐色系の粘土・粘土質シルトである。1層の下部は瓦の層となっている。廃棄と判断されるが敷き詰めたかのような検



第55図 14トレンチ土坑・溝跡断面

出状況であった。2・3層は砂をレンズ状に挟む自然堆積層で、部分的な確認ではあるが遺物は出土していない。遺物には軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、土師器、赤焼土器、須恵器、鉄製品、鉄滓がある。掲載遺物は平瓦(図58-2~5)、丸瓦(図59-5)、単弧文・均整唐草文・偏行唐草文軒平瓦(図60-2~5)、八葉重弁蓮華文軒丸瓦(図60-10)、須恵器杯・鉢(図61-12~15、62-1)の15点である。

SD311溝跡 調査区中央部西側、SD310の北側に位置する。SK304・SD311に切られSK305を切っている。東西方向に直線状に延びるがやや不定である。大きさは確認長9.8m、上端幅1.07~1.44m、下端幅45~90cm、深さ6~15cmを測る。断面形は浅い皿状である。溝の方向はE-4~8°-Sである。堆積土は1層確認した。暗褐色のシルトである。遺物には平瓦、軒丸瓦、丸瓦、土師器、赤焼土器、フイゴの羽口、鉄製品、鉄滓がある。ほとんどのものが小破片である。掲載遺物は平瓦(図58-6)、丸瓦(図59-6)、土師器甕(61-2)、赤焼土器杯(図61-6)、須恵器杯(図62-2)の5点である。なお、図59-6の丸瓦凸面には「尺?」の刻印がみられる。

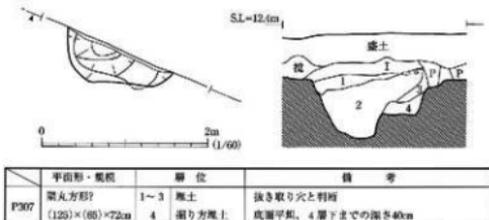


層位	色	質	性質	備考	層位	色	質	性質	備考
SD310 1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	基本的に瓦の層となる	SD310 3	暗褐色	10YR3/2	粘土	砂を層的に含む
SD310 2	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	砂をうすく含む	SD311 ①	暗褐色	10YR3/2	シルト	瓦片を多量に含む

第56図 SD310・311溝跡断面面

3) 柱穴・ピット

P307 調査区中央部に位置する。北壁面に位置するため全体は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。残存最大確認長は東西ラインで1.2m、南北ラインで65cmを測る。堆積土は4層確認した。暗褐色系の粘土質シルトである。壁面での断面をみると、東側では直立気味の立ち上



平面形・規模	層位	備考
隅丸方形? (125)×(65)→72cm	1~3	抜き取り穴と判別
	4	底層平配。4層下までの断面40cm

東西軸・南北軸×高さ : 隅形柱

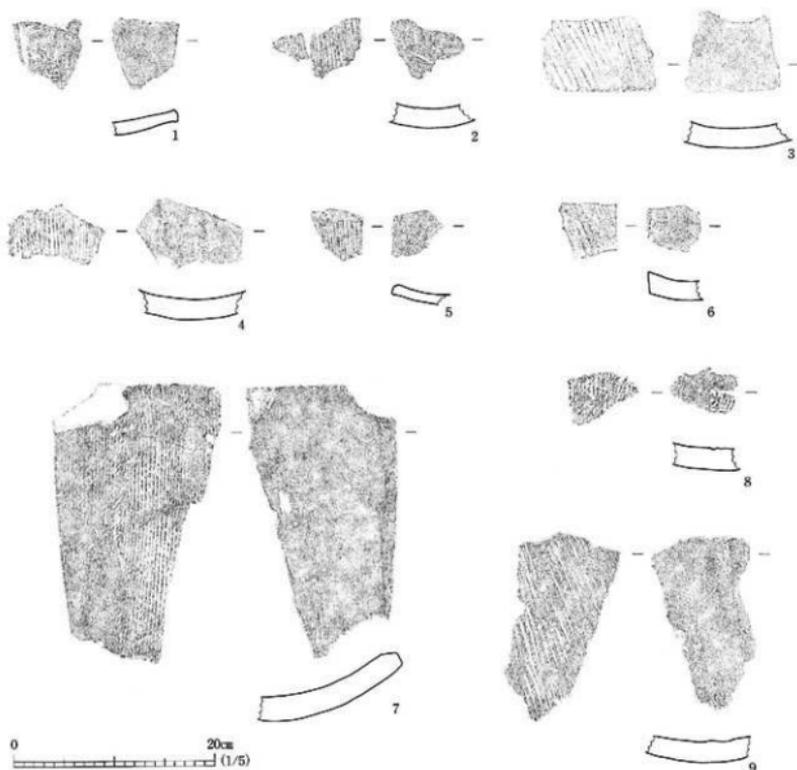
第57図 P307断面面

がり平坦な底面がみられ、西側には一段深いゆるいU字状の落ち込みが上部からみられる。これらのことからP307は抜き取り穴をもつ柱穴と判断される。遺物は土師器片が少量出土したのみである。なお、前述したSB2掘立柱建物跡西南隅の柱穴と判断される。

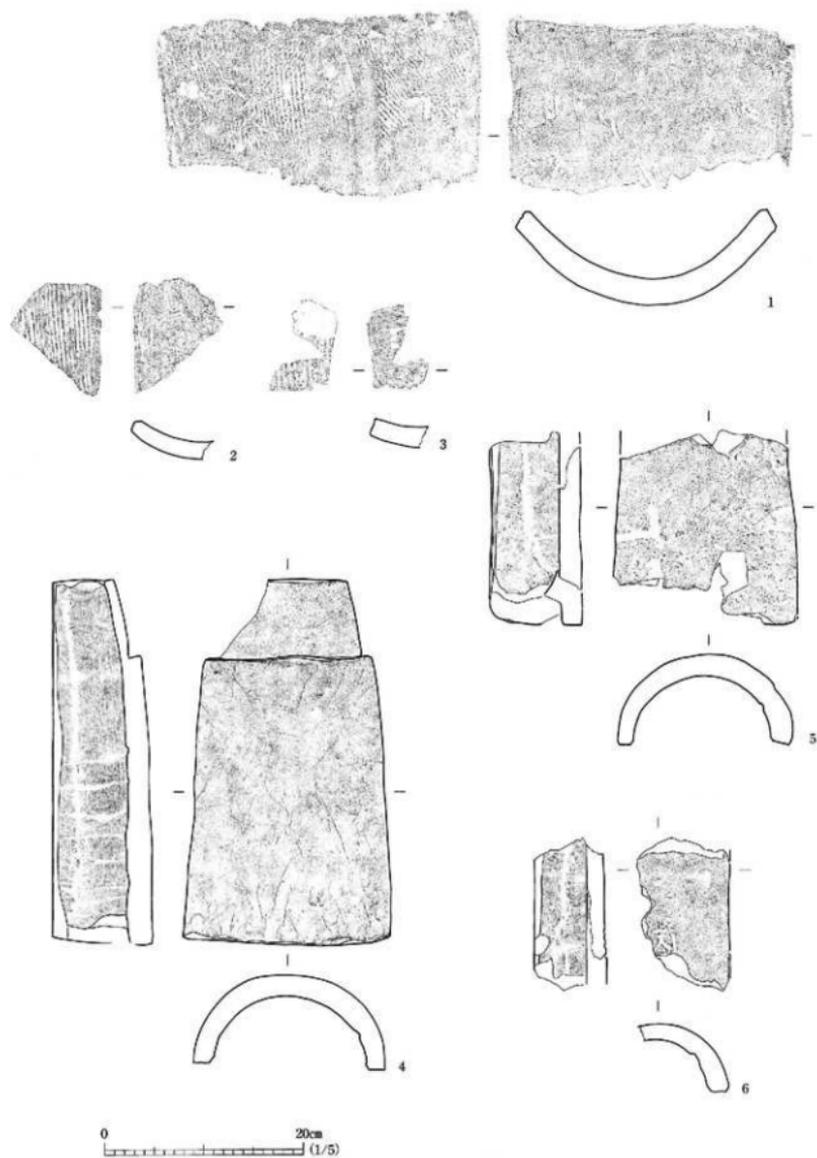
P308 調査区中央部に位置する。直径30cm程の小ピットである。堆積土は灰黄褐色の砂質シルトで、深さ20cmを測る。八葉重弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部(図60-11)が1点直立した状態で出土している。

4) その他の遺物

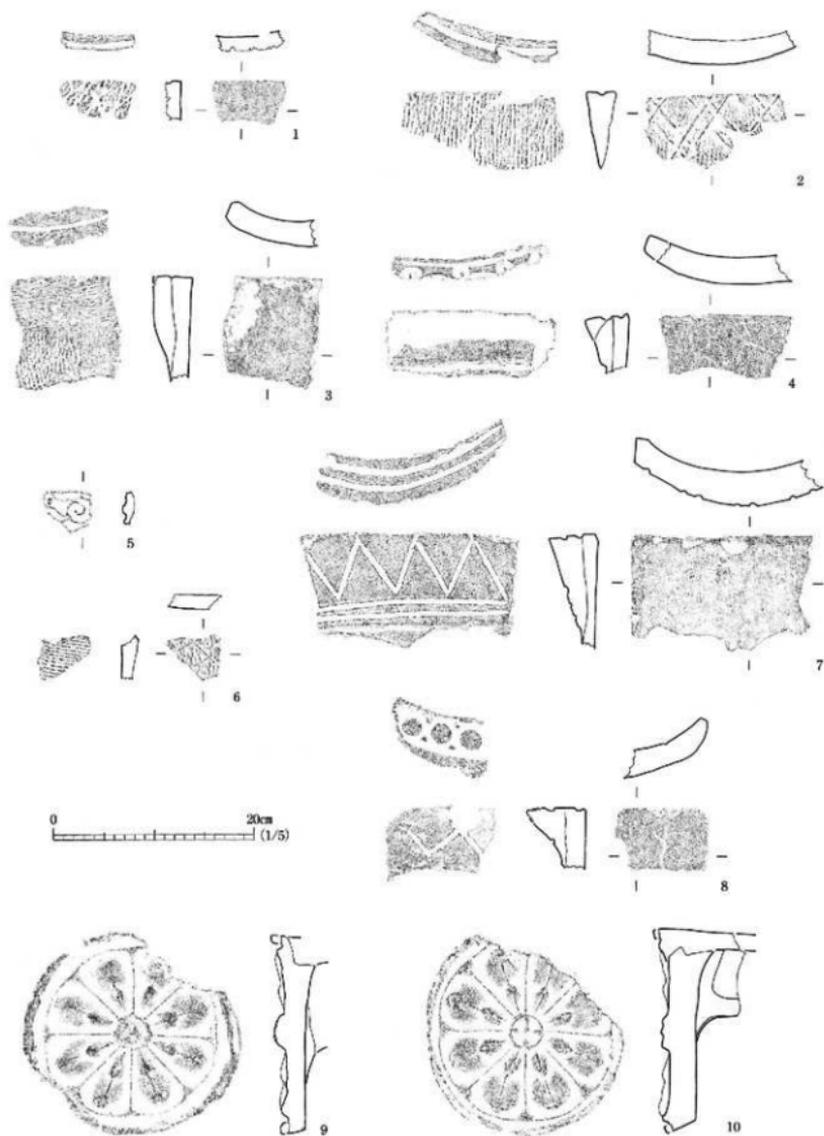
基本層Ⅱ層の遺物がある。出土状況から大半のものがSD310に帰属すると判断される。各種のものが出土しているが瓦類が主体を占める。掲載遺物は平瓦(図58-7~10、59-1~3)、丸瓦(図59-7)、単弧文・二重弧文・連珠文軒平瓦(図60-7~9)、土師器杯(図61-4・5)、赤焼土器杯・高台付杯・台付鉢(図61-7~9)、須恵器杯(図62-3)の17点である。なお、図59-3の平瓦凹面には「會」の刻印がみられる。



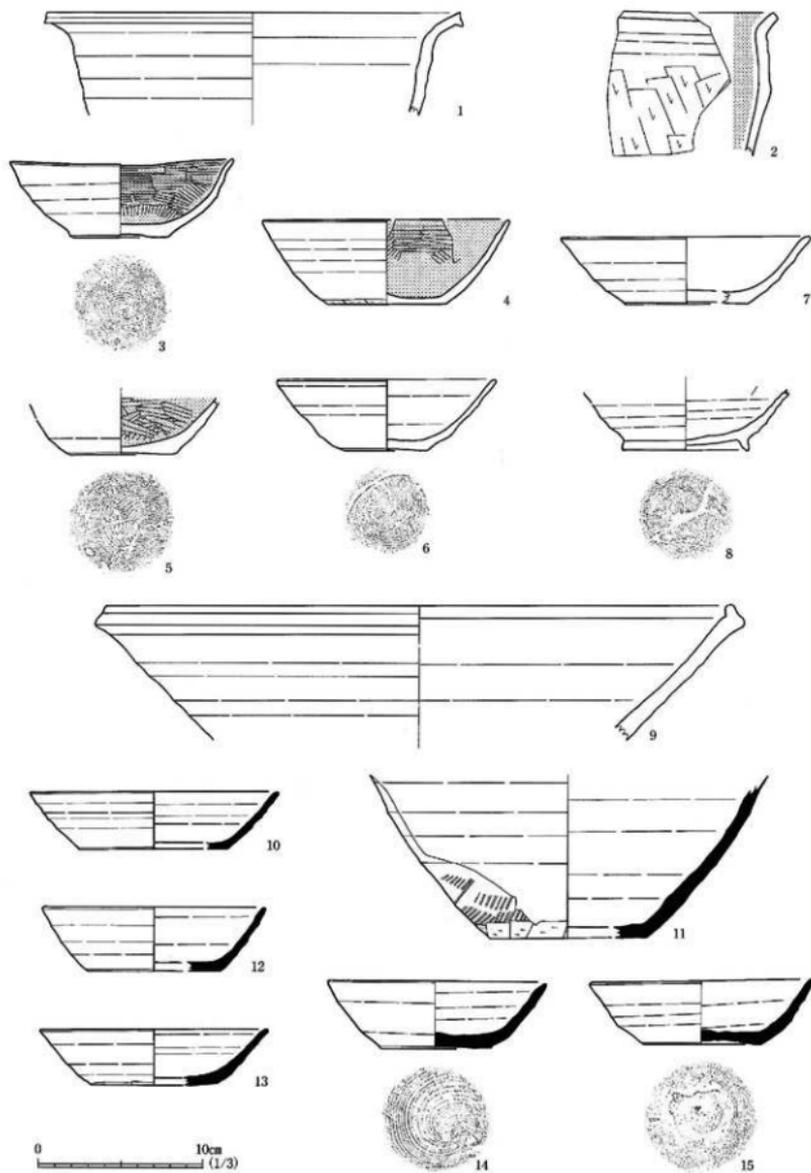
第58図 14トレンチ出土遺物1



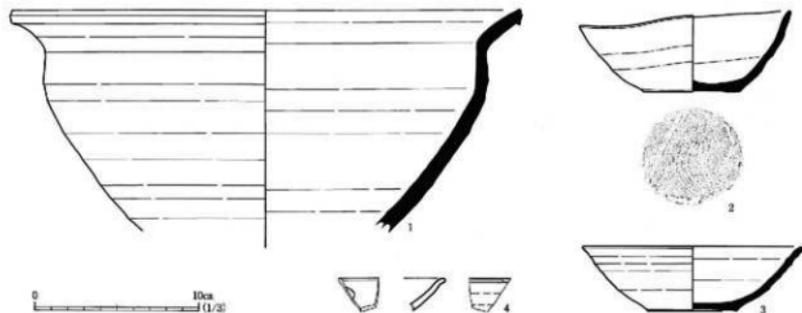
第59図 14トレンチ出土遺物2



第60図 14トレンチ出土遺物3



第61図 14トレンチ出土遺物4



第62図 14トレンチ出土遺物5

番号	種別	遺跡・部位	特徴	分類	登録番号	写真図版
58-1	遺瓦 製瓦瓦	SK301	1層 凸面：叩きは不明、布目痕・木目痕がわずかに確認される。ナダ、端部に凹型凸状痕 凹面：うすく任意が確認される。ナダ、小口面にヘラケズリ、厚さ1.6cm、色調は灰白色		G-080	
58-2	平瓦	SD310	2層 凸面：平打叩き（楕圓・稜状）、凹面：赤切り痕、布目痕、ナダ、厚さ1.9cm、色調は灰白色	1b	G-082	
58-3	平瓦	SD310	5層 凸面：平打叩き（太目・稜状）、両内縁部 凹面：赤切り痕、布目痕、ナダ、小口面にヘラケズリ、厚さ2.2cm、色調は灰白色	1b	G-100	
58-4	平瓦	SD310	5層 凸面：平打叩き（楕圓・稜状）、両内縁部、凹面：ナダ、厚さ2.2cm、色調は灰白色	1b	G-104	
58-5	平瓦	SD310	5層 凸面：平打叩き（楕圓・稜状）、両内縁部、凹面：ナダ、厚さ1.8cm、色調は黄灰色	1b	G-083	
58-6	平瓦	SD311	4層 凸面：平打叩き（太目・稜状）、凹面：自然釉で不明、両面にヘラケズリ、厚さ1.9cm、色調は灰白色	1b	G-103	
58-7	平瓦	基本層	3層 凸面：焼叩き（楕圓・稜状）、両目つおれ気味、両縁部に凹型凸状痕、木目痕 凹面：布目痕、ナダ、両縁にヘラケズリ、厚さ2.5cm、合形、やや軟質、色調は灰白色	1b	G-082	
58-8	平瓦（割印）	基本層	3層 凸面：焼叩き（楕圓・稜状）、両目つおれ気味、両縁部に凹型凸状痕、木目痕 凹面：赤切り痕、布目痕、ナダ、厚さ2.1cm	1b	G-071	19-4
58-9	平瓦	基本層	3層 凸面：焼叩き（太目・斜行）、つおれた焼叩き痕（割印）、両内縁部 凹面：赤切り痕、布目痕、ナダ、厚さ2.2cm、色調は灰白色	1a	G-089	
59-1	平瓦	基本層	3層 凸面：焼叩き（楕圓・稜状と斜行）、両目つおれ気味、両縁部に凹型凸状痕、木目痕、ナダ 凹面：布目痕、ナダ、両縁にヘラケズリ、広縁部2.5cm、厚さ2.2cm、長方形？、色調は灰白色	1b	G-085	
59-2	平瓦	基本層	3層 凸面：平打叩き（楕圓・稜状）、両面にヘラケズリ 凹面：布目痕、ナダ、両面にヘラケズリ、厚さ1.6cm、色調は灰白色	1b	G-094	
59-3	平瓦（割印）	基本層	3層 凸面：平打叩き（太目・稜状） 凹面：赤切り痕、布目痕、ナダ、両縁にヘラケズリ、割印（割）厚さ1.6cm、色調は灰白色	1b	G-081	19-1
59-4	丸瓦	SK304	底面 凸面：焼叩き、口コロナダ、両面・小口面にあさいヘラケズリ、両部・両面に磨り面（再厚化） 凹面：粘土塗裏（幅3cm程度）、布目痕、両縁にヘラケズリ、長さ37（287+83）cm、広縁部幅33.5cm、高さ9.6cm、厚さ2.6cm、大瓦型、色調は赤褐色	1b	F-080	13-1
59-5	丸瓦	SD310	瓦土 凸面：焼叩き、両面・稜状のナダ、両面にヘラケズリ、凹面：粘土塗裏（幅4cm程度）、布目痕、両縁部の凹型凸状痕のナダ、両面にヘラケズリ、厚さ2.1cm、大瓦型、色調は赤褐色	1b	F-051	
59-6	丸瓦（割印）	SD311	瓦土 凸面：口コロナダ、両面にヘラケズリ、両縁に「反」？ 凹面：粘土塗裏、布目痕、両面にヘラケズリ、中製品、やや軟質、厚さ1.8cm、色調は暗褐色	1a	F-048	19-3
60-1	軒平瓦	SD300	瓦土 草瓦文、両縁部縁付、瓦当型：ナダ、凸面：焼叩き・斜形切のキザミ、凹面：布目痕、ナダ、色調は黒褐色	G-079	G-079	
60-2	軒平瓦	SD310	2層 草瓦文、両縁部縁付（楕圓・稜状）、瓦当上縁部、接合面に焼叩き・キザミの痕跡、色調は灰白色	G-070	G-070	
60-3	軒平瓦	SD310	瓦土 草瓦文、両縁部縁付（楕圓・稜状・稜状）、凸面：焼叩き（楕圓・稜状）、ナダ、両縁部の端不明 凹面：布目痕、ナダ、両縁にヘラケズリ、瓦当高3.6cm、色調は灰白色	G-068	G-068	
60-4	軒平瓦	SD310	瓦土 均整草瓦文、両分守4層、両縁部縁付？・ナダ、凹面：布目痕（割印）、丸瓦部厚1.7cm、色調は灰白色	G-078	春淵 軒平瓦7	
60-5	軒平瓦	SD310	瓦土 均整草瓦文、両分守2層、瓦当別形付、色調は灰白色	G-072	G-072	
60-6	軒平瓦	SK304	1層 草瓦文、両縁部縁付、凹面：焼叩き（楕圓・稜状）、接合面に焼叩き・キザミの痕跡、色調は灰白色	G-074	G-074	
60-7	軒平瓦	基本層	2層 草瓦文、両分守1層、瓦当型：ナダ、割部：ナダ、二本沈堀・割面文、赤切り、凸面：ナダ 凹面：布目痕、ナダ、両縁にヘラケズリ、瓦当高4.7cm、平瓦部厚1.2cm、色調は灰白色	G-067	春淵 軒平瓦1	
60-8	軒平瓦	基本層	3層 草瓦文、両分守4層、割部：稜状の焼叩き・割面文、凹面：赤切り痕、布目痕、ナダ、色調は黄褐色	G-069	春淵 軒平瓦8	
60-9	軒平瓦	SD310	瓦土 八重草文型草瓦文、両分守3層、瓦当厚2.6cm、丸瓦部欠欠、色調は黄褐色	F-040	春淵 軒平瓦7	
60-10	軒平瓦	P308	瓦土 八重草文型草瓦文、両分守1層、瓦当厚2.6cm、丸瓦部欠欠、色調は灰白色	F-041	春淵 軒平瓦1	
61-1	土師器 甕	SK302	瓦土 口コノ成形、外部は外唇気味に立ち上がり口縁部はくの字に外反、端部は上・下方に三角形状に突出 口コノ部厚約1cm、口縁部24cm	a	D-032	
61-2	土師器 甕	SD311	瓦土 口コノ成形、外部は内唇気味に立ち上がり口縁部はくの字に外反、外面に縦位のヘラケズリ、 内径16cm、口縁部12cm、高さ15cm	b?	D-027	
61-3	土師器 罎	SK304	底面 口コノ成形、切り縁には紅土赤切りで無調整、体部から内唇気味に立ち上がり口縁部でゆるく外反 内径16cm、口縁部13.5cm、底径6.2cm、高さ15cm	4	D-026	18-6
61-4	土師器 罎	基本層	3層 口コノ成形、切り縁には不明、体部下縁から底部に手持ちヘラケズリ、体部から外唇気味に立ち上がる 内径16cm、口縁部13cm、底径7.2cm、高さ15cm	3	D-031	18-9
61-5	土師器 罎	基本層	3層 切り縁には紅土赤切りで無調整、体部から外唇気味に立ち上がる、内面はヘラミガキ・黒色処理 底径16cm		D-028	

番号	種別	遺物・部位	特徴	分類	登録番号	写真図版	
61-6	赤土器 片	SD311	埴土	切り直しは面転承切りで無調整、体部から外縁気味に立ち上がり口縁部で丸くおさまる 口縁径13.2cm、底径9.2cm、壁厚4.4cm		D-023	18-10
61-7	赤土器 片	基本層	Ⅱ層	切り直しは面転承切りで無調整、体部から外縁気味に立ち上がり口縁部で丸くおさまる 口縁径15cm、底径7.4cm、壁厚4.1cm		D-030	
61-8	赤土器 高古作片 赤土器 台付部	基本層	Ⅱ層	切り直しは面転承切り、体部から外縁気味に立ち上がる、付合高、高台高6.9cm、高台径7.6cm		D-033	
61-9	赤土器 台付部	基本層	Ⅱ層	口縁部から体部の破片、外縁気味に立ち上がり口縁部で丸くおさまる體部は上方に三角形状に突出		D-029	
61-10	灰土器 片	SK301	検出	切り直しは面転承切りで無調整、体部から口縁部にかけて外縁気味に立ち上がる 口縁径15cm、底径9cm、壁厚5.5cm	1	E-031	
61-11	粗形器 片	SK301	埴土	体部から底部の破片、体部外面平行向き、下部に虚空のヘラケズリ、内面に口縁部のみ、底径9.4cm		E-030	
61-12	灰土器 片	SD310	埴土	切り直しは不明、無調整と思われる、体部から口縁部にかけて外縁気味に立ち上がる 口縁径13.6cm、底径8cm、壁厚3.9cm	1	E-032	
61-13	灰土器 片	SD310	埴土	切り直しは不明、体部下縁から底部に手持ちヘラケズリ、体部から口縁部にかけて外縁気味に立ち上がる 口縁径13.9cm、底径7.8cm、壁厚3.4cm	1	E-036	
61-14	灰土器 片	SD310	埴土	切り直しは面転承切りで無調整、体部から外縁気味に立ち上がる、口縁部内側つよく外反 口縁径13.4cm、底径6.8cm、壁厚4.2cm	3	E-034	17-4
61-15	灰土器 片	SD310	埴土	切り直しは面転承切りで無調整、体部から内寄気味に立ち上がり口縁部でめぐる外反 口縁径14.4cm、底径7cm、壁厚4cm	2	E-033	17-3
62-1	灰土器 片	SD310	埴土	外縁90度立ち上がり上方で内寄しくの字状に外反し口縁部にいたる、口縁部のみ、口縁径31.1cm		E-007	
62-2	灰土器 片	SD311	埴土	切り直しは面転承切りで無調整、体部から外縁気味に立ち上がる、やや厚みあり 口縁径12.9cm、底径6cm、壁厚4.5cm、體化完成済	3	E-045	17-5
62-3	灰土器 片	基本層	Ⅱ層	切り直しは面転承切りで無調整、体部から内寄気味に立ち上がる 口縁径13.5cm、底径7.6cm、壁厚4.6cm、體化完成済	3	E-046	
62-4	細形陶器 片	SK301	検出	口縁部破片、口縁部越え外反、内面に陰刻花文		I-002	18-12

第3章 出土遺物と発見遺構

第1節 遺物について

出土遺物には瓦類に丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦、土器類に土師器・赤土器・須恵器、陶器類に緑釉陶器・中世陶器、石製品に鎌、土製品にフイゴの羽口、金属製品に鉄釘、金属類として鉄滓がある。整理箱に納められた110箱程度の出土量であるが瓦類が大半を占める。ここでは瓦類と土器類の特徴について述べる。

1. 瓦類

丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・隅切瓦・熨斗瓦がある。丸瓦と平瓦には刻印をもつものがある。

1) 丸瓦 破片資料が大半であるが観察されるすべての瓦は、粘土紐巻き作りで玉縁付きの形態をもつものである。凸面には縄目き圧痕、叩き圧痕を磨り消すロクロナデ、ヘラケズリが、凹面には粘土紐痕、布目痕、ナデ、ヘラケズリが観察される。丸瓦部及び広端部の形態・法量に着目し2類に分けた。

丸瓦a類:丸瓦部の平面形がほぼ長方形を呈し、広端部の形がやや円弧のきつい半円形を呈するもの。法量が確認されるものが少ないが、全長33.7～36.5cm、玉縁長6.6～7.4cm、広端部幅(13.0)～(18.6)cm、広端部高8.7～10.6cm、厚さ1.6～2.0cmを測る。胎土には砂粒が少量含まれるが、緻密で須恵質となるものもみられる。全長及び広端部高は丸瓦1a類とほぼ同じであるが、やや厚さが薄く全体的に幅が狭い。

丸瓦b類:丸瓦部の平面形が台形状を呈し、広端部の形が円弧のゆるい半円形を呈するもの。全長32.4～37.9cm、玉縁長4.4～8.8cm、広端部幅18.4～20.8cm、広端部高9.1～9.6cm、厚さ1.7～2.4cmを測る。胎土には砂粒が含まれる。丸瓦1a類同様に個体差はみられるが、やや厚さをもち全体的に幅広である。

2) 平瓦 全体の形が知られるものは数少ないが、端部の状況等から平面形は台形を呈するものがほとんどと判断される。凸面には叩き圧痕、ナデ、凹型台圧痕、木目痕、ヘラケズリが、凹面には糸切り痕、布目痕、ナデ、ヘラケズリが観察される。断面形状は大半のものが円弧状であるが、つぶれ気味の扁平状のものが数は少ないが含まれる。粘土板合せ目・横脊痕は確認されない。きつめのナデが縦位方向に施され凹凸面となっているものもあるが、今回出土した平瓦はすべて一枚作りによるものと判断される。凸面の叩き圧痕に着目し2類に分けた。

平瓦1類:平行叩き凸面に施されるもの。叩き原体は溝幅が細目と太目の2種がみられ、叩き方向は瓦長辺

に対し縦位と斜行の2種がある。全体的に叩き圧痕は浅めである。凸面にはナデ、ヘラケズリ、つぶれた縄目痕、布目痕、小口・側面のヘラケズリが、凹面には糸切り痕、布目痕、ナデ、小口・側面のヘラケズリが観察される。凸面のナデ・ヘラケズリは浅いもので叩き圧痕を消すまでにはいらない。つぶれた縄目痕は平行叩きに先行する一次叩きの痕跡と判断され、燃れた線として確認される。布目痕は二次叩き(平行叩き)に先行する工程での痕跡と判断される。つぶれた縄目痕と布目痕は点的に確認される。計7点確認している。小口・側面のヘラケズリは破片資料が多く全容が掴めないが、凹面の側面はヘラケズリが施され、さらに凹凸両面からのヘラケズリで端部が多角面となり丸くおさまるものもみられる。平瓦2類ではほとんど確認されなく特徴的である。凹面には糸切り痕・布目痕が観察されるがナデにより部分的に磨り消されるもの、全面磨り消されるものがある。全体の大きさを知る資料はないが、18-2は残存長31.7cm、狭端部幅推定25cmを測る。平瓦1類の属性を示すものではないが、平面規模は平瓦2類と大きな差はないと思われる。瓦厚は1.5~2cmを測る。厚さ2cmを超す平瓦2類とは相違がみられ全体的に薄手の作りである。胎土には砂粒が少量含まれるが須恵質に焼成されているものが多い。色調は灰色が主体である。両側面が確認される資料は少ないが断面形状はほとんどが扁平状と判断される。さらに凸面には叩きでの縦位の稜が数条みられ平面的になり全体的に角張った印象をもつ。つぶれた縄目痕及び凸面に布目痕をもつ瓦は、一次叩きの段階→ナデ調整の段階→二次叩きの段階とする3工程の造瓦順序が想定される。これらのことから、平瓦1類はこの3工程を要する造瓦と判断されるが、一次叩き・布目痕が確認されないものが多数を占めることから、3工程が確認されるものを(a)とし他を(b)として分類整理しておきたい。

平瓦2類:縄叩きが凸面に施されるもの。叩き原体は細目と太目の2種がみられる。叩き方向は瓦長辺に対し縦位のものが主体であるが、斜行するものや縦位と斜行が組み合うものもある。凸面には側端部に沿うようにカーブした山形の突出や、瓦長軸と並行するスジ状の線が確認されるものが多い。これは凹型台の圧痕と判断され、ほとんどの縄目痕はつぶれ気味であることから、平瓦2類は凹型台を使用していると判断される。凹面には糸切り痕や布目痕が観察されるが、ナデにより線状に磨り消されるもの、ほぼ全面磨り消されるものがある。小口・側面のヘラケズリは凹面での一面である。断面形は個体毎に曲率の差はあるが円弧状である。長さ34.8~39cm、広端部幅23~29cm、狭端部幅22~24cm、厚さ1.9~3.3cmを測る。胎土には砂粒が少量含まれる。色調は灰色のものが主体を占めるが、酸化焰焼成で橙色系となるものも数多くみられる。

3) 軒丸瓦 22点出土している。八葉重弁蓮華文16点、宝相華文1点、種類不明5点である。

重弁蓮華文軒丸瓦:類が確認できるものが9点ある。国分寺1類が3点、国分寺3類が6点である。1類では60-11が周縁部を欠損するがほぼ瓦当面全体が確認される。中房はうすい円板状のもので上部径3.2cmを測る。蓮弁は1+4の構成で、中心蓮子は円形で周縁蓮子はやや細長の楕円形を呈し、間弁方向を向いている。蓮弁は扇状に広がりが丸くおさまるが、端部中央が盛り上がり先端上部は三角形に尖り、さらに端部できつ落ちる。小蓮弁は細長で先端部はやや尖っている。両蓮弁とも弁中央線が明瞭である。間弁端部は断面三角形の鋸歯形で中央に延びる隆線は細い。間弁と周縁の間に范傷の盛り上がりが見られ特徴的である。瓦当面長は推定21cmを測る。他の2点は中房部の破片である。色調は灰色である。3類は中房がやや厚めで丸みをもつ円板状で上部径3.1cm程を測る。蓮子は1+4の構成で、中心蓮子及び周縁蓮子は円形である。周縁蓮子は間弁方向を向いている。蓮弁は扇状に広がりが丸くおさまる。上面が端部に向かい厚さを増し盛り上がり、先端できつ落ちる。小蓮弁は細長で先端部はやや尖っている。両蓮弁の弁中央線が不明瞭となるものもみられる。間弁端部は鋸歯形で中央に延びる隆線は細い。瓦当面長は19~20cmを測る。范への詰め方が不十分なため中房蓮子が不明瞭となるものもあるが、全体として国分寺1類に較べ一回り小さく、両蓮弁は肉厚で丸みが強い。色調は灰色が主体である。なお、類不明なものが7点あるが蓮弁及び間弁の特徴から国分寺1~4類の中のものとして判断される。

宝相華文軒丸瓦:小破片資料である。周縁部、円形珠文、蝙蝠形の間弁端部が確認される。剥離面から推定し

て瓦当面厚は3.5cm内外と判断される。胎土はやや砂粒を多く含み、色調は暗灰色である。国分寺1類である。

4) 軒平瓦 瓦当面全面が確認されるものはない。19点出土している。二重弧文3点、単弧文7点、偏行唐草文3点、均整唐草文1点、連珠文2点、種類不明3点である。

二重弧文軒平瓦:国分寺1類である。二条の弧線は幅5mm程の断面半円形の線で描かれている。顎端部には同様の二条の並行線が横位方向に引かれ、その内側に一条づつ引かれた直線で鋸歯文が描かれている。顎部は横位のナデで区画されるが、段になるもの、斜行となるもの、平坦のものがある。8-5・60-8は施工前にナデ調整が全面に施されるが、8-6は平行叩きの圧痕が瓦当面・凸面に確認される。さらに、前者は顎部が断面三角形状となり平瓦部の厚さに較べ倍以上の厚さをもつが、後者はやや厚さが増す程度である。60-8の顎部には朱が塗られている。瓦当面高は4.1~5cmである。色調は灰色を主体とする。なお、種類不明とした20-6は瓦当部が欠損しているが、施工状況・叩き圧痕から同種のものとして判断される。

単弧文軒平瓦:幅4~6mmの断面半円形の線で一条の弧線が描かれている。顎部にはやや細目の縄叩き圧痕がみられ、縦位方向と横位方向のものがある。顎端部はナデ調整により段及び斜行面で区画されるものと無調整でゆるやかに盛り上がるものがある。瓦当面高は3.2~4.1cmである。色調は灰色を主体とするが赤褐色のものもみられる。なお、顎部が剥離し接合面が確認されるものが3点ある。格子状のヘラキザミが確認されるもの1点、隔刻となるヘラキザミ痕のもの2点である。

偏行唐草文軒平瓦:国分寺1類が1点、2類が2点ある。両類とも瓦当面貼り付けのものである。1類は唐草文が右から左へ展開するもので、上下に隆線で結ばれた珠文が配されている。50-11は顎部に縦位方向のハケメが施され、朱が塗られている。顎端部はヘラ状のもので段がきつく形成されている。断面は三角形状である。色調は灰白色である。2類は唐草文が左から右へ展開するものである。50-12の唐草文は断面三角形状で全体的な意匠は端正な作りである。顎部に縦位方向の細目の平行叩き圧痕がみられる。顎端部は斜行面となり区画される。断面は三角形である。須忠貫で色調は灰色である。60-5は瓦当が剥落したものである。色調は灰白色である。

均整唐草文軒平瓦:国分寺4類である。顎部の破片資料で瓦当面下部が剥落している。顎部には縦位の縄叩き圧痕がみられ、横位のナデにより部分的に磨り消されている。顎端部はナデ調整による段となっている。凹面には粗雑な布目痕跡がみられる。色調は灰色である。

連珠文軒平瓦:径2cm程の珠文が列になるもので、珠文間に小三角形の高まりが上下に配されている。国分寺2類である。21-1は珠文上面が中反りし、内に縄目の圧痕が明瞭にみられる。さらに、瓦当面全面に浅いヘラケズリが施され珠文の一部も削られている。顎部はヘラ状のものでゆるい段が作られ区画されている。顎面には縦横位の縄叩きがみられ、さらに指先で引かれたと思われる波形文がみられる。断面は三角形を呈するが反りをもっておりやや丸いおさまりである。平瓦部凸面は縦位方向のややつぶれた縄叩きがみられ、顎部付近は幅広の横位のナデがみられる。凹面には布目痕・浅いナデがみられる。厚さ3cm程を測りやや厚めである。色調は暗赤褐色である。全体的にやや粗雑な作りである。60-9も珠文上面が中反りとなるが無文である。顎部には縄叩き及びナデがみられ、さらに一条づつ引かれた幅3mm程の線で鋸歯文が描かれている。色調は暗灰色である。

5) 道具瓦 隅切瓦と製斗瓦が各1点ある。隅切瓦は平瓦2類のもので、長さ37.5cm、洪端幅22.5cmを測る。広端部側(8×4.5cm)を切断している。色調は灰色である。製斗瓦としたものは平瓦2類の形態をもつもので、凸面には叩き圧痕が確認されず、端部に凹型台座痕様の突出部が延び布目痕及び木目痕が確認される。凹面にはほとんど曲面がみられず平坦面となる。厚さ1.4cmと薄いものである。色調は灰白色である。

6) 刻印文字瓦 5種5点確認している。すべて文字と判断した。「夫」・「田」・「尺」が丸瓦に、「會」・「物」が平瓦に刻印されている。「夫」と「尺」が陰刻で他の3点は陽刻である。「夫」は丸瓦凸面ほぼ中央頂部に押

されている。外枠は2.7cm四方である。やや軟質で明黄褐色である。丸瓦a類である。「田？」は丸瓦凸面肩部に押されている。外枠は3cm四方である。面が剥離しているが残存部から「田」と判断した。やや軟質で褐色である。「尺？」は丸瓦凸面ほぼ頂部に押されている。外枠は2.6cm四方である。面がやや崩れているが「尺」と判断した。軟質で外面は燻され暗褐色であるが中は明黄褐色である。丸瓦a類である。「會」は平瓦凹面の致端部側に押されている。外枠は2.1cm四方である。色調は灰白色である。平瓦1類である。「物」は平瓦凹面に押されている。外枠は2.3cm四方である。やや軟質で灰白色である。平瓦2類である。多賀城跡での「物」-Aである。

2. 土器類

種類として、土師器・赤焼土器・須恵器がある。土師器及び須恵器には墨書をもつものが含まれる。

1)土師器 ロクロ不使用とロクロ使用の2種がある。器種にはロクロ不使用のものに塚があり、ロクロ使用のものには坏、高台付坏、甕がある。

塚 底部の形状から3類に分けられる。3点ある。

塚1類:丸底のもの。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部にいたる。調整は外面が体部下半から底部に手持ちヘラケズリ、口縁部から体部上半にヘラミガキが施される。内面はヘラミガキ後黒色処理である。口縁径15cm、底部径8.8cm、器高8.8cmを測る。塚2・3類に較べてやや小振りである。

塚2類:丸底風平底のもの。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部にいたる。調整は外面にヘラミガキが施され、内面はヘラミガキ後黒色処理である。口縁径23.4cm、底部径10cm、器高14.6cmを測る。大型品である。

塚3類:平底のもの。口縁部が欠損するが体部は内湾しながら立ち上がる。全体的に摩滅しており調整が判然としないが、外面下部にヘラミガキが施され、内面には黒色処理が認められる。底部径10.4cmを測る。

坏 形状から大きく4類に分けられる。すべて平底で、切り離しが判明するものは回転糸切りである。

坏1類:底部からややきつく内湾気味に立ち上がり、深めの器形をもつ。底部から体部下端には手持ちヘラケズリ、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。分量から大(a)・中(b)・小(c)の3種が認められ、他の類に較べやや器厚がある。口縁径は(a)が16cm、(b)が14.8cm、(c)が12.4cm、底径は8.6cm、8cm、6cm、器高は6.3cm、5.5cm、4.4cmを測る。3点ある。

坏2類:底部から内湾気味に立ち上がり、やや浅めの器形をもつ。底部から体部下端には手持ちヘラケズリ、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。1類に較べ器高が低い。口縁径は15cm、底径は8.2cm、器高は4cmを測る。1点ある。

坏3類:底部からゆるく外傾しながら内湾気味に立ち上がりやや深めの器形をもつ。切り離しが確認されるものは回転糸切りである。無調整のもの、底部に手持ちヘラケズリ、底部から体部下端に手持ちヘラケズリを施すものがある。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。口縁径14.3~15cm、底径7~7.2cm、器高4.6~5.2cmを測る。3点ある。

坏4類:底部からゆるく外傾しながら内湾気味に立ち上がり口縁部がゆるく外反する。切り離しは回転糸切りで無調整である。1~3類に較べ口縁径に対し底径の比率が小さいがやや深めの器形をもつ。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。口縁径13.5~14cm、底径6.2~7cm、器高4.5~5cmを測る。2点ある。

坏5類:底部から外傾気味にゆるく立ち上がる。底部から体部下端には手持ちヘラケズリ、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。1類に類似し浅めの器形であるが立ち上がりがさらにゆるい。口縁径は13.8cm、底径7cm、器高3.3cmを測る。器形として須恵器坏4類に類似する。1点ある。

高台付坏 口縁部から体部が欠損している。高台部はハの字状に張り出す。内面調整はヘラミガキ後黒色処理である。切り離しは回転糸切りである。高台径7.6cm、高台高1.1cmを測る。1点ある。

壺 口縁部の法量から大 (a)、中 (b)、小 (c) の3種に分けた。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がくの字状に外反する。(a)の口唇部は丸くおさまるもの、端部が三角形に上下に突出するものがある。(b)・(c)の端部は平口縁となる。調整が確認されるものは外面では縦位のヘラケズリ、内面では回転ヘラナデである。61-2はヘラミガキ後黒色処理である。(a)の口縁径は21~24.8cm、(b)は17cm、(c)は11.5cmを測る。5点ある。

2)赤焼土器 器種には坏、高台付坏、鉢がある。内外面ともロク口調整で、切り離しの確認されるものは回転糸切りで無調整である。全体として橙色を呈し鉢以外はやや軟質である。

坏 底部からやや内弯気味に立ち上がる。口縁径13.2~15cm、底径5.2~7.4cm、器高4.1~4.4cmを測る。土師器坏3類に類似する。2点ある。

高台付坏 口縁部が欠損している。体部はゆるく内弯気味に立ち上がる。高台部はハの字状に張り出す。高台径7.6cm、高台高6mmを測る。1点ある。

鉢 体部下が欠損している。体部はゆるく外傾しながら口縁部にいたる。口唇部は上方に三角形に丸くおさまる。硬質である。台なし高台がつくものと判断される。口縁径は38cmを測る。1点ある。

3)須恵器 器種には坏、高台付坏、壺、壺、鉢がある。

坏 すべて平底である。形状及び切り離し技法から大きく5類に分けられる。

坏1類:底部からきつく外傾気味に立ち上がりやや深めの器形をもつ。内弯気味のものもあるがほとんどのものが直線状である。大きさに中小の2種がある。切り離しが判明するものは回転ヘラ切りである。無調整のもの(底部全面及び体部下端に手持ちヘラケズリ)のものがある。口縁径は11.4~16cmを測り、14cm内外のものが主である。底径は7.2~9.8cmを測る。器高は3.2~4.7cmを測り、4cm内外のものが主体である。17点ある。

坏2類:底部から内弯気味に立ち上がり口縁部がゆるく外反する。切り離しは回転ヘラ切りで無調整である。口縁径は14.4cm、底径は7cm、器高は4cmを測る。1点である。

坏3類:底部からやや内弯気味に立ち上がりやや深めの器形をもつ。口縁部がゆるく外反するものもある。切り離しは回転糸切りで無調整である。大きさに中小の2種があり、他の類に比べ底径の小さいものがみられる。口縁径は12.3~13.5cm、底径は5~6.8cm、器高は3.3~4.5cmを測る。7点ある。

坏4類:底部からゆるく外傾気味に立ち上がりやや深めの器形をもつ。口縁部がゆるく外反するものもある。切り離しは回転糸切りで無調整である。口縁径は13.1~14cm、底径は6.4~7.4cm、器高は3.4~3.8cmを測る。底部に「大」の墨書がみられる。器形及び胎土が同じであり、同窯での製品と判断される。7点ある。

坏5類:大型のもので底部から外傾気味に立ち上がり深めの器形をもつ。切り離しは回転ヘラ切り(a)と回転糸切り(b)があり無調整である。(a)は口縁径15.9cm、底径8.8cm、器高5.1cmを測り、(b)は口縁径17.6cm、底径8.6cm、器高6.4cmを測る。他の類に比べ一回り大きい。各1点ある。

高台付坏 体部は外傾気味につよく立ち上がり、下端にはゆるい稜が巡る。高台部は「ハ」の字状に張り出している。切り離しは回転糸切りである。口縁径11.4cm、器高5cm、高台径7cm、高台高9mmを測る。やや小振りのもので、1点のみである。

壺 破片資料が大半で図示したものは4点に留まる。体部の調整が確認できるものは平行叩きである。口縁部がくの字状にきつく立ち上がり、口唇下部が三角形に張り出すもの。口唇上下部が三角形に張り出し、下部に一条の隆線とやや粗い波状沈線が巡るもの。外反気味に立ち上がる口縁部に沈線と波状沈線が巡るものがある。

壺 小破片が多く図示できたものは1点のみである。高台の付くもので、高台径5.4cm、高台高9mmを測る。体部は内弯気味に立ち上がる。小製品と思われる。

鉢 口縁部から体部の破片で2点ある。ゆるく内弯しながら立ち上がり、体部上部がS字状に張り出し口縁部

にいたる。口縁は平縁で、体部外面には平行叩きが確認される。口縁径30cmを超す大振りのものである。

4) 墨書土器 須惠器12点、土師器1点の計13点確認している。器種はすべて坏である。墨書はすべて文字と判断したが、判読できたものは「大」6点、「山」1点、「万」1点である。「大」と「山」は須惠器底部に書かれ、「万」は土師器体部に書かれている。他の墨書は欠損やかすれで判然としなない。

3. 遺物の位置づけ

以上、瓦類と土器類の特徴を記したがここでは所属時期等についてみてみたい。

丸瓦は平面形及び広端部の形状の違いからa類とb類に分けたが製作技法・法量と大きな違いはみられない。これら両類は多賀城跡の丸瓦ⅡB類に分類されるものである。なお、a類には「夫」・「尺？」と刻印されたものがある。後述となるが、これら2点の丸瓦は国分尼寺創建期のもつと判断される。両類に形態的相違は認められるが、前後関係については不明である。ただし、b類はa類に較べて形態的なまとまりにも欠けることから後出的なものとも判断される。

平瓦は凸面の叩き圧痕の違いから大きく2類に分けた。平瓦1類は凸面に平行叩きが最終的に施されるものである。国分寺跡及び蟹沢中窟跡から同類の平瓦が出土している。国分寺跡(平成元年度調査)では平瓦1A類としたもので、詳細な観察の結果、平瓦1類は多賀城跡の平瓦ⅡB類に先行することが推定され、多賀城1期の中に位置付けられる可能性が高いとしている

(注13)。蟹沢中窟跡は多賀城Ⅱ期の瓦を焼成した窯で、第4遺構の崩落壁から1点、地点不明のもの1点の計2点が確認されている(注14)。平瓦1類はこれまでの調査でも出土はしているが極めて少ない出土量である。国分寺跡でも同様の傾向で、一定量の出土はみえるが絶対数からみた割合は低い。この平瓦1類は、一枚作りで叩き調整を二度行う3丁程を要する造瓦で、多賀城跡では確認されない類であること、後述となるが「會」の刻印が確認されていること、これらから国分寺創建期のもつと判断される。平瓦2類は凸面に縄叩きが施されるものである。凸面側端部には山形の突出やスジ状の線が確認されるものもあり、縄目痕も濃れ気味であることから凹型枠の使用が判断された。これらは多賀城跡の平瓦ⅡB類に位置付けられ、多賀城Ⅱ～Ⅳ期の範疇に属するものと考えられた。なお、国分寺跡では凸面に縄叩きが最終的に施され、造瓦に3丁程を要する平瓦ⅠB・ⅠC類が確認されている。今回調査では確認し得なかったが、創建期瓦となる平瓦1類の絶対数から判断しても、平瓦2類に上記の瓦類

	国分寺				国分尼寺										
	S30-34	S42-H1	計		1次	2次	3次	4次	5次	6次	7次	8次	9次	10次	計
黄瓦文	1層	73	10	83	2		1	1	5					4	13
	2層	1		1											1
	3層	1		2											2
	不明	2		3											3
墨書文		7		7	1					1				7	9
備行唐草文	1層	206	47	253											11
	2層	5		5	4		1	2	7		1	4	1	2	22
	3層			3											3
	4層	89		89											89
	不明			6					1						1
山形文		148	22	170											
均齊唐草文	1層	42	3	45											
	2層	75	0	75	2				1						3
	3層	25	2	27											
	4層	31	1	32											1
	不明	4	4	8											
蓮葉文	1層	79	0	79	2				2						6
	2層	280	17	297											
	不明	4	4	8											
三重紋文		5		5					1						1
地蔵菩薩行唐草文		3		3											
龍馬文		87	2	89											
梅花文		25		25											
夏井蓮華文	1層			8								4			3
	2層			4											
	3層	318		318								3			6
	4層			12											
	5層	43	4	47											
	6層	31	4	35											
	7層	32		32											
	8層	7		7											
	9層	3		3											
	不明			62	62		1	1	2	8		1		7	20
宝相華文	1層	83	0	83	1										2
	2層	189	5	194					1						1
	3層	9	1	10											1
	4層	72	0	72	1										1
	5層	1		1											1
	不明	1		1											1
蓮華文		79	2	81						1					1
網井唐草文	1層	26	3	29						1					2
	2層	28	4	32						1					2
	不明										3				3
真直文		1		1											
備行唐草文		1		1											
宝相華文		29	1	30											
備行唐草文	1層	1		1											
	2層	1		1											
	3層	1		1											
桜花様文	1層	1	1	2											

S355-H1調査分のみ集計

第1表 陸奥国分寺出土軒瓦集計

が包括されている可能性が考えられる。

軒瓦類は第1表にこれまでの調査で出土したものを国分寺跡出土のものに対比し示した。創建期の軒瓦類の共通性は従来から指摘されているが、その後の調査結果からみても妥当なもの判断される。さらに多賀城跡Ⅲ・Ⅳ期に位置付けられる軒瓦類も同様なことが確認される。陸奥国分寺創建期の軒瓦は、伊東信雄氏により重弁蓮華文軒瓦Ⅰ～Ⅵ類、重弧文軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類、偏行唐草文軒平瓦Ⅰ～Ⅴ類、山形文軒平瓦が広い意味での創建時のものとされ、創建瓦は出土量からみても二種類以上の瓦の混用があったとし、形式的に最も古いものは重弁蓮華文軒瓦Ⅰ類と重弧文軒平瓦とし、重弧文軒平瓦Ⅱ類の存在から重弧文軒平瓦と偏行唐草文軒平瓦はほぼ同時代のものとしている。さらに、重弁蓮華文軒瓦と偏行唐草文軒平瓦のセットが創建当初の建物に多く使用された瓦であるとしている(註12)。T.藤雅樹氏によっても同様の見解が示されている(註15)。ここで創建期瓦の両寺跡での出土傾向等について確認しておく。重弁蓮華文軒瓦は尼寺跡では1・3類のみが確認される。国分寺跡では1～4類を一つにまとめているが、2・4類が多く1・3類は比較的少ないとしている。多賀城跡でも重弁蓮華文軒瓦222が221と223に較べ突出した出土数をみせ国分寺跡と同様な傾向がみられる。5・6類は1～4類に較べてやや退化的印象をもつものである。重弧文軒平瓦は尼寺跡では1・2類が確認され1類が高い出土率をみる。国分寺跡でも1類が一定量の出土をみる。頸面の文様は1類が鋸歯文で2類が唐草文となり調整はともに平行叩きである。平瓦部が確認されるものの調整も平行叩きである。偏行唐草文軒平瓦は尼寺跡では1・2類のみの確認であるが、2類がほとんどを占め軒瓦類のなかで最も多い確認数である。国分寺跡では1類が突出した確認数をみる。1類は頸面調整にハケメがみられ、平瓦部が確認されるものには縄叩きないし稲妻叩きがみられる。2類は頸面調整に平行叩きがみられ、平瓦部が確認されるものにも平行叩きが確認される。多賀城跡では両類ともほぼ同数確認されているが、偏行唐草文軒平瓦610は頸面及び平瓦部の調整に縦位の縄叩きが施され国分寺2類とは細部で区別される。3類は1類同様の意匠であるが唐草文の頂部が平坦面となり、珠文を含め区別される。4～5類はやや矯正さに欠け粗雑な作りである。3類の頸面にはハケメ、4類には縄叩きが確認される。山形文軒平瓦は尼寺跡では確認されないが、国分寺跡では一定量の出土をみる。頸面調整はハケメと縄叩きの2種が確認される。以上、両寺跡での傾向をみたが両者で確認されるもの、同種類での類間に違いがみられるもの、片方のみに確認されるものが知られる。大局的には同様の瓦群で構成されていると判断され、類間の違いや片方のみの確認は国分寺と尼寺の造営規模に起因するもので需要における一側面が表れたものと思われる。次に重弧文軒平瓦Ⅰ類と偏行唐草文軒平瓦Ⅱ類に関わる点について再度確認しておきたい。この両軒瓦は尼寺跡ではほぼ一定量の出土が確認され創建期の主体的軒瓦となるが、平瓦Ⅰ類を含め陸奥国分寺のみでの消長となる。多賀城跡Ⅱ期瓦に先行する瓦群と判断されるが、他の類の存在からも大きな時間差はないと判断される。造瓦組織の中での工人集団の製品を含めた出土・消長からも考慮される。

刻印文字瓦には「夫・「尺」?・「田」?と「會」・「物」がある。前者が丸瓦凸面に後者は平瓦凹面に刻印されている。陸奥国分寺ではこれまでに上記の他に丸、矢、占、伊、石、柴、倉、吉、未、菊、行など10種類以上の刻印文字が確認されている。高野方宏・熊谷公男両氏は、多賀城Ⅱ期の刻印文字瓦について窯跡及び陸奥国分寺出土の刻印瓦との検討の結果から物、丸、矢など6文字14種類の刻印は多賀城Ⅱ期の造営用のグループとして位置づけられ、陸奥国分寺では部分的な修理用であるとし、夫、尺、會などは専ら陸奥国分寺の造営用に製作されたものであるとしている。さらに、刻印の意味、造瓦組織、造瓦体制にまで言及している(註16)。「會」の刻印をもつ瓦は平瓦Ⅰ類で平行叩きが凸面に施されている。平瓦Ⅰ類とともに上記の刻印瓦類は多賀城跡から出土しないものであり、これらの刻印瓦すべてが平瓦Ⅰ類であるのか確認は出来ていないが、創建期の造瓦体制に関わる点があり留意される。なお、刻印瓦を焼成した窯のひとつに蟹沢中窯跡がある。重弧文軒瓦と単弧文軒平瓦を焼成した窯であるが、多賀城・国分寺・尼寺で確認される刻印瓦の大半が出土しており、多賀城Ⅱ期の刻

印瓦は当窟跡を中心に製作されたと考えられている。なお、平瓦1類となる瓦や「會」・「大」の刻印瓦も少量ではあるが出土しており、周辺に平瓦1類を含めた陸奥国分寺創建期の瓦を焼成した窯の存在がつかう窺われる。

土器類は土坑などから大量の瓦類とともに出土している。多くのものが廃棄されたものと判断され、廃棄時の土器類等の構成が知られる。破片資料を含めても須恵器が主体を占め土師器は少ない傾向がみられる。坏類を中心にSK156・SX216・SX206での構成をみている。SK156では土師器坏1類が2点、2類が1点、須恵器坏1類が12点、3類が1点、5類が1点確認された。土師器坏類は内湾気味に立ち上がる深めの器形と浅めの器形の2種がある。切り離しは不明で体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリがみられる。須恵器坏類は深めの器形とやや深めの器形の2種がある。前者は外傾気味に立ち上がり切り離しは回転糸切りで無調整である。後者はきつく外傾気味に立ち上がるものとやや内湾気味に立ち上がるものがある。回転糸切り無調整のものや底部全面に手持ちヘラケズリを施すものもあるが、切り離しの主体は回転ヘラ切りで無調整のものである。このような土器類構成をもつものに多賀城跡のC群土器があり9世紀前半頃としている。当土器類の土師器坏は口クロ使用土師器の初期形態を示しており、これらから9世紀前半頃を中心とした年代が考えられる。SX216では土師器坏5類が1点、須恵器坏1類が1点、3類が2点、4類が6点確認された。土師器坏は外傾気味にゆるく立ち上がる浅めの器形である。切り離しは不明で体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリがみられる。須恵器坏類はやや深めの器形で立ち上がりの違いで2種がある。切り離しは回転ヘラ切りのものがみられるが、主体は回転糸切りで無調整のものである。なお、須恵器坏には「大」の墨書が5点みられ、さらに土師器坏と須恵器坏には炭化滓の付着があり灯明具としての使用が確認される。これらはSK156の土器類よりも後出の要素がみられ、多賀城跡のD群土器に相当する。上層に灰白色火山灰が確認されており、これらから9世紀後半頃を中心とした年代が考えられる。SX206では土師器坏と須恵器坏5類の2点のみの確認であるが、共存資料に東弁遊華文軒丸瓦、平瓦1類、「大」の刻印をもつ丸瓦a類がある。これらから当土器類は8世紀後半頃の年代と考えられる。

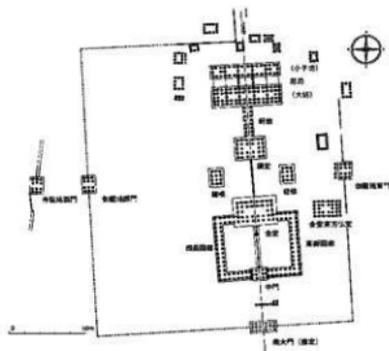
なお、基本層や遺構から単体で出土する土器類がある特徴から大きく8世紀後半から9世紀代のもものと判断される。赤焼土器坏・台付鉢などは多賀城跡のF群土器の範疇に属するもので10世紀代と判断される。

第2節 発見遺構について

今回調査で掘立柱建物跡3棟、溝跡5条、土坑26基、性格不明遺構7基、柱穴・ピット多数を確認した。ここでは主な遺構について説明を加える。

1. 掘立柱建物跡

SB1・SB2の建物跡は金堂跡の中軸線に対しほぼ直交する建物配置となり軸角を同じとしている。両建物跡の妻部を片側ずつで確認しており、伽藍の配置から桁行は15間が妥当と判断した。北側のSB1が2間×15間となり、南側のSB2が北側に庇をもつ2間以上×15間の建物跡と考えられた。金堂跡の北側に位置し東西に長大な建物跡であることから両建物跡は尼坊跡と判断されよう。同様の建物配置をもつものに上総四分尼寺跡BⅡ期のものがある。中門—金堂—講堂—尼坊と伽藍中軸線上に建物が配置され、尼坊は南北2棟の掘立柱建物跡で構成される。北側に梁行2間(5.99m)×桁行15間の小子坊、南側に梁行4間(10.48



第63図 上総四分尼寺跡BⅡ期伽藍

m) × 桁行 15 間 (44.33 m) で四面に庇が付く大坊が位置する (注17)。配置・規模・柱間数まで極めて類似しており、調査成果を含め SB 2 は梁行 4 間の建物跡と考えた。SB 1 が梁行 2 間 (6.6 m) × 桁行 15 間 (44.8 m)、SB 2 が梁行 4 間 (11.6 m) × 桁行 15 間 (44.8 m) で南北二面に底をもつものとなる。建物間距離は中央部分で 9.75 m を測る。2 棟の柱穴は隅丸長方形を呈し、大きさは短軸でも 1 m を超し長軸 2.4 m を測るものもあり全体として大型である。深さは 70 ~ 90 cm 程であるが 1 m を超すものもある。柱痕跡は径 35 cm 前後のもので底面高はほぼ同一である。SB 1 は新 II 2 時期の柱穴が確認され、同一地点での建て替えと判断した。さらに、間仕切りの柱穴が 2 ヶ所でみられ配置から全体が 2 間 × 3 間の計 5 室に分かれていたと考えられる。なお、SB 2 は柱穴の確認数も少なく詳細は不明である。

SB 3 は東西 2 間 × 南北 3 間以上の建物跡と推定したもので、SB 2 の東方約 61 m の推定寺域線上に位置している。柱穴は一辺 1 m 程の隅丸の正方形で柱痕跡は径 25 cm 前後である。梁行は 2 間分で 4.8 ~ 4.9 m である。西側柱列は真北に対し約 6° 西偏しており、金堂跡中軸線にほぼ並行している。現段階では性格は不明であるが、配置及び規模からみて尼寺跡に係わる遺構と判断される。

2. 溝跡

7 条確認した溝跡のうち 2 条の溝跡を位置・方向性・形状から区画施設と判断した。他の溝跡も尼寺跡に関係するものとは判断されるが詳細・性格等不明である。

SD157 は推定寺域線の西辺北側、7 次調査で確認された SD-1・2 溝跡の南側延長線上に位置する。断面形状もほぼ同じで、連の溝跡と判断される。3 条の溝跡での確認長は約 34 m を測り、やや蛇行をみるが溝方向はほぼ真北を向く。堆積土の中間層から瓦類が多量に出土し廃棄されたものと判断される。SD-1・2 溝跡でも同様な出土状況が確認されている。

SD310 は金堂跡と SB 2 の間、やや SB 2 寄りに位置する。確認長は短い、溝方向は金堂跡中軸線にほぼ直交している。堆積土から大草の瓦類・土器類が出土しており、SD157 同様に廃棄の状況が確認された。溝断面形状はやや開口した V 字形のもので、逆台形を呈する SD157 とは相違がみられた。

3. 土坑

平面形は方形と円形を基調とし隅丸方形・円形・長円形のものがある。大きさは長軸 4 m を超えるもの、長軸 2 ~ 3 m 前後のもの、長軸 1 m 前後のもの大・中・小の 3 種がある。大型のもの 1 基を除き性格は不明である。

大型のものは 2 基ある。SK156・SK301 は全体は確認できないが長軸 4 m を超える不整の円形と判断される。SK156 は壁がややきつく立ち上がり底面には浅い凹凸はみられるがほぼ平坦である。多量の瓦類等が各層から炭化物・焼土とともに面的に出土している。堆積土はレンズ状の流入となるが人為堆積で遺物類は廃棄されたものと判断した。SK301 は壁がほぼ垂直に立ち上がり底面はほぼ平坦である。灰白色火山灰が小ブロック及びブシ状となり各層に含まれる。遺物は小破片が多くまばらな出土状況である。壁面及び底面状況からみて他の土坑とは違いがみられ、性格は不明であるが何らかの施設と判断される。

中型のものは 12 基ある。平面形は隅丸方形・長円形・不整形のものがある。SK138・SK304 は長軸 2 m を超えるもので、平面形は SK138 が隅丸長方形、SK304 は長円形である。堆積土は単層で共に人為堆積と判断される。SK304 の底面からは完形の土師器坏が正位体で出土している。なお、SB 1 周辺に形状・規模がほぼ同じ土坑が数多くみられる。人為堆積のもので、建物跡と重複する土坑はすべてが柱穴を切っている。

小型のものは 8 基ある。平面形は隅丸方形・円形・長円形のものがある。大半のものが浅いもので単層での確認であるが人為堆積を示すものもある。

4. 性格不明遺構

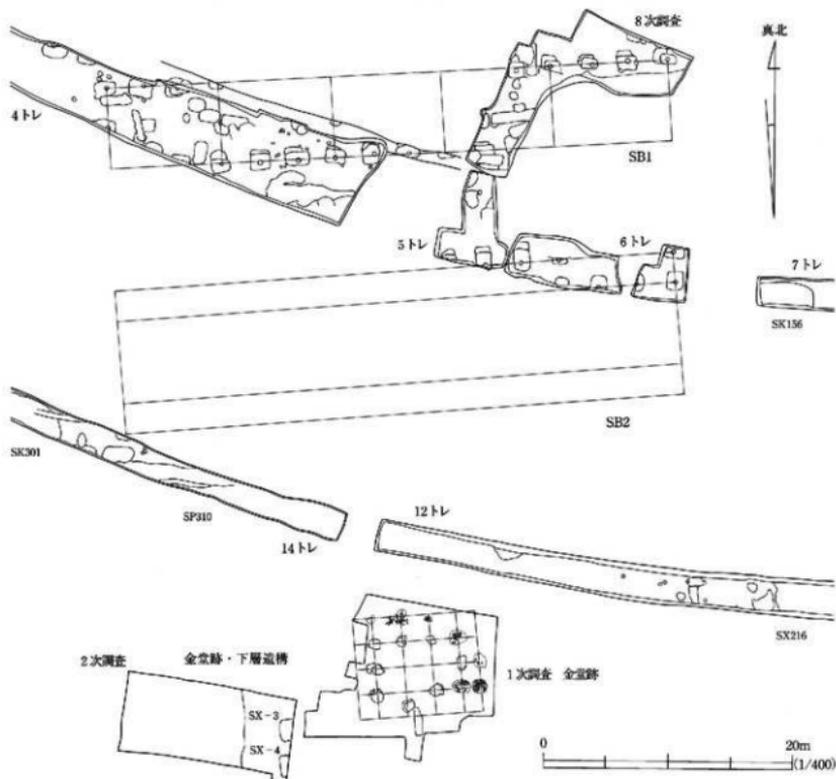
上端や底面が不定な形状のものである。土坑状のものが 3 基、溝状のものが 4 基ある。

SX206は不整な方形を呈する土坑状のものでSB3のP202・203に切られている。数は少ないが堆積土及び底面から重弁蓮華文軒丸瓦・平瓦・丸瓦・土師器・須恵器が出土している。状況から廃棄と考えられ廃棄穴と判断されるものである。遺物群は一括資料と判断できるもので、類構成から尼寺創建期の遺物群と思われる。

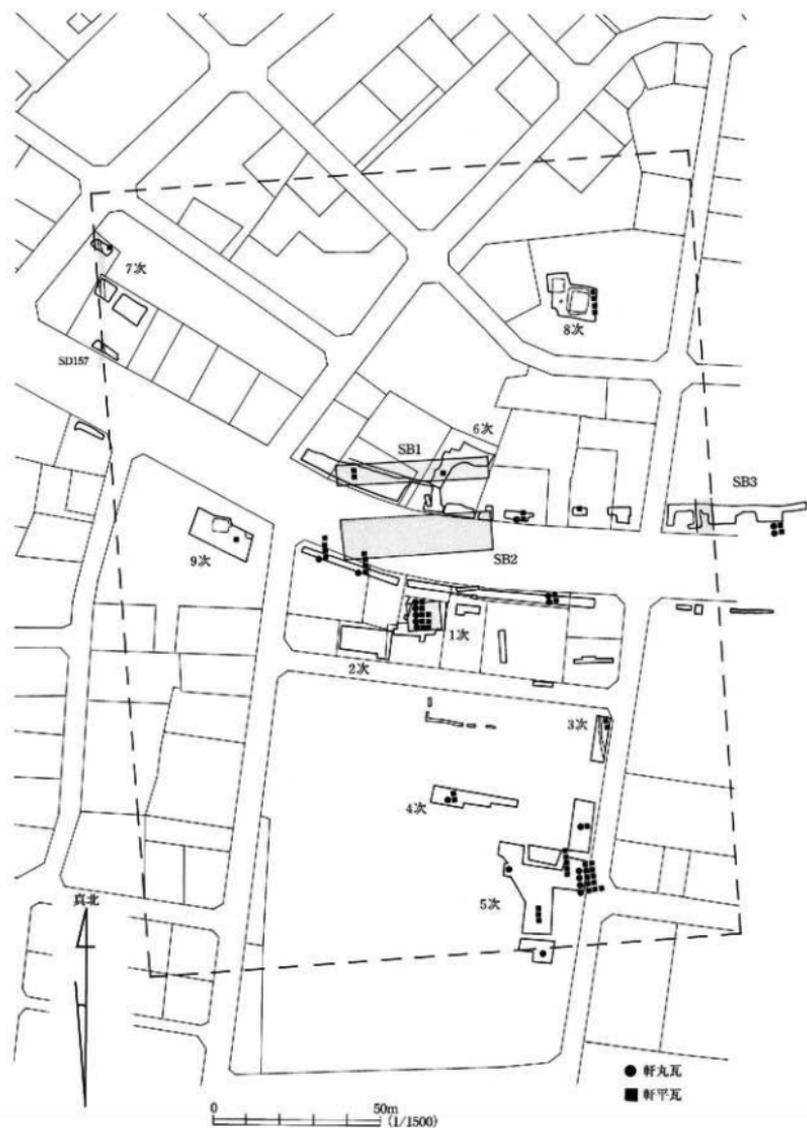
SX216は南北方向に溝状に延びており、最大東西長が16.5mと幅広であるが最大深度60cm程と立ち上がりがゆるく大きな窪地状となる。堆積土はゆるいレンズ状堆積を示し、1層には灰白色火山灰が小ブロック状に含まれる。各層から瓦類・土器類が大量に出土しており、状況から廃棄されたものと考えられ廃棄穴と判断される。

第3節 伽藍配置と各遺構について

昭和39年の調査(1次調査)で観音塚と呼ばれる土壇上から金堂跡と推定される建物跡が確認され、今回の調査で金堂跡北側の地点で尼坊跡と推定されるSB1とSB2の建物跡、さらに東端側でSB3を確認した。これまでに計4棟の建物跡を確認したことになる。金堂跡は桁行5間、梁行4間の礎石立のもので建物方向は磁北に対し約4度東にふれる。建物の大きさは正面9.85m、奥行8.5m程を測り、諸寺の金堂や講堂などにくらべてか



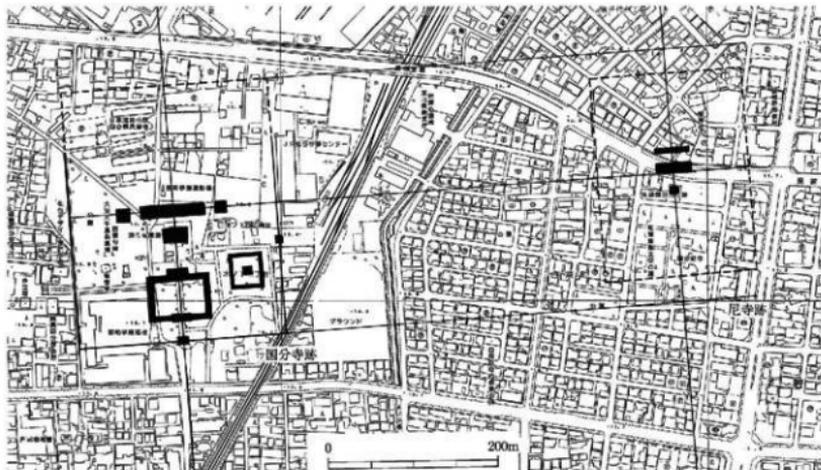
第64図 陸奥国分尼寺跡伽藍中央部遺構群状況



第65図 陸奥国分尼寺跡出土軒瓦分布

なり小さいと報告されている。SB1は桁行15間、梁行2間のもので、SB2は柱穴の確認数は少ないが桁行15間、梁行4間で南北二面に庇を持つものと推定した。2棟とも掘立柱のもので建物方向は真北に対し4度及び5度西偏している。SB1正面の桁行は44.8mを測り大型のものである。SB3は桁行3間以上、梁行2間と判断される掘立柱のもので建物方向は真北に対し6度西偏している。これら4棟の建物方向は3度内に納まりほぼ同一方向を向いており、同一基軸の建物群と考えられる。なお、金堂跡の建物中軸線を北側に延長するとSB1の建物中央部の柱間を通り、建物跡は軸を中心に左右相称となる。このことから建物中軸線は尼寺跡の伽藍中軸線と判断される。

伽藍配置は未だ不確定要素が多く推定の域をでないが、これまでの調査成果に今回調査の成果を含め概観してみよう。1次調査の報告では金堂跡の南側で粘土を積上げた形跡が、北側で版築様のものが確認され、伽藍配置からみて、中門跡—金堂跡—講堂跡とすることができるとしている。今回調査で北側に尼坊跡と想定したSB1が位置することになる。中門跡と講堂跡は確認に留まるものであるが遺構の存在を窺わせるものである。講堂跡とした地点で今回確認されたものがSB2である。この建物跡は配置・規模から講堂跡にはならず、二時期の遺構の存在が考えられる。なお、2次調査で金堂跡の下層遺構と判断される柱穴ないし地業と思われる落ち込みを2基確認している。落ち込みの西辺ラインは金堂跡の建物中軸線にほぼ並行し基軸を同じにするものと判断される。金堂跡直南側に位置し基壇範囲を示すとも考えられる南北ラインも確認されている。金堂跡以前の主要建物跡の存在が窺われる。方格建物と仮定し伽藍中軸線にのせ大きさを推定すると東西長約21m程となる。これら建物跡群を大きさや重複関係をもとに整理すると、尼寺跡では伽藍中心部において大きく二時期（Ⅰ・Ⅱ）の遺構群の存在が考えられる。Ⅰ期段階としてSB1・SB2とした2棟の建物跡と金堂跡下層遺構がある。先述した上総国分尼寺跡BⅡ期の伽藍を参考にすると、これらはそれぞれ尼坊跡と講堂跡に位置付けられよう。この配置からみると未確認ではあるが現国分尼寺本堂地点に金堂跡の存在が窺われることになる。周辺部調査で軒瓦類が数多く出土しており傍証の一端ともなろう。Ⅱ期段階は現在確認されている金堂跡のみとなる。北側に位置するSB1は建て替えが確認されるが、金堂跡に較べて規模が極めて大きいことから組み合うものとは判断し難く、未調査部分に同一伽藍の建物群が存在するものと考えられる。Ⅰ期段階が創建期となり、Ⅱ期段階がその後とな



第66図 陸奥国分僧・尼寺跡寺域推定図

るが、金堂跡基壇周辺からは多賀城跡IV期の瓦となる宝相華文・緋蓮華文軒丸瓦や蓮珠文軒平瓦が出土し、基壇上からは10世紀前後の年代が想定される鎮壇具とした土師器甕が出土している。これらからII期段階の年代は9世紀後半代頃とされよう。なお、金堂跡北側に位置する溝跡(SD310)をはじめとし土坑等から大量の瓦群が廃棄状態で確認されている。多賀城跡IV期に属する瓦類は含まれずそれ以前と判断され、このような状況から貞観11年(869)の大地震に関わる遺物群の可能性もある。推定とはなるが地震倒壊後の復興がII期段階となり、現時点で金堂跡のみが確認されていることになる。伽藍は二時期の存在を想定したが、I期段階の講堂跡地点にII期段階の金堂跡が位置することになる。今後の調査をもって再考も必要となろう。

尼寺跡の寺域範囲は国分寺跡との対比や現況地形から東西幅180~190m(約600尺)、南北長240~250m(約800尺)程とする想定が試みられている。7次調査及び今回調査で推定寺域線の西辺ラインにほぼ乗る南北方向に延びる溝跡が確認された。部分的な確認であるため方格のものか詳細は今後となるが、西辺北側部に関してはほぼ推定した地点に地割の溝跡が確認されたことになる。東辺中央部では南北棟の掘立柱建物跡が確認された。東列部分の遺存状況がわるく全体が不明となるが、間尺から判断しても門跡の可能性は低い。なお、東側調査地において軒瓦類が出土しており、寺域ラインはさらに東側に位置しているものと思われる。

土坑・性格不明遺構は各調査区で確認されているが、ここでは土器・瓦類が数多く出土するものについてみる。今回調査では円形のもの不整形のものがみられたが、堆積状況から判断して一時に埋まり切ったものは皆無であった。建物改築時における一時的なゴミ穴としての性格も考えられるが、SX216のように大きな窪地状のものもみられる。国分寺跡の調査でも性格は異なるが同様な状況が確認されている。寺域内の主要伽藍脇に開口した土坑類の存在、空間利用の側面が窺われる。

第4章 まとめ

陸奥国分尼寺跡では1次調査で確認された金堂跡のみが知られていたが、これまでの調査成果と今回調査で尼坊跡を確定とする二時期の伽藍の存在が想定されるに至った。創建期伽藍の参考としたものは上総国分尼寺跡である。規模・配置とも極めて類似し特徴的である。創建期の軒瓦類は国分寺跡とほぼ共通した出土傾向が再確認されたが、陸奥国分寺のみで確認される瓦類の存在もあり留意される。寺域範囲や各伽藍構成等未だ不明な点が多く今後の調査に期するものが大きい。

- (註13) 斎野裕彦 1990 『陸奥国分寺跡』仙台平野の遺跡群IX 仙台市文化財調査報告書第134集
 (註14) 渡邊孝伸他 1988 『仙台市蟹沢中興跡第2次調査報告』『陸奥国官窯跡群V』古窯跡研究会
 (註15) 工藤雅樹 1965 『陸奥国分寺出土の宝相花文鏡瓦の製作年代について』『歴史考古』第13号
 (註16) 高野芳公・熊谷公男 1978 『多賀城第二期の刻印文字瓦』『研究紀要V』宮城県多賀城跡調査研究所
 (註17) 市原市教育委員会 1998 『史跡上総国分尼寺跡 中門・同願復元事業報告書』

参考文献

- 伊東信雄編 1961 『陸奥国分寺跡』陸奥国分寺跡発掘調査委員会
 宮城県教育委員会 1980 『多賀城跡』政府跡図録編
 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡』政府跡本文編
 白鳥良一 1980 『多賀城跡出土土器の整理』『研究紀要VII』宮城県多賀城跡研究所
 伊東信雄 1973 『天平産金遺跡』復刻 仙台市教育委員会
 工藤雅樹 1981 『史跡陸奥国分寺跡』昭和55年度環境整備予備調査概報 仙台市文化財調査報告書第27集
 青沼一民・佐藤甲二 1984 『史跡陸奥国分寺跡』昭和58年度環境整備予備調査概報 仙台市文化財調査報告書第63集
 結城慎一 1981 『仙台市安養寺下窯跡の検討』『陸奥国官窯跡群IV』古窯跡研究会
 小川淳一 1987 『五本松窯跡』都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書第99集
 菅原祥夫 1996 『陸奥国府系瓦における造瓦組織の再編過程(1)』論集しのぶ考古

1トレンチ

層位	色	調	性質	備	考	
P102	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状砂	
	2	明黄褐色	10YR6/8	シルト	黒褐色シルトのブロックが混じる	
P158	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状砂	
	2	明黄褐色	10YR6/8	シルト	泥成層	
	3	黒褐色	10YR3/1	シルト	黒褐色上の小ブロックが混じる	
P201	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色粘土質シルトのブロックが混在	
	2	明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	灰黄褐色シルトのブロックが層状に混じる	
	3	暗褐色	10YR4/1	シルト	黄褐色上の小ブロックが混じる	
	4	明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	灰黄褐色シルトのブロックが混じる	
	5	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	柱状砂 炭化物片層かに混じる	
P202	1	黒褐色	10YR3/1	シルト	柱状砂 白色粘土。下面に厚さ2cmの炭化鉄片層あり	
	2	明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	明黄褐色上のブロック状に混じる	
	3	黒褐色	10YR3/4	シルト	黒褐色土少量混じる	
	4	灰白色	10YR8/2	粘土	柱状砂 炭化物少量混在	
P203	1	黒褐色	10YR3/1	シルト	明黄褐色土のブロックが多量混在	
	2	明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	黒褐色土のブロックが混じる	
	3	明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	黒褐色土が層かに混じる	
	4	黒褐色	10YR3/4	シルト	柱状砂 炭化物片と明黄褐色土が層かに混じる	
	5	灰白色	10YR8/2	粘土	柱状砂 下面に炭化鉄片層	
P204	1	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄褐色土ブロックを混に含む	
P101	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状砂	
	2	明黄褐色	10YR6/8	シルト	泥成層	
	3	黒褐色	10YR3/1	シルト	柱状砂	
P103	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状砂	
	2	黒褐色	10YR3/1	シルト	明黄褐色粘土質シルトのブロックが混じる	
	3	にぶい黄褐色	10YR7/2	砂質シルト	黒褐色シルトの小ブロックを混じる	
P150	1	明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	柱状砂 灰黄褐色シルトの小ブロック混じる	
	2	明黄褐色	10YR6/8	シルト	黒褐色土の小ブロックが混じる	

2トレンチ

層位	色	調	性質	備	考	
P105	1	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	明黄褐色土・炭化物粒を少量含む	
	2	黒褐色	10YR3/2	シルト質粘土	明黄褐色土・炭化物粒を少量含む	
P106	1	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む。炭化物を少量含む	
	2	黄褐色	10YR5/6	シルト質粘土	柱状砂 黒褐色のシルト質粘土を混雑に含む	

3トレンチ

層位	色	調	性質	備	考	
P107	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	明黄褐色土の小ブロックを少量に含む	
P108	①	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	明黄褐色土の小ブロックを混に含む	

4トレンチ

層位	色	調	性質	備	考	
P130	1	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層	
	2	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	泥成層	
	3	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層	
	4	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	明黄褐色土のブロックが混じる	
	5	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトのブロックが少量混在	
P129	1	暗褐色	10YR3/2	砂層	明黄褐色土の中に小ブロックが少量混在	
	2	黒褐色	10YR3/2	シルト	柱状砂 明黄褐色土のブロックが少量混在。層が混じる	
	3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	泥成層、層が混じる	
	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト	明黄褐色土のブロックが混じる。層が混じる	
	5	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	泥成層、層が混じる	
P131	1	灰黄褐色	10YR4/2	砂層	粗砂で礫主体。明黄褐色土のブロックが混じる	
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状砂 明黄褐色土のブロックが少量混在。炭化物片が少量混在	
	3	黒褐色	10YR3/2	シルト	泥成層	
	4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト		
	5	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層	
	6	黒褐色	10YR3/2	シルト		
	7	黒褐色	10YR3/2	シルト		
P132	①	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	泥成層、層が混じる	
	②	黒褐色	10YR3/2	シルト		
	③	明黄褐色	10YR7/6	シルト	褐色シルトのブロックと黒褐色シルトのブロックが混じる。層が混じる	
	④	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層、層が混じる	
	⑤	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黒褐色土と灰黄褐色土のブロックが混じる	
	⑥	暗褐色	10YR3/3	シルト	明黄褐色土のブロックが多量混在。黒褐色のブロックが少量混在	
	⑦	明黄褐色	10YR7/6	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混在	

第2表 ビット、柱状土層観察表1

	層位	色	調	性質	備 考
P100	①	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状跡・明黄褐色土のブロックが混じる
	②	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	明黄褐色土のブロックが混じる
	③	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	泥成層、黒褐色土が層状に見られる
		明黄褐色	10YR7/6	シルト	
	④	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	泥成層
		明黄褐色	10YR7/6	シルト	
		⑤	にぶい黄褐色	10YR5/3	
⑥		明黄褐色	10YR7/6	シルト	
暗褐色		10YR3/4	シルト		
⑦	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト		
P112	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	泥成層
	2	明黄褐色	10YR7/6	シルト	にぶい黄褐色土のブロックが混じる
	3	明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色土のブロックと砂礫が混じる
P133	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	柱状跡・明黄褐色土のブロックが少量混じる、礫も少量混じる
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土が少量混じる
	3	黒褐色	10YR3/2	シルト	泥成層、礫が少量混じる
	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層、礫が少量混じる
	5	黒褐色	10YR3/2	シルト	泥成層
	6	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層
P134	7	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	礫が少量混じる
	8	暗褐色	10YR3/4	砂礫	明黄褐色土が少量混じる
	①	暗褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色のシルトのブロックが少量混じる
	②	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトのブロックが少量混じる
	③	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトが層状に混じる
P113	1	明黄褐色	10YR6/6	シルト	泥成層
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト	柱状跡・明黄褐色土の粒状ブロックを含む
	3	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	
	4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	
5	黒褐色	10YR3/2	シルト		
P114	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	柱状跡・明黄褐色土を含む
	2	明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色のシルトを織状、ブロック状を含む、酸化鉄を含む
	3	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層
	4	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	黒褐色土、砂を混じる
P123	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状跡・明黄褐色土のブロックが多量に混じる
	2	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層
	3	黒褐色	10YR3/2	シルト	泥成層
	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト	
P124	①	黒褐色	10YR3/2	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混じる
	②	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトのブロックが少量混じる
	③	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層
	④	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトブロックが少量混じる
P121	1	明黄褐色	10YR6/6	シルト	黒褐色シルトが層状・粒状に混じる
	2	オリーブ灰色	10Y5/2	シルト	黒褐色のシルトが混じる
	3	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	にぶい黄褐色のシルトと灰黄褐色のシルトをブロック状に含む
P122	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	柱状跡・にぶい黄褐色シルトを含む
	2	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	黒褐色のシルトを粒状に含む
	3	オリーブ灰色	10Y5/2	シルト	黒褐色のシルトがブロックで混じる
	4	オリーブ灰色	10Y5/2	シルト	泥成層
P119	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	柱状跡・黄褐色のシルト質粘土ブロックを含む、酸化鉄を条痕状に含む
	2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色・黒褐色のシルト質粘土をブロックで含む、炭化物・酸化鉄を含む
P120	①	明黄褐色	10YR6/6	シルト	黒褐色シルトのブロックを含む
	②	明黄褐色	10YR6/6	シルト	暗褐色のシルトを織状に含む
	③	褐色	10YR4/4	シルト	明黄褐色土をブロック状に含む、黒褐色のシルトを織状に含む
	④	黄褐色	10YR6/6	シルト	褐色土が塊状に暗褐色のシルトと黒褐色のシルト質粘土のブロックを含む
	5	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	柱状跡・明黄褐色土のブロックを多量に含む
P117	1	明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土のブロックを多量に含む
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	暗褐色シルト質粘土のブロックを多量に含む
	3	明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土のブロックが多量に含む
	4	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土のブロックが混じる
	5	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	泥成層
	6	暗褐色	10YR3/2	粘土質シルト	
7	明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト		
P118	①	明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	灰黄褐色のシルト質粘土が塊状に混入する、黒褐色の粘土質シルトブロックが若干混じる
	②	黄褐色	10YR7/8	シルト	灰黄褐色のシルト質粘土が若干混入する
	③	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	粘土質シルトを少量含む
P116	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	柱状跡・礫が少量混じる、明黄褐色土のブロックが多量に混じる
	2	明黄褐色	10YR7/6	シルト	柱状跡・酸化鉄層が見られる
	3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混じる
	4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混じる
	5	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂礫	砂礫ブロックが混じる
	6	明黄褐色	10YR7/6	シルト	暗褐色土のブロックが混じる
P111	1	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	明黄褐色土・暗褐色シルトのブロックが多量に混じる

第3表 ビット、柱穴土層観察表2

ピットレンダ

層位	色	質	性質	備考
P110	1 灰青褐色	10YR4/2	シルト	泥炭層、炭化物を少量含む
	2 明黄褐色	10YR7/6	シルト	
	3 明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰青褐色シルトとぶい黄褐色シルトのブロックが層状に混在
P113	1 ぶい青褐色	10YR4/3	シルト	泥炭層
	2 黒褐色	10YR3/2	シルト	
	3 明黄褐色	10YR7/6	シルト	暗褐色シルトのブロックが層状に混在
P125	1 明黄褐色	10YR7/6	シルト	ぶい黄褐色の塊が少混在
	2 明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトを若干含む
	3 明黄褐色	10YR7/6	シルト	
P126	1 黒褐色	10YR3/2	シルト	泥炭層、黒色のシルトを層状に含む
	2 黒褐色	10YR3/2	シルト	泥炭層
	3 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層

ピットレンダ

層位	色	質	性質	備考
P144	1 黒褐色	10YR3/2	シルト	明黄褐色土のブロックを含む
	2 灰青褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土のブロック、黒褐色粘土質シルトのブロックを含む。マンガン・酸化鉄・糖を含む
P145	1 黒褐色	10YR3/2	シルト	柱状跡 黒色土と明黄褐色土のブロックが少量混在
	2 灰白色	10YR7/1	粘土	柱状跡 白色粘土。下に厚0.5cm程度の酸化鉄層
	3 黒褐色	10YR3/2	シルト	泥炭層
	4 黒色	10YR2/1	シルト	泥炭層
	5 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層
	6 明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトのブロックが混在
	7 ぶい青褐色	10YR4/3	砂	暗褐色シルトのブロックが混在 透気性粘土質シルトのブロックが混在
P146	1 黒褐色	10YR3/2	シルト	柱状跡 明黄褐色土のブロックが少量混在
	2 灰白色	10YR7/1	粘土	柱状跡 白色粘土層、下に厚さ0.5cmの酸化鉄層あり
	3 灰青褐色	10YR4/2	シルト	泥炭層
	4 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層
	5 灰青褐色	10YR4/2	シルト	黒褐色シルトのブロックが少量混在
	6 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層
	7 明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰青褐色土のブロックが少量混在
	8 明黄褐色	10YR7/6	シルト	互層
	9 ぶい黄褐色	10YR6/3	砂質シルト	糖を多量含む
	10 明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰青褐色シルトの細かいブロックが少量混在 黒色シルトが混在
P147	1 黒褐色	10YR3/2	シルト	柱状跡
	2 灰白色	10YR7/1	粘土	柱状跡 白色粘土。下に厚さ3mmの酸化鉄層
	3 黒褐色	10YR3/2	シルト	泥炭層
	4 灰青褐色	10YR4/2	シルト	
	5 明黄褐色	10YR7/6	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混在
	6 明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトのブロックが混在
	7 明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトのブロックが少量混在
P148	1 黒褐色	10YR3/2	シルト	明黄褐色土のブロックが少量混在、糖が少量混在
	2 黒褐色	10YR3/2	シルト	泥炭層、糖が少量混在
	3 明黄褐色	10YR7/6	シルト	
	4 黒褐色	10YR3/2	シルト	泥炭層
	5 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層、糖が少量混在
	6 黒褐色	10YR3/2	シルト	
	7 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層、糖が少量混在
P149	1 暗緑灰色	5G3/1	シルト	柱状跡 灰白シルトのブロックが混在
	2 黒褐色	10YR3/2	シルト	明黄褐色土のブロック、黒色シルトのブロックが混在
	3 暗緑灰色	5G4/1	シルト	暗緑灰色シルトのブロックが少量混在
	4 暗緑灰色	5G7/1	シルト	暗緑灰色シルトが少量混在
	5 暗緑灰色	5G3/1	シルト	暗緑灰色シルトのブロックが少量混在
	6 暗緑灰色	5G7/1	シルト	暗緑灰色シルトが少量混在
	7 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層、黒色シルトが少量混在
	8 明黄褐色	10YR7/6	シルト	
	9 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層、黒色土が少量混在
	10 明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥炭層

第4表 ピット、柱穴土層観察表3

トレンチ					
層位	色	産	性質	備 考	
P149	11	黒褐色	10YR3/2	シルト	泥成層
	12	明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色土と黒色土のブロックが少量混じる
	13	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層、黒色土のブロックが少量混じる
	14	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	泥成層
	15	明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトが少量混じる
トレンチ					
層位	色	産	性質	備 考	
P153	1	黒褐色	10YR3/1	シルト	柱状跡 明黄褐色土のブロックが混じる層
	2	黒褐色	10YR3/1	シルト	明黄褐色土のブロックが混じる
	3	黒褐色	10YR3/1	シルト	泥成層
	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト	明黄褐色土と黒色土のブロックが混じる
	5	黒褐色	10YR3/1	シルト	泥成層
	6	明黄褐色	10YR7/6	シルト	明黄褐色土上のブロックが少量混じる
	7	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層
	8	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	
	9	黒褐色	10YR3/1	シルト	明黄褐色土と黒色のブロックが混じる
	10	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色土が少量混じる
P154	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状跡 明黄褐色土上のブロックと礫が少量混じる
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	泥成層
	3	黒褐色	10YR3/2	シルト	
	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト	
	5	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトが少量混じる
	6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土の礫が多い層が少量混じる
	7	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトが多量混じる
	8	明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトが少量混じる、明黄褐色土のブロックが少量混じる
	9	明黄褐色	10YR7/6	シルト	明黄褐色土の礫が多い層が少量混じる
	10	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトが多量混じる
	11	明黄褐色	10YR7/6	シルト	泥成層
	12	明黄褐色	10YR7/6	シルト	黒褐色シルトが少量混じる
	13	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土上のブロックが少量混じる
P155	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱状跡 明黄褐色土のブロック・黒色土のブロックが少量混じる
	2	灰白色	10YR8/1	粘土	柱状跡 黒褐色土が少量混じる
	3	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	明黄褐色土・黒色土が混じる
	4	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色シルトが混じる
	5	明黄褐色	10YR7/6	シルト	灰黄褐色土上のブロックが少量混じる
トレンチ					
層位	色	産	性質	備 考	
P215	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色土の細粒が混じる
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黒色土ブロックがわずかに混じる、浅黄褐色粘土質シルトブロックが多量に混じる
	3	浅黄褐色	10YR6/4	粘土質シルト	互層黒色土の細粒が混じる
	4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土と黒色土のブロックが混じる
	5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土の細粒およびブロックが少量混じる
	6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	明黄褐色土の細粒を多量に、ブロックも少量混じる
トレンチ					
層位	色	産	性質	備 考	
F307	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	ヤケグライ化
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	礫の層、底面付近に黒褐色土が入る
	3	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
	4	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	粒状になりスジ状に入る
F307	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト		
	黄褐色	10YR5/8	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を粒・スジ状に含む	
穿き調査区					
層位	色	産	性質	備 考	
PA	1	黄褐色	10YR5/8	シルト	褐色土の大きなブロックを含む、礫も少量含む
PB	1	黄褐色	10YR5/6	シルト	黒褐色土の細かいブロックを多量に含む金床内に埋い
PC	1	黄褐色	10YR5/6	シルト	細かい黒褐色土のブロックを多量に含む金床内に埋い
PD	1	黄褐色	10YR5/6	シルト	大きな褐色土上のブロックを含む
PE	1	灰色	2.5Y7.8/6	シルト質粘土	黒褐色粘土を多量に含む
PF	1	黒褐色	2.5Y3/2	シルト質粘土	柱状跡 グライ化、黄褐色土状を少量含む
	2	灰色	2.5Y7.8/6	シルト質粘土	黒褐色粘土をブロック状に含む、非常にしまっている
PG	1	灰色	2.5Y7.8/6	粘土	黒褐色粘土を少量含む

第5表 ビット、柱穴土層観察表4

写真図版



写真図版 1 陸奥国分尼寺跡航空写真（昭和22年）



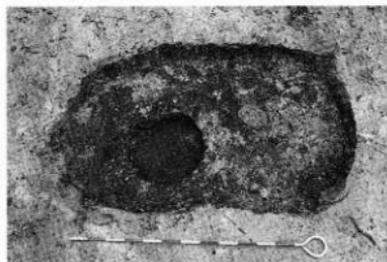
写真図版 2 陸奥国分尼寺金堂跡現況（南西から）



1トレンチ西側全景 (西から)



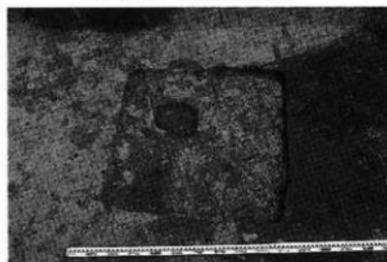
1トレンチ中央柱穴群検出 (東から)



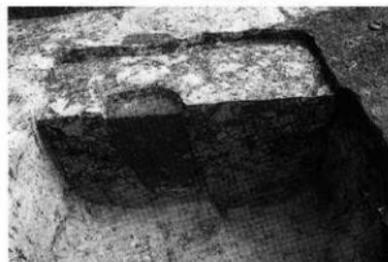
1トレンチP101検出 (南西から)



1トレンチSB3柱穴列検出 (南から)



1トレンチP202柱痕跡検出 (西から)



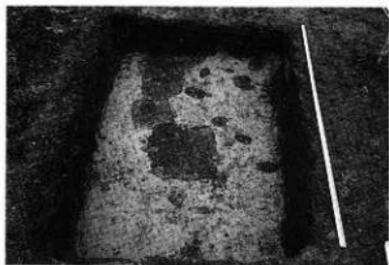
1トレンチP202断置 (西から)



1トレンチ東端出土軒丸瓦 (北から)



2トレンチ北側遺構検出 (西から)



2 トレンチ南側遺構検出 (西から)



3 トレンチ遺構検出 (東から)



3 トレンチP108・P109検出 (南から)



4 トレンチ西側建物跡検出 (東から)



4 トレンチ中央建物跡検出 (東から)

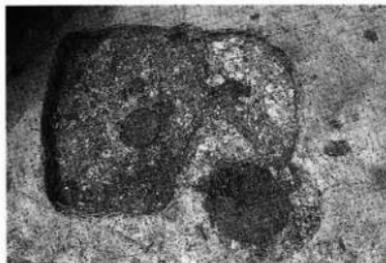


4 トレンチ東側建物跡検出 (西から)



4 トレンチP109・P112掘り下げ (北から)

写真図版 4



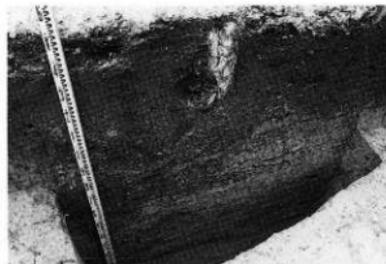
4トレンチP113・P114 検出 (東から)



4トレンチP113断面 (東から)



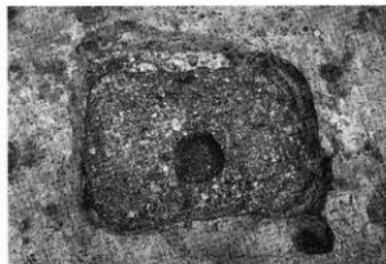
4トレンチP113完掘 (東から)



4トレンチP115断面 (北から)



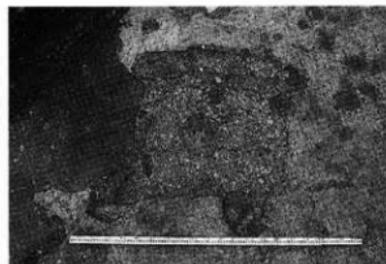
4トレンチP117柱痕跡確認 (西から)



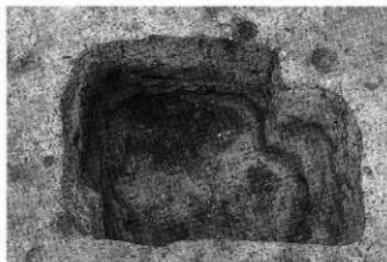
4トレンチP119柱痕跡確認 (南から)



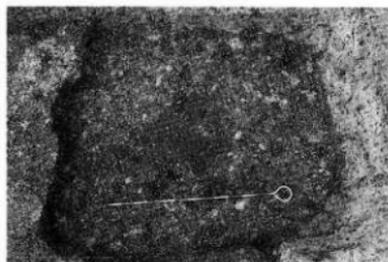
4トレンチP121柱痕跡確認 (南から)



4トレンチP123柱痕跡確認 (南から)



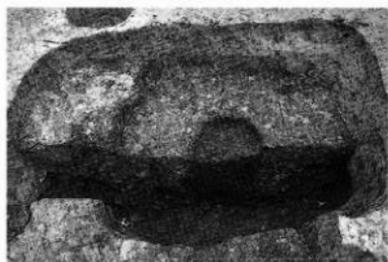
4 トレンチP121・P122完掘 (南から)



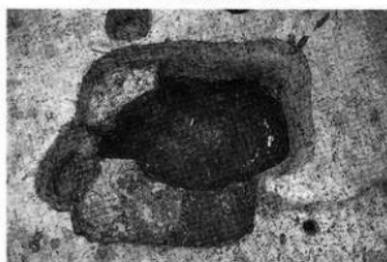
4 トレンチP129検出 (南から)



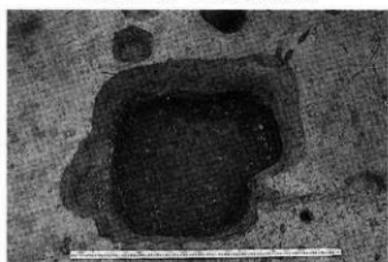
4 トレンチP129柱痕跡確認 (南から)



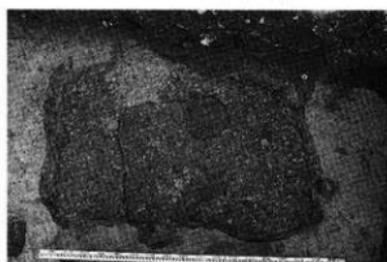
4 トレンチP129・P130断面 (南から)



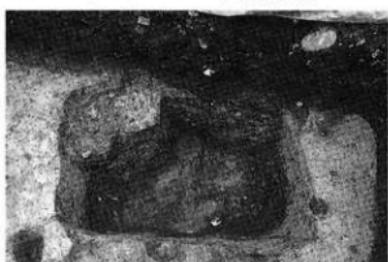
4 トレンチP129完掘 (南から)



4 トレンチP129・P130完掘 (南から)

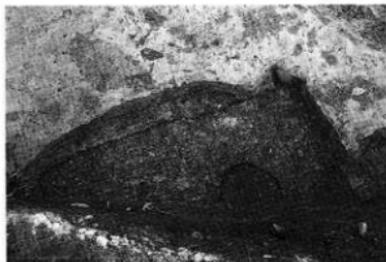


4 トレンチP131柱痕跡確認 (南から)

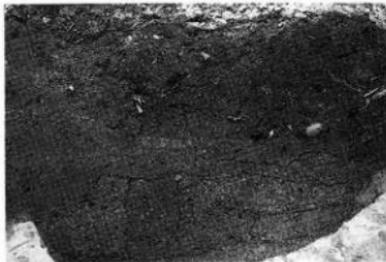


4 トレンチP131完掘 (南から)

写真図版 6



4 トレンチP133柱痕跡確認 (南から)



4 トレンチP133・P134断面 (南から)



4 トレンチP133・P134完掘 (北から)



5 トレンチ西側遺構検出 (東から)



5 トレンチ西側遺構完掘 (南から)



5 トレンチP145検出 (南から)



5 トレンチP145断面 (北西から)



5 トレンチP145断面 (北から)



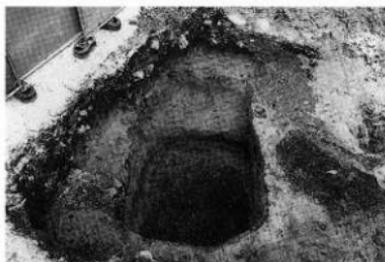
5 トレンチ東半全景 (東から)



5 トレンチ東半の東端全景 (西から)



5 トレンチP146断面 (東から)



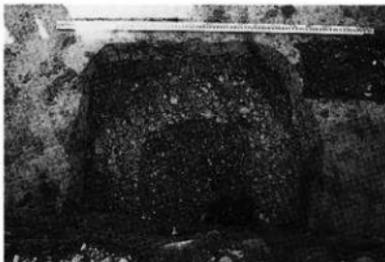
5 トレンチP146完掘 (南から)



5 トレンチP147断面 (北から)



5 トレンチP148断面 (北から)



5 トレンチP149検出 (南から)

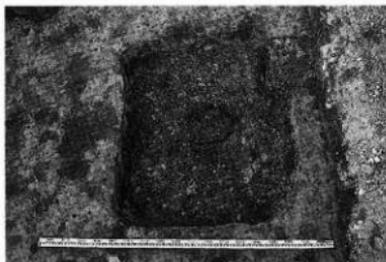


5 トレンチP149断面 (北西から)

写真図版 8



6 トレンチ柱穴群検出 (南から)



6 トレンチP154柱痕跡確認 (南から)



6 トレンチP154断面 (南から)



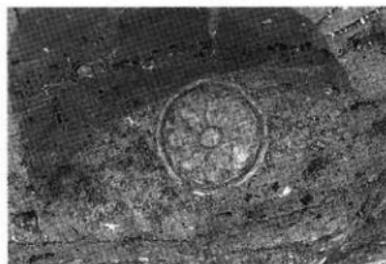
6 トレンチ遺構完掘 (南から)



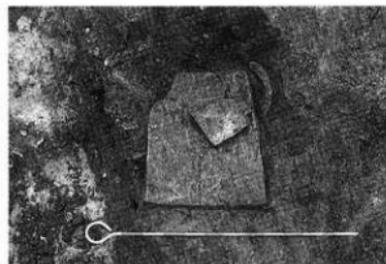
7 トレンチ遺構検出 (東から)



7 トレンチSK156遺物出土 (東から)



7 トレンチSK156出土軒丸瓦 (北から)

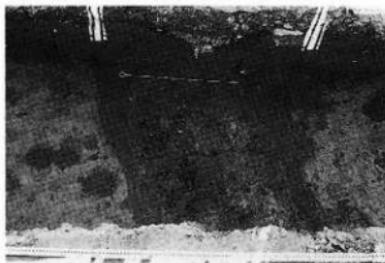


7 トレンチSK156出土平瓦 (北東から)

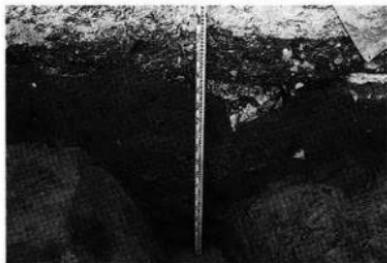
写真図版 9



8 トレンチ遺構検出 (東から)



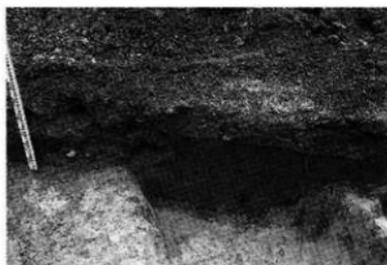
8 トレンチSD157検出 (南から)



8 トレンチSD157断面 (南から)



9 トレンチ遺構検出 (西から)



9 トレンチSX207断面 (北から)



10 トレンチ遺構検出 (東から)



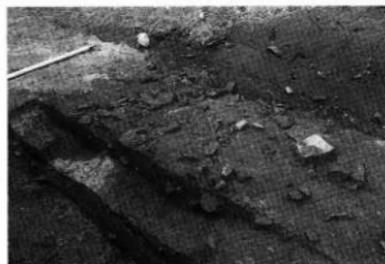
11 トレンチ遺構検出 (東から)



11トレンチSX210断面 (南から)



12トレンチ遺構検出 (東から)



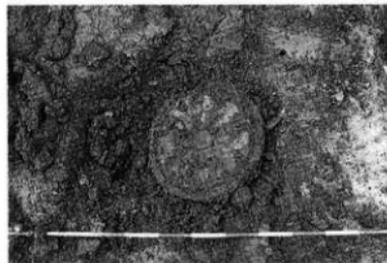
12トレンチSX216出土瓦群 (南から)



12トレンチSX216出土軒平瓦 (南から)



12トレンチSX216上層出土軒丸瓦 (南から)



12トレンチSX216下層出土軒丸瓦 (北から)



13トレンチ遺構検出 (南から)

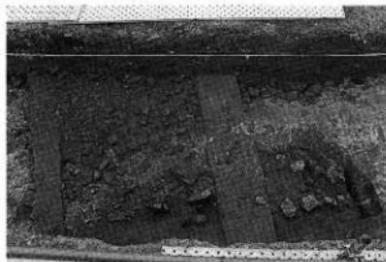


14トレンチ調査区西側 (東から)

写真図版11



14トレンチ調査区（西から）



14トレンチSD310・SD311遺物出土（北から）



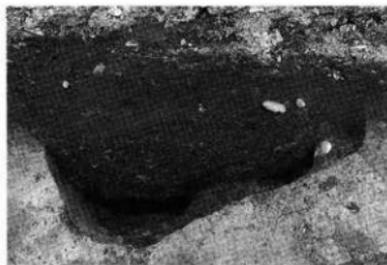
14トレンチSD310断面（東から）



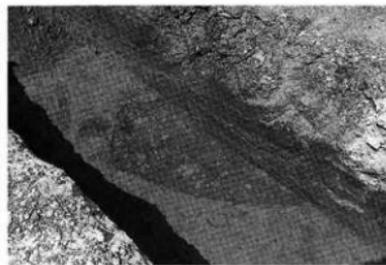
14トレンチSK304断面（南から）



14トレンチSK301南壁断面（北から）



14トレンチP307断面（南から）



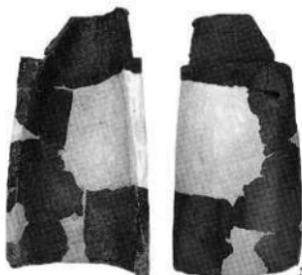
立ち会い調査P.C検出（南から）



1



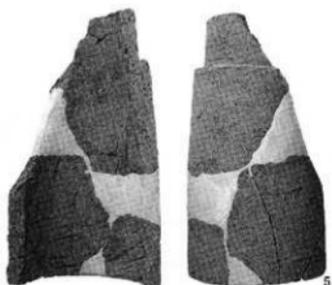
2



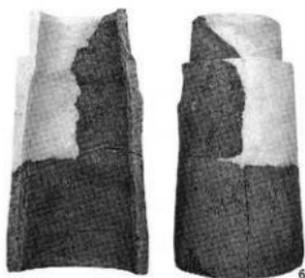
3



4



5



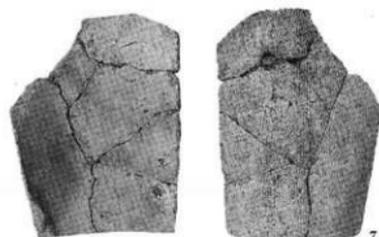
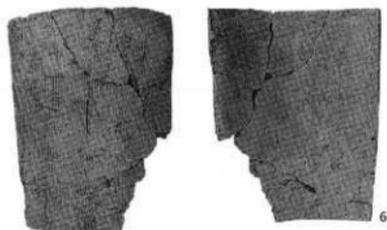
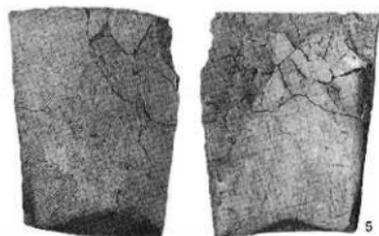
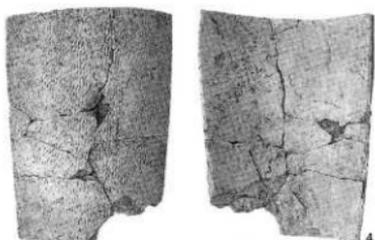
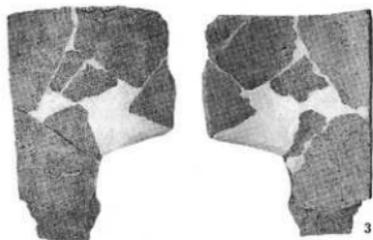
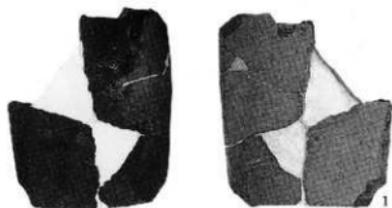
6



7

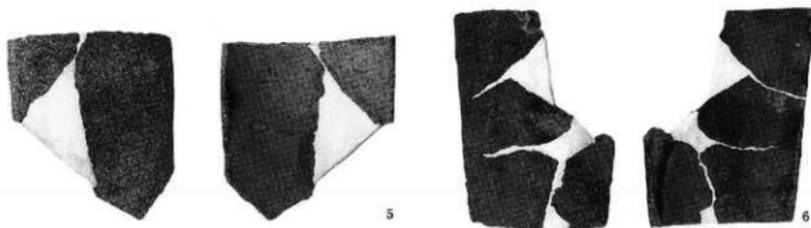
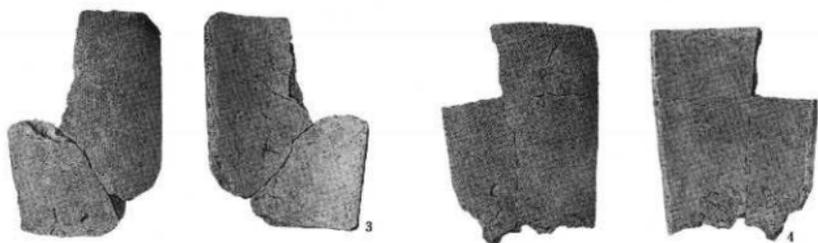
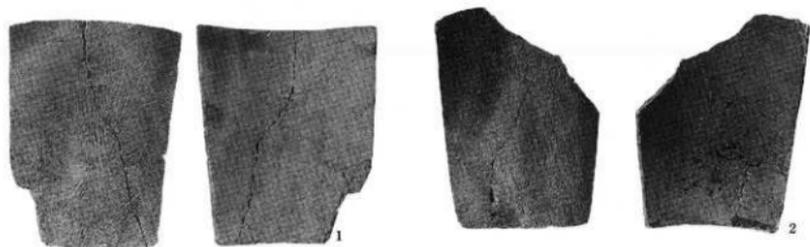
- 1 第59図-4
2 第50図-10
3 SK-156・2層
4 第20図-4
5 第35図-3
6 第33図-2
7 第34図-1

写真図版13 出土遺物1



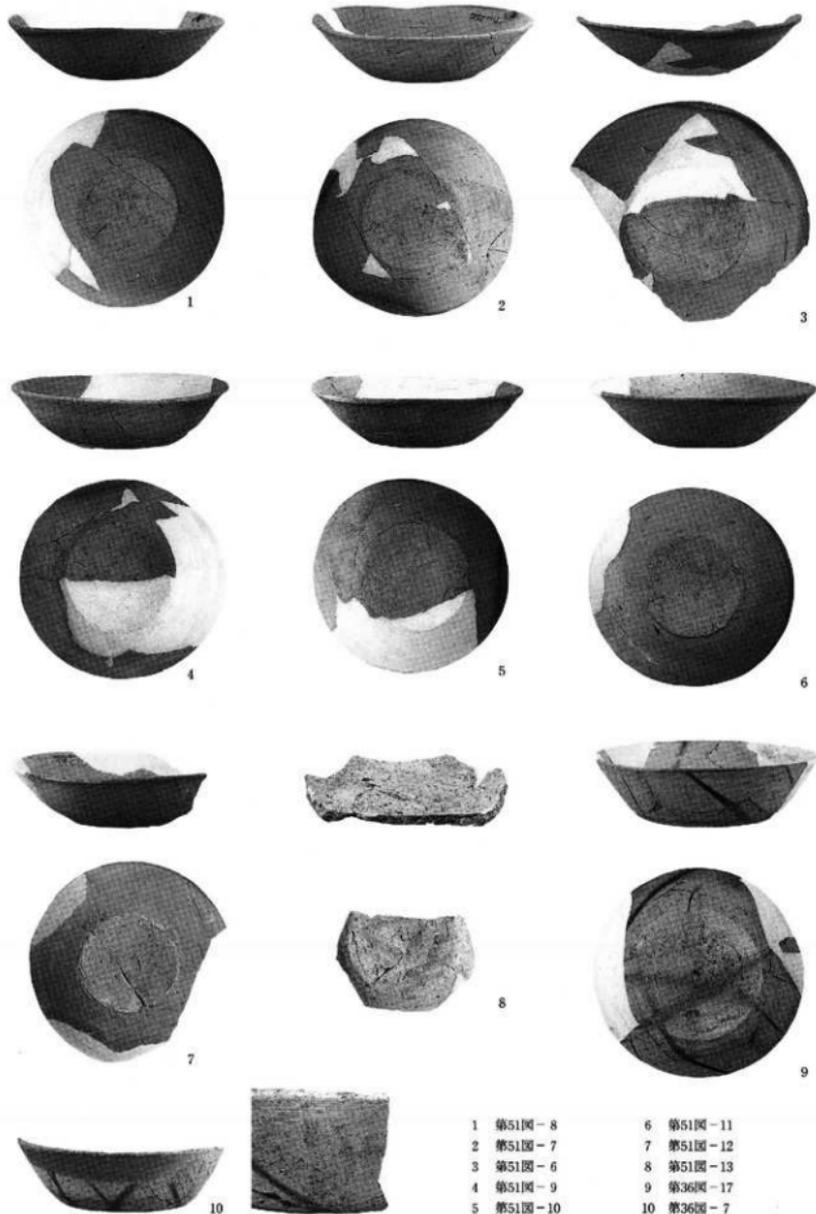
- 1 第28回 - 2
- 2 第8回 - 2
- 3 SK-156・4層
- 4 第28回 - 1
- 5 第31回 - 2
- 6 第29回 - 2
- 7 第33回 - 1

写真図版14 出土遺物2



- 1 第32回-1
- 2 第30回-1
- 3 SK-156・2層
- 4 第19回-3
- 5 14トレ基本層2層
- 6 第31回-1
- 7 第32回-1

写真図版15 出土遺物3



写真图版16 出土遗物4



1



2



3



4



5



6



7



8



9



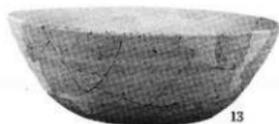
10



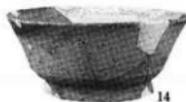
11



12



13



14



15

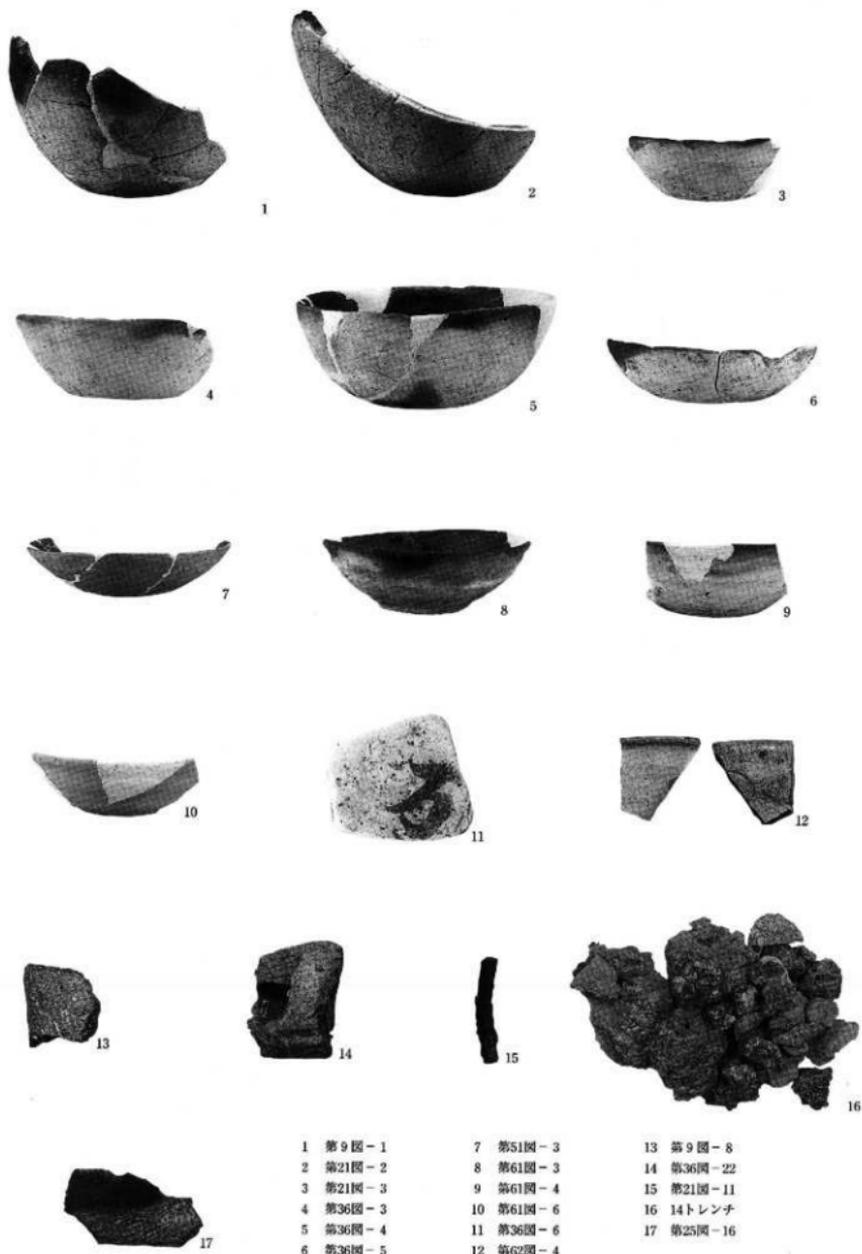
1 第9図-5
2 第61図-12
3 第61図-15
4 第61図-14

5 第62図-2
6 第62図-3
7 第36図-9
8 第36図-10

9 第36図-11
10 第36図-14
11 第36図-15
12 第36図-18

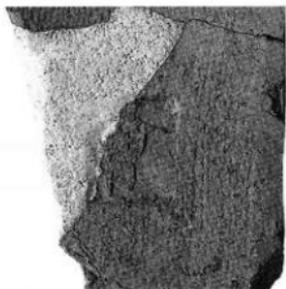
13 第36図-20
14 第36図-21
15 1トレ基本層

写真図版17 出土遺物5



1 第9図-1	7 第51図-3	13 第9図-8
2 第21図-2	8 第61図-3	14 第36図-22
3 第21図-3	9 第61図-4	15 第21図-11
4 第36図-3	10 第61図-6	16 14トレンチ
5 第36図-4	11 第36図-6	17 第25図-16
6 第36図-5	12 第62図-4	

写真図版18 出土遺物6



1



2



3



4



5

- 1 第59区-3
- 2 第8区-2
- 3 第59区-6
- 4 第58区-8
- 5 第35区-4

写真图版19 出土遺物7

報告書抄録

ふりがな	むつこくぶんにじあと							
書名	陸奥国分尼寺跡							
副書名	第10次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第286集							
編著者名	渡部 弘美 ・ 中山 純							
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL 022-214-8894							
発行年月日	平成17年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
むつこくぶんにじ 陸奥国分尼寺	むつこくぶんにじ 仙台市 若林区 白萩町 みやぎのく 宮城野区 みやちよ 宮千代	04100	01020	38°14'55"	140°54'48"	2001.08.28 ～ 2004.03.05	830㎡	都市計画道路「清水小路多賀城線」の拡幅工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
陸奥国分尼寺跡	寺院跡	奈良時代	樹立柱建物跡 土坑 溝跡		軒丸瓦・軒平瓦・ 丸瓦・平瓦・土師器・ 須恵器・フイゴの羽山・ 鉄滓		金堂跡の北方に掘立柱 建物跡が2棟確認された。 尼坊の可能性が考えられる。 寺城の東西の区画は不明である。 遺物としては、大量の瓦が出土した。また、 悪書のある土師器・須 恵器も出土した。	

仙台市文化財調査報告書第286集

陸奥国分尼寺跡

—第10次発掘調査報告書—

2005年3月

発行 **仙台市教育委員会**

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893・8894

印刷 **川口印刷工業株式会社**

盛岡市羽場10-1-2

TEL. 019(632)2211
